市原市門脇遺跡

——高滝導水管事業に伴う埋蔵文化財調査報告書——

1985

千葉県水道局
財団法人 千葉県文化財センター

市原市門脇遺跡

――高滝導水管事業に伴う埋蔵文化財調査報告書――

1985

千葉県水道局
財団法人 千葉県文化財センター

序　　文

千葉県の中央部に位置する市原市は、西は東京湾に面し，南には房総丘陵が広がり、恵まれた自然環境のもと数多くの遺跡が所在しています。

近年、京葉地区のなかで重要な位置を占める当地域における開発は著しく、それに伴う水需要は増大の一途をたどっています。このような状況に対応するため、千葉県水道局では、新たな水資源を確保すべく建設した高滝ダムの取水場から、福増の浄水場をむすぶ導水管の埋設工事を計画しました。

このため千葉県教育委員会では、導水管埋設工事予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県水道局をはじめ、関係諸機関と慎重に協議を重ねた結果、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は、千葉県教育委員会の指導のもとに、財団法人千葉県文化財センターが昭和59年度事業として60年１月から３月にかけて実施しました。

このたび、門脇遺跡の整理作業が終了し、その成果を「市原市門脇遺跡」として刊行する運びとなりました。

発掘調査では竪穴住居跡16軒をはじめ、「里長」と墨書された須恵器などが検出されました。これらの遺構や遺物は、養老川流域の歴史を解明していく上で重要な資料となるものです。

本書が学術的な資料としてはもとより、多くの方々が、郷土の歴史に対する理解を深めるために活用されることを望んでやみません。

最後に地元関係者、千葉県水道局、千葉県教育委員会、市原市教育委員会の御協力、御指導に深く御礼を申し上げるとともに、協力された多くの調査補助員の皆様に対して、心から謝意を表します。

昭和60年12月

財団法人　千葉県文化財センター
理事長　　山　本　孝　也

例　　言

1．本書は、千葉県水道局による高滝導水管埋設工事の実施に伴い調査した、市原市磯ケ谷に所在する間脇遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘作業及び整理作業は、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県水道局との委託契約に基づき、財団法人千葉県文化財センターが実施した。

3．発掘作業及び整理作業は、調査部長鈴木道之助のもとに下記の職員がこれにあたった。

（発掘調査　昭和60年1月1日～同年3月31日）

部長補佐　岡川宏道

班　　長　古内　茂

調査研究員　小林清隆　萩原恭一

（整理作業　昭和60年6月1日～同年8月31日）

部長補佐　古内　茂（班長兼任）

調査研究員　小林清隆

4．本書の執筆は主に小林があたり、II－4の石器について主任調査研究員田村　隆が、II－3の瓦については調査研究員今泉　潔が行なった。

5．本遺跡のコード番号は、219（市町村コード）－031（遺跡コード）とした。

6．本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1：25,000海士有木（千葉16号－1）、鶴舞（千葉16号－2）、姉崎（千葉16号－3）、上総横田（千葉16号－4）である。

7．本書に使用した空中写真は、京葉測量（株）の提供になるものである。

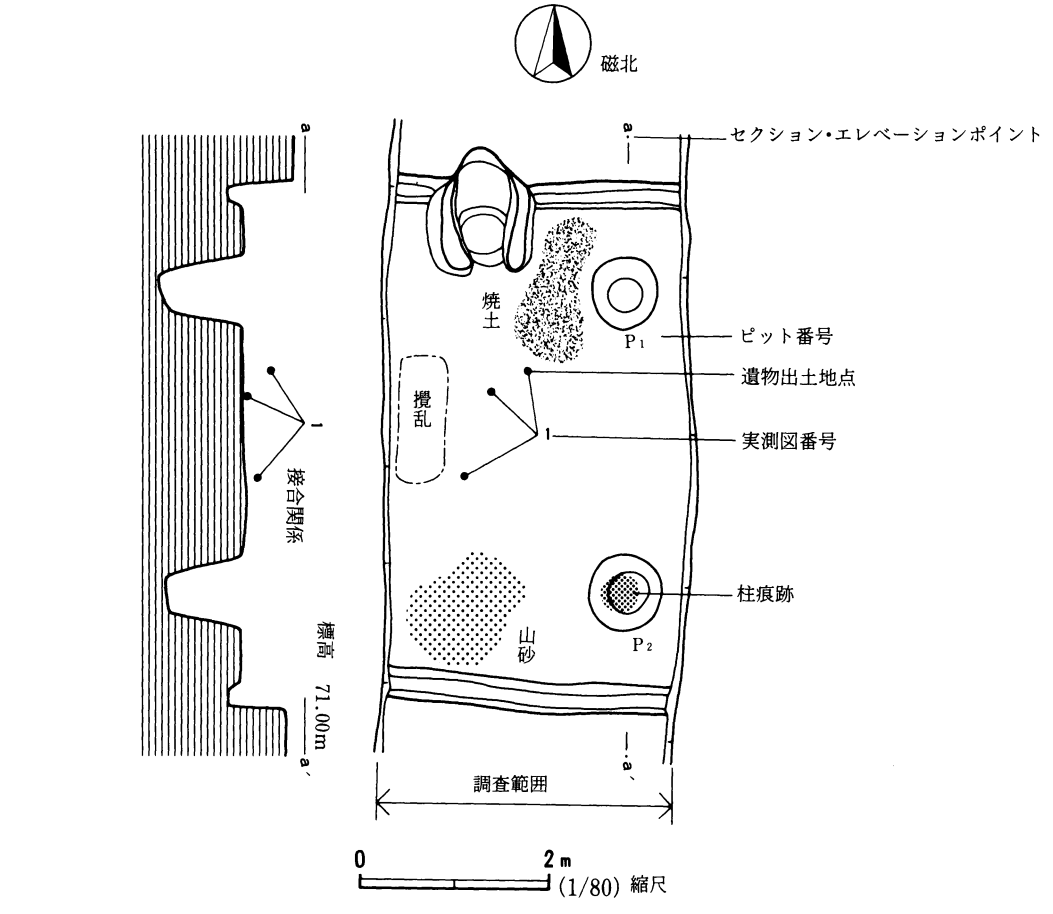
8．発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県水道局、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会の関係者各位をはじめ多くの方々から御指導、御協力を賜わりました。ここに謝意を表します。

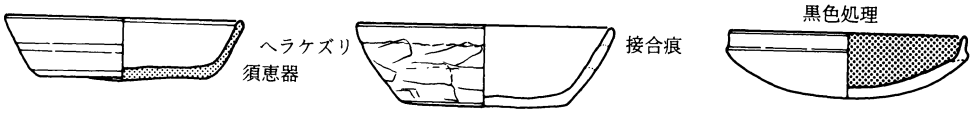
凡　　例

○　本書に使用した図面の方位は磁北とし、第２図については座標北とした。

○　遺構番号は、調査順に一連番号とし、種類ごとに番号の前にアルファベット記号を付けた。

ＳＩ＝竪穴式住居跡　ＳＢ＝掘立柱建物跡　ＳＤ＝溝状遺構　ＳＦＰ＝炉穴　ＳＫ＝土坑





本 文 目 次

序　文
例　言
凡　例
I　序　章
1　遺跡の立地と周辺の遺跡…… 1
2　調査の経過と方法…… 5
3　調査の概要…… 7
II　検出した遺構と遺物
1　住居跡と出土遺物…… 9
2　掘立柱建物跡と出土遺物…… 42
3　溝状遺構と出土遺物…… 43
4　炉穴と出土遺物…… 48
5　土坑と出土遺物…… 54
6　グリッド出土遺物……61
III　ま と め
1　遺物について ……66
2　遺構について ……69

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置と周辺地形（1/50,000）…… 2
第２図　遺跡地形図（1/5,000）…… 4
第３図　遺構配置図…… 6
第４図　調査区内土層柱状図…… 8
第５図　ＳＩ－001号跡・出土遺物実測図 …… 10
第６図　ＳＩ－002号跡実測図 …… 12
第７図　ＳＩ－002号跡カマド実測図 …… 13
第８図　ＳＩ－002号跡出土遺物実測図 …… 13
第９図　ＳＩ－003号跡実測図 …… 14
第10図　ＳＩ－003号跡出土遺物実測図 …… 15
第11図　ＳＩ－004号跡・出土遺物実測図 …… 16
第12図　ＳＩ－005号跡実測図 …… 18
第13図　ＳＩ－005号跡出土遺物実測図 …… 19
第14図　ＳＩ－006号跡・出土遺物実測図 …… 21
第15図　ＳＩ－007・008号跡実測図、ＳＩ－008号跡出土土器拓影図 …… 23
第16図　ＳＩ－009号跡実測図 …… 24
第17図　ＳＩ－009号跡カマド実測図 …… 25
第18図　ＳＩ－009号跡遺物出土状況・出土遺物実測図① …… 27
第19図　ＳＩ－009号跡出土遺物実測図② …… 28
第20図　ＳＩ－010号跡実測図、出土土器拓影図 …… 29
第21図　ＳＩ－011号跡実測図 …… 30
第22図　ＳＩ－012号跡実測図 …… 31
第23図　ＳＩ－012号跡掘り方・出土遺物実測図 …… 33
第24図　ＳＩ－013号跡実測図 …… 35
第25図　ＳＩ－013号跡カマド実測図 …… 36
第26図　ＳＩ－013号跡出土遺物実測図 …… 36
第27図　ＳＩ－014号跡実測図 …… 37
第28図　ＳＩ－014号跡出土遺物実測図 …… 39
第29図　ＳＩ－015号跡・出土遺物実測図 …… 40
第30図　ＳＩ－016号跡実測図 …… 41

第31図　ＳＩ－016号跡出土遺物実測図 ……42
第32図　ＳＢ－001号跡実測図 ……43
第33図　ＳＤ－001号跡・出土遺物実測図 ……44
第34図　ＳＤ－002・003・004号跡実測図、ＳＤ－002号跡出土遺物実測図……46
第35図　ＳＤ－005・006号跡実測図……47
第36図　ＳＤ－007号跡実測図 ……49
第37図　ＳＦＰ－001号跡実測図 ……50
第38図　ＳＦＰ－001号跡出土土器拓影図 ……50
第39図　ＳＦＰ－001号跡出土石器実測図、模式図……51
第40図　ＳＦＰ－002号跡実測図 ……53
第41図　ＳＫ－001・002号跡実測図……55
第42図　ＳＫ－003号跡実測図 ……56
第43図　ＳＫ－004・005・006・007号跡実測図……57
第44図　ＳＫ－006号跡出土土器拓影図 ……58
第45図　ＳＤ－008号跡実測図 ……59
第46図　ＳＤ－008号跡出土土器拓影図 ……60
第47図　グリッド出土縄文式土器拓影図①……62
第48図　グリッド出土縄文式土器拓影図②……64
第49図　グリッド出土石器実測図……65
第50図　土師器杯分類図……67

図　版　目　次

図版１　門脇遺跡と周辺の航空写真
図版２　１．遺跡遠景
　　２．遺跡近景（調査終了後北から）
　　３．遺跡近景（調査終了後南から）
図版３　１．遺構検出作業（Ⅺ区、南から）
　　２．遺構検出状況（Ⅴ区、南から）
　　３．遺構検出状況（Ⅸ区、南から）
図版４　１．ＳＩ－001号跡（南から）
　　２．ＳＩ－001号跡遺物出土状況
　　３．ＳＩ－002号跡（南から）
　　４．ＳＩ－002号跡カマド検出状況及び遺物出土状況
図版５　１．ＳＩ－003号跡（南から）
　　２．ＳＩ－004号跡（南から）
　　３．ＳＩ－005・ＳＤ－001号跡（南から）
　　４．ＳＩ－006号跡（南から）
図版６　１．ＳＩ－007・008号跡遺物出土状況（南から）
　　２．ＳＩ－007号跡（西から）

3．ＳＩ－008号跡（東から）
図版７　1．ＳＩ－009・010号跡（南から）
2．ＳＩ－009号跡カマド土層断面
3．ＳＩ－010号跡炭化材検出状況
図版８　1．ＳＩ－012号跡（南から）
2．ＳＩ－012号跡掘り方
3．ＳＩ－012号跡柱穴
図版９　1．ＳＩ－013号跡（南から）
2．ＳＩ－004・ＳＤ－007号跡（南から）
3．ＳＩ－014号跡遺物出土状況（北西から）
図版10　1．ＳＩ－015号跡（南西から）
2．ＳＩ－016・ＳＫ－007号跡（南から）
3．ＳＢ－001号跡（南から）
図版11　1．ＳＦＰ－001号跡（南から）
2．ＳＦＰ－002号跡（西から）
3．ＳＫ－001号跡（西から）
図版12　1．ＳＫ－002号跡（西から）
2．ＳＫ－003号跡（西から）
3．II区内土坑全景（南から）
図版13　1．ＳＤ－008号跡（南から）
2．ＳＤ－002号跡（南西から）
3．ＳＤ－004号跡（東から）
4．ＳＤ－003号跡（東から）
5．ＳＤ－005号跡（西から）
図版14　ＳＩ－001・002・003・005号跡出土遺物
図版15　ＳＩ－005－4墨書、ＳＩ－005・006・009号跡出土遺物
図版16　ＳＩ－009・012号跡出土遺物
図版17　ＳＩ－013・014号跡出土遺物
図版18　ＳＩ－014・016号跡出土遺物
図版19　1．ＳＩ－008号跡出土土器
2．ＳＩ－010号跡出土土器
3．ＳＫ－006号跡出土土器
図版20　ＳＤ－001・002号跡出土遺物，ＳＦＰ－001号跡出土遺物
図版21　ＳＤ－008号跡出土遺物
図版22　グリッド出土土器①
図版23　1．グリッド出土土器②
2．グリッド出土石器

I 序　　章

1　遺跡の立地と周辺の遺跡

立地　門脇遺跡は市原市磯ケ谷字門脇８番地他に所在する遺跡である。市原市は千葉県の中央部からやや南寄りに位置する市で、南北に36kmと細長い市域を呈している。市の北端は千葉市との間を流れる村田川に接し、西は東京湾に面し、また、南は木更津市、君津郡と境を置く。そうした市の中ほどを著しい蛇行をみせながら流れているのが、清澄山渓に源を発する養老川である。この養老川の中流から下流に差し掛かるあたり、その右岸の標高70～72mを測る台地上に遺跡は立地している。遺跡から現在流れている養老川までは、西に直線距離にして約３kmである。小湊鉄道上総山田駅と養老川との中間の沖積地の標高が12mであるので、本跡との比高は58～60mを測ることになる。また、河岸段丘上に開けたと考えられる磯ケ谷の集落中心部での標高が21mで、そことは約50mの比高を有することになる。したがって、遺跡から養老川方面への眺望は良好で、左岸の光風台方面を望むことができる（第１図参照）。

第２図に見るとおり、遺跡は複雑に入り込む谷によって独立した台地の景観を示している。本跡の北側にもう一カ所の平坦部が認められるが、その間は東側からの谷の形成により尾根状の地形となっている。一応この尾根状の部分によって、北側の台地と本跡の立地する台地とは画されているといえるだろう。このやせ尾根状の中間が今回行なった調査の調査区北端となっている。これより南側に広がる遺跡について門脇遺跡と呼んでおくことにしたい。その遺跡の広がりは、南北350m、東西100～200mの範囲に認められる平坦部全域に及ぶものと考えられる。それは一部林となっているものの、畑の至るところに散布する土器片から容易に推察することができる。また、東側は谷に向かって急激に傾斜しているが、西側ではゆるやかに張り出しながら下っているところもある。そうしたところではさらに斜面にまで遺跡の広がりが及ぶ可能性がある。

周辺の遺跡　養老川流域は、自然環境に恵まれ、先土器時代から歴史時代にわたる数多くの遺跡が所在している。特に養老川下流域の上総国分寺台の遺跡群では組織的な調査が続けられ、大きな成果を上げていることは広く知られるところである（注１）。本遺跡周辺においては、下流域ほどの遺跡の密集は認められないものの、各時代において特徴的な遺跡が点在している。

先土器時代では、養老川流域で初めて遺物包含層を明らかにした南原遺跡（注２）が注目される。調査面積が狭かったため、石器はソフトローム層から切出形石器、台形石器、削器が少量出土したにとどまるが、先土器時代の調査の端を開いた遺跡として重要である。また、断片的な資料ながら、土宇遺跡（注３）で掻器、削器、剝片が出土しており、萩の原遺跡（注４）でも有舌尖頭器と削器が各１点ずつ報告されている。このように当地域の先土器時代の研究は

第1図　遺跡の位置と周辺地形（1/50,000）

1．**門脇遺跡**　2．武士遺跡　3．川在遺跡　4．二日市場廃寺跡
5．土宇遺跡群　6．中高根古墳群　7．南原遺跡　8．萩ノ原遺跡

端緒についたばかりといえ、今後の調査に期待するところが大きい。

縄文時代は草創期の遺跡として、先にあげた南原遺跡がある。出土遺物のうち石器は草創期初頭のセットを知るうえで良好な資料である。器種は有舌尖頭器、木葉形尖頭器、端削器が認められる。土器は隆起線文土器で、特徴により、刺突ないし刻みによる連鎖状の隆起線が施文されるものと、押圧による波状の隆起線文が施文されるものとの二つに分けられている。撚糸文期以降条痕文にかけての土器は土宇遺跡で出土し、沈線文系の田戸下層式が萩ノ原遺跡で検出されている。前期については今までのところまとまった資料を欠き、萩ノ原遺跡で浮島式、興津式、十三菩提式が僅かに認められる程度となっている。中期の代表的な遺跡は、加曽利E期の住居跡20軒を検出した土宇遺跡である。土坑も多数検出されており、房総半島の最も南で調査された、加曽利E期後半の集落となっている。後期は、堀之内期の集落の一部が武士遺跡（注5）で調査され、本遺跡に近接する川在遺跡（注6）では、採集資料であるが、称名寺式、堀之内式、加曽利B式、曽谷式、安行Ⅰ・Ⅱ式の土器が得られている。

当地域の弥生時代中期後半の遺跡は明らかになっていない。生活の営みの跡が顕著に現われるのは後期に入ってからである。武士遺跡、土宇遺跡で久ケ原期の住居跡の検出をみるが、住居跡85軒が発見された土宇遺跡は、養老川中流域のなかで拠点的な集落ととらえられる。

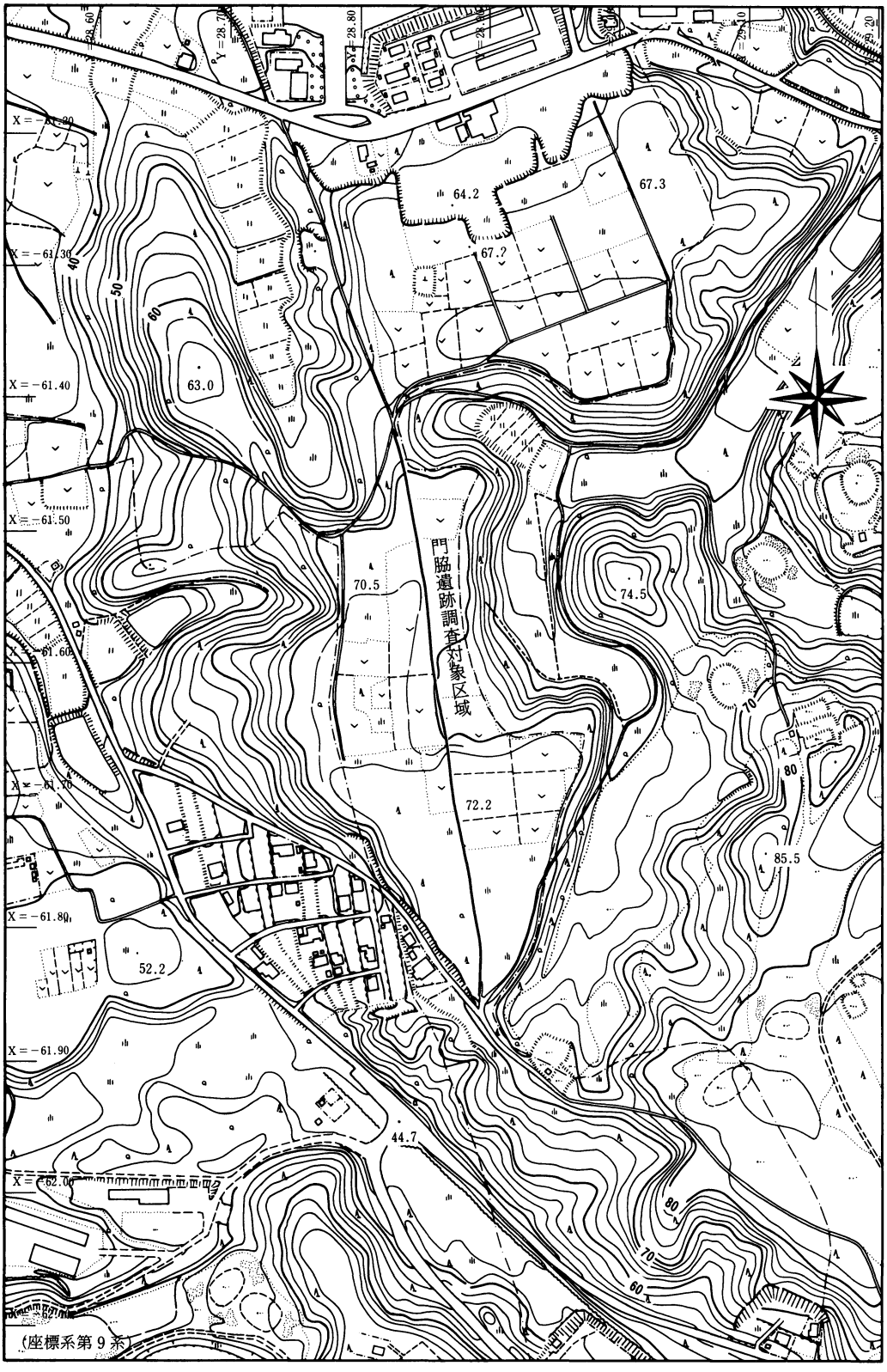
古墳時代では養老川の両岸に古墳群が認められる。左岸の台地上には開発によってそのほとんどが削平されてしまった中高根古墳群（注7）が所在する。同古墳群は墳長約60mの前方後円墳1基と円墳12期からなり、規模の大きなものが目立ち、養老川中流域南岸の盟主的グループと考えられている。一方右岸では円墳を主に形成される土宇古墳群が残されている。また、本遺跡の周辺を地元では「べったら塚」と呼んでおり、古墳や近世の塚が多く所在するところである。

こうした古墳群の成立とその後の政治的動向は今後の課題であるが、二日市場廃寺跡（注8）や萩ノ原廃寺跡などの古代寺院の存在は示唆的である。二日市場廃寺跡は本遺跡の西に位置し、出土した紀寺式軒丸瓦から7世紀終末の創建と考えられている。

以上一瞥しただけでも判るように、これまで等閑視されていた観のある当地域も、養老川流域のなかで重要な位置を占めていたことが窺われる。

注

1　国分寺台遺跡群は、養老川下流域の北岸に立地し、市原市国分寺台土地区画整理事業に伴い昭和47年から組織的な調査が行なわれている。遺跡の時代は先土器時代から歴史時代にわたり、国史跡の上総国分僧寺跡、同じく国分尼寺跡をはじめ、神門4・5号墳、西広貝塚などのほか、集落跡を



第２図　遺跡地形図（1/5,000）

含む多くの遺跡が所在している。

2　大塚達朗・小川静夫・田村　隆　「市原市南原遺跡第１次調査抄報」　『伊知波良』１　昭和54年３月　伊知波良刊行会

大塚達朗・小川静夫・田村　隆　「市原市南原遺跡第２次調査抄報」　『伊知波良』４　昭和55年11月　伊知波良刊行会

千葉県文化財センター　「市原市南原遺跡」　『房総考古学ライブラリー１　先土器時代』昭和59年３月

3　柿沼修平・新井和之ほか　『土宇』　昭和54年４月　日本文化財研究所

4　寺門義範・田口　崇　『千葉県萩ノ原遺跡の調査』　昭和52年９月　日本文化財研究所

5　半田堅三ほか　『武士遺跡』　昭和51年３月　武士遺跡発掘調査団

6　鷹野光行・半田耕之助　「市原市川在遺跡採集の遺物」　『史館』第９号　昭和52年10月

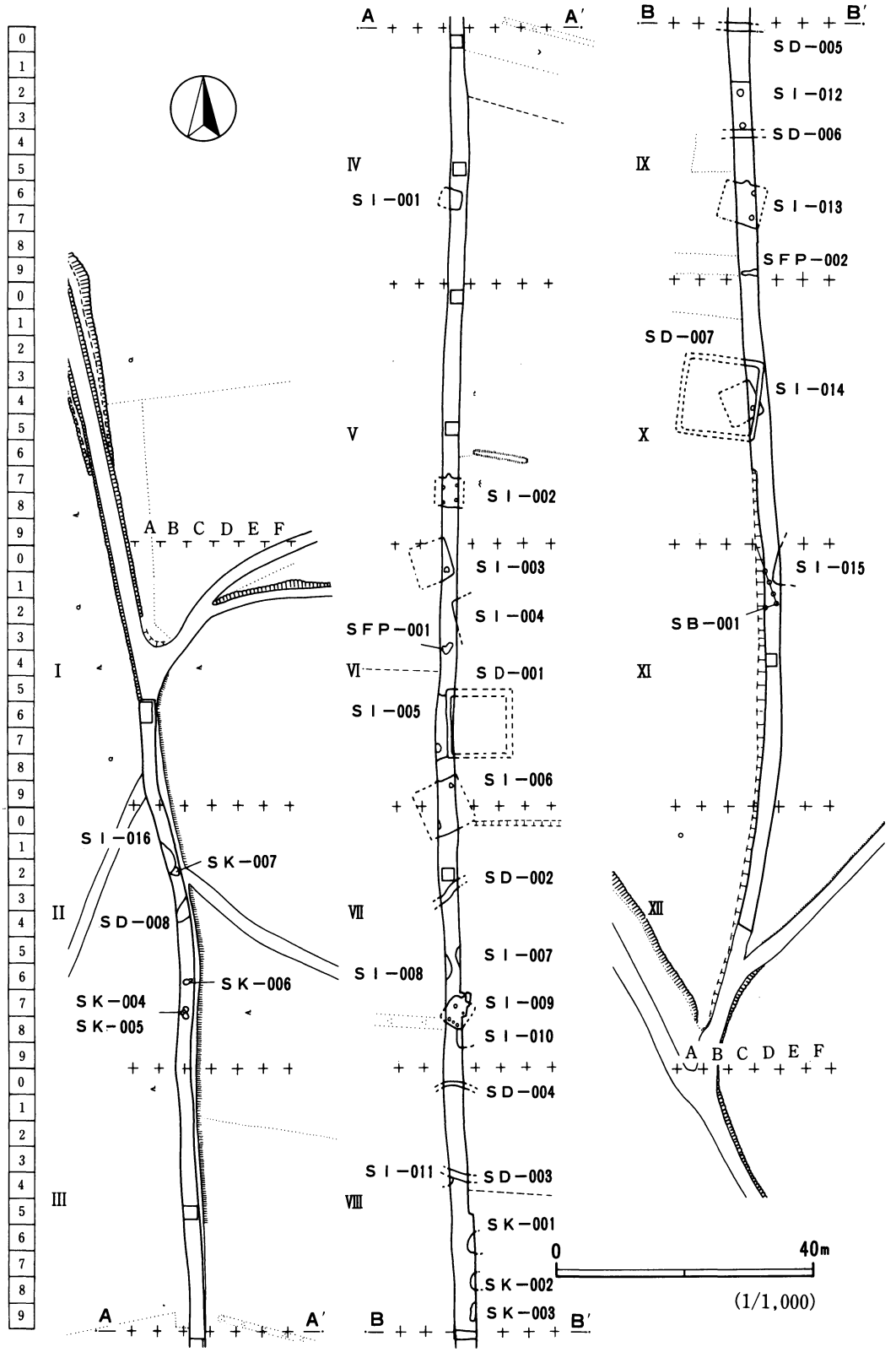
7　田中新史　「煙滅しつつある中高根古墳群を悼む」　『伊知波良』２　昭和54年５月　伊知波良刊行会

8　阪田正一・郷堀英司　『市原市二日市場廃寺跡確認調査報告』　昭和59年３月　千葉県文化財センター

2　調査の経過と方法

本遺跡の所在する市原市は、いわゆる首都圏に位置し、開発が急速に進んでいる地域である。それに伴い埋蔵文化財の保護を含め様々な問題が起きている。その一つが水需用の増大である。このような状況に対応するために、千葉県水道局では、新たな水資源の確保を目的に建設した高滝ダムと、福増に所在する浄水場とを結ぶ導水管の埋設工事を計画した。このため、千葉県教育委員会は、導水管埋設予定地内に含まれる埋蔵文化財の取扱いについて、千葉県水道局をはじめ関係諸機関と協議を重ね、その結果発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。調査については、千葉県教育委員会の指導のもとに、千葉県水道局との委託契約に基づき、当センターが昭和60年１月１日から同年３月31日までの予定で実施する運びとなった。対象となる門脇遺跡の調査面積は、1,130m²である。

調査に伴う準備作業は、昭和60年の年明けとともに１月４日から開始した。１月14日に現地に入り、詰所の設置などのほか環境整備を行なう。また、遺跡の中央部を幅2.5m前後でほぼ南北に伸びる調査部分を考慮し、発掘区の設定を始める。発掘区は磁北を基準に４m×４mのグリッドを最小単位とし、４m×南北40mを大グリッドとした。大グリッドは、北から40mごとにⅠ～Ⅻの番号をつけ、西から４mごとにA・B・C・D・E・Fとアルファベットを付した。大グリッド内の小グリッドについては北から０・１・２……９と呼称することにした。調査区の北西の隅のグリッドは、大グリッドと小グリッドを組み合わせるとⅠ－A０グリッドである。


A
A′
B
B′
I
II
III
IV
V
VI
VII
VIII
IX
X
XI
XII
A B C D E F
SI−001
SI−002
SI−003
SI−004
SI−005
SI−006
SI−007
SI−008
SI−009
SI−010
SI−011
SI−012
SI−013
SI−014
SI−015
SI−016
SFP−001
SFP−002
SD−001
SD−002
SD−003
SD−004
SD−005
SD−006
SD−007
SD−008
SK−001
SK−002
SK−003
SK−004
SK−005
SK−006
SK−007
SB−001
0
40m
(1/1,000)

第3図　遺構配置図

調査範囲は農道として使用されているその幅に限られ、表土層はかなり固くしまっていた。そのため表土層については重機によって剝がすことにし、1月17日から21日にかけて実施する。表土層の除去は慎重に行ない、遺構の検出作業は、ジョレンを使用して人の手によって進めた。Ⅸ－C区内では表土層の下位まで固くしまっていて、容易に平面形の確認が進まなかった。この時点では表土除去と遺構検出作業はⅣ～Ⅻ区の範囲まで行なった。

1月23日から遺構の精査に取り掛かる。番号は遺構の種類ごとに、調査順に001号跡から付けていくことにした。まず、ＳＩ－001～004号跡について開始する。

2月12日までには、ＳＩ－001～011号跡はカマドの調査を一部残しているもののほぼ終了し、床面を剝がしてその下の調査に入る。それとともにＳＤ－001号跡から溝の調査を行なう。

最初の表土剝ぎでは、調査工程上Ⅰ～Ⅲ区の間は表土を残しておかざるを得なかった。この区間の除去を2月26日と3月7日から3月12日にかけて行なった。これにより新たに住居跡1軒と土坑を検出する。

Ⅳ～Ⅻ区に検出した遺構は一部の実測などを残し、3月上旬には大体掘り上がってきた。この状況をみて、引き続き先土器時代の確認調査に移る。先土器時代の確認は、2ｍ×2ｍのテスト・ピット7ケ所を設定し、武蔵野ローム層上面まで掘り下げて実施した。その結果、どの箇所からも遺物の出土は認められなかった。

3月23日になると調査区北側のⅠ～Ⅲ区で検出した遺構も、すべて実測・写真まで終わり、25日から埋め戻し作業を開始する。3月29日に現場の撤収を済ませ、予想を上回る成果を得て不事昭和59年度の現場作業を終了した。

3　調査の概要

土層（第4区）　門脇遺跡の平坦部における基本土層は以下のとおりである。

Ⅰ層　表土攪乱層である。黒色土を主とする。調査部分が道となっているため全域にわたって固くしまっている。

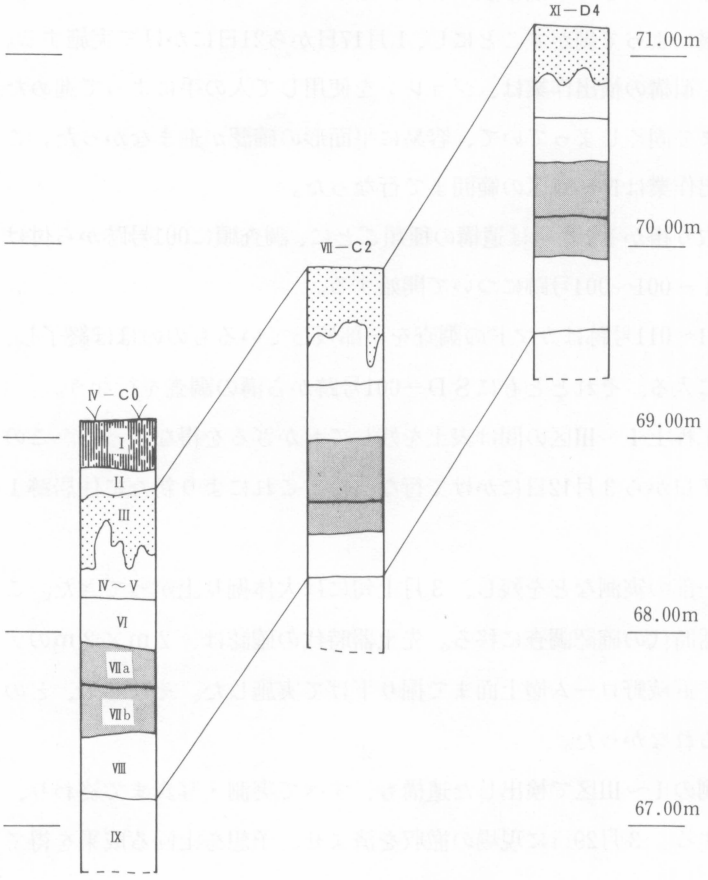
Ⅱ層　暗褐色土層。いわゆる漸移層で新期テフラは確認されない。場所によって厚さに差があり、一部では認められないところもある。

Ⅲ層　黄褐色軟質ローム層。ソフトローム層である。この層の上面が本遺跡の遺構検出面になる。Ⅳ層との間は凹凸が激しい。

Ⅳ～Ⅴ層　褐色ローム層。ハードローム層である。下総台地北西部で確認できる第1黒色帯は、肉眼では識別できない。統一を計るため一応Ⅳ～Ⅴ層としておきたい。

Ⅳ層　黄褐色ローム層。姶良丹沢パミスを含む層と考えられる。

Ⅶ層　暗褐色ローム層。立川ローム層第2黒色帯に当たる。下位になるにつれ色調に暗さを増す。不明瞭ながらａ・ｂの上下2層に分けることができる。



第4図　調査区内土層柱状図

Ⅷ層　褐色ローム層。立川ローム最下層である。スコリアなどの含有物が少ない。

Ⅸ層　暗灰褐色ローム層。武蔵野ローム最上層で若干粘性を認める。乾燥するとぼろぼろとした状態になる。

遺構　あたかも一本の長いトレンチを、遺跡の真中に設定したかのような調査であった。しかし、次章で述べるような多くの遺構が検出された。この成果は、地表の表面採集からしか判断できなかった本遺跡の性格を、多少なりとも明らかにした点に意義を見出せるかと思われる。ここでは遺構の種類と時期について簡単にふれておきたい。

住居跡は16軒検出した。時期別にみると、II区に検出したＳＩ－016号跡1軒が縄文時代に比定される。弥生時代と考えられる住居跡は2軒で、いずれも遺跡の中央部に所在し、後期に属している。7世紀末から8世紀にかけては広く分布し、9軒が確認された。そのほかに明確な時期が断定できないものが4軒存在する。7世紀以降建てられたと考えられる掘立柱建物跡が1棟、調査区の最も南で検出されている。溝状遺構は、方形周溝状遺構の一部と考えられる2条を含み7条が平坦部で部分的に調査された。またほかには、炉穴2基、土坑8基がみつかり遺構数は合計34に達した。これは調査面積から考えればかなりの密集度を示すものである。ただ調査区の幅が狭かったことと、先に示したように検出面が第III層上面であったことにより、遺構そのものの遺存は良好であったとはいえない。特に住居跡については、掘り込みが浅く遺物も少量であった。溝状遺構などにしても、一部を確認したというにとどまっており、全般に調査の性格からくる限界があった。

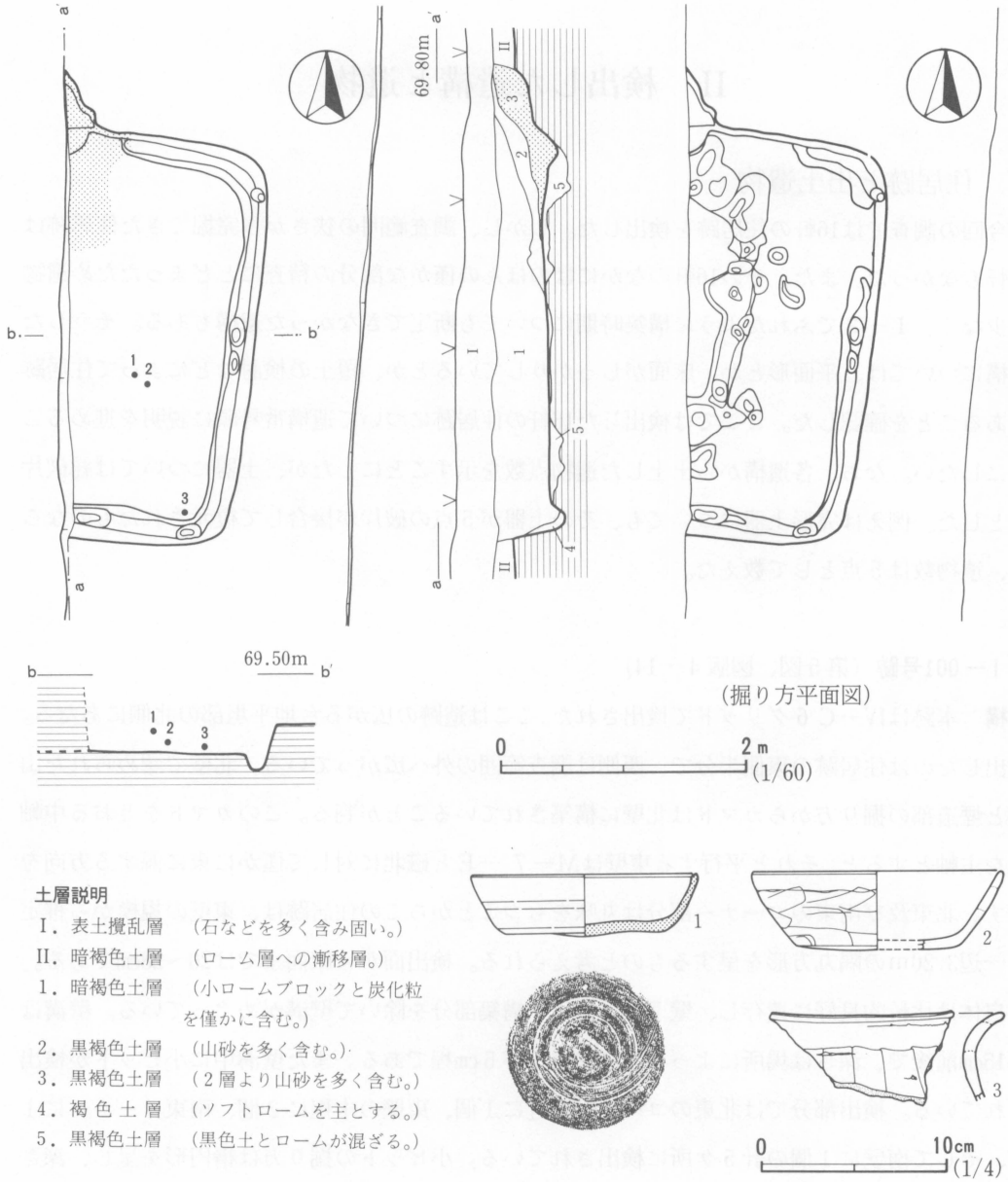
II　検出した遺構と遺物

1　住居跡と出土遺物

今回の調査では16軒の住居跡を検出した。しかし、調査範囲の狭さから完掘できた住居跡は1軒もなかった。また、その16軒のなかにはのほんの僅かな部分の精査にとどまったため遺物が少なく、I－3でふれたように構築時期についても断定できなかった遺構もある。そうした遺構については、平面形とか、床面がしっかりしているとか、覆土の検討などによって住居跡であることを確認した。ここでは検出した16軒の住居跡について遺構番号順に説明を進めることにしたい。なお、各遺構から出土した遺物点数を示すことにしたが、土器については総破片数とした。例えば完形土器についても、その土器が5点の破片が接合して復元されたものならば、遺物数は5点として数えた。

ＳＩ－001号跡（第5図、図版4・14）

遺構　本跡はIV－Ｃ6グリッドで検出された。ここは遺跡の広がる台地平坦部の北側にあたる。検出したのは住居跡の東側半分で、西側は調査範囲の外へ広がっている。北壁で認められた山砂と煙道部の掘り方からカマドは北壁に構築されていることが判る。このカマドをとおる中軸線を主軸とすると、それと平行する東壁はM－7°－Eと磁北に対して僅かに東に偏する方向を指す。北東及び南東のコーナー部分は丸味をもつことからこの住居跡は、東壁の規模から推定し一辺3.20mの隅丸方形を呈するものと考えられる。検出面から床面までは20～28cmである。壁自体は比較的良好に遺存し、壁下にはカマド構築部分を除いて壁溝がめぐっている。壁溝は幅15cm前後で、深さは場所によって多少異なるが5cm程である。また壁溝中に小ピットが検出されている。検出部分では北東のコーナー付近に1個、東壁の中程に2個、南東コーナーに1個、そして南壁に1個の計5ケ所に検出されている。小ピットの掘り方は楕円形を呈し、深さは溝底面から5～6cmと浅いものである。壁は壁溝から約80°の角度で立ち上がる。床面は貼床を施して平坦に構築される。中央部がやや低くなっている傾向が認められるものの、全体に堅緻な状態を呈している。この貼床を剝いだ状況が第5図の右の図である。壁寄りにはあまり凹凸はなく、中央に大小のピットが多く認められる。こうした掘り方が原因して住居中央部が使用の間に僅かに低くなったものと考えられる。柱穴は床面を取り去って精査した後も検出することはできなかった。住居跡内に上屋構造を支える主柱穴を固定するための柱穴は穿たなかったものと思われる。カマドは北壁に設けられていたことは明らかである。しかし、構築材は流出し袖部分は全く遺存していない。煙道部の半分については調査ができた。煙道部は壁から約40cm掘り込まれて作られ、段状の立ち上がり方を示している。



第5図　ＳＩ－001号跡・出土遺物実測図

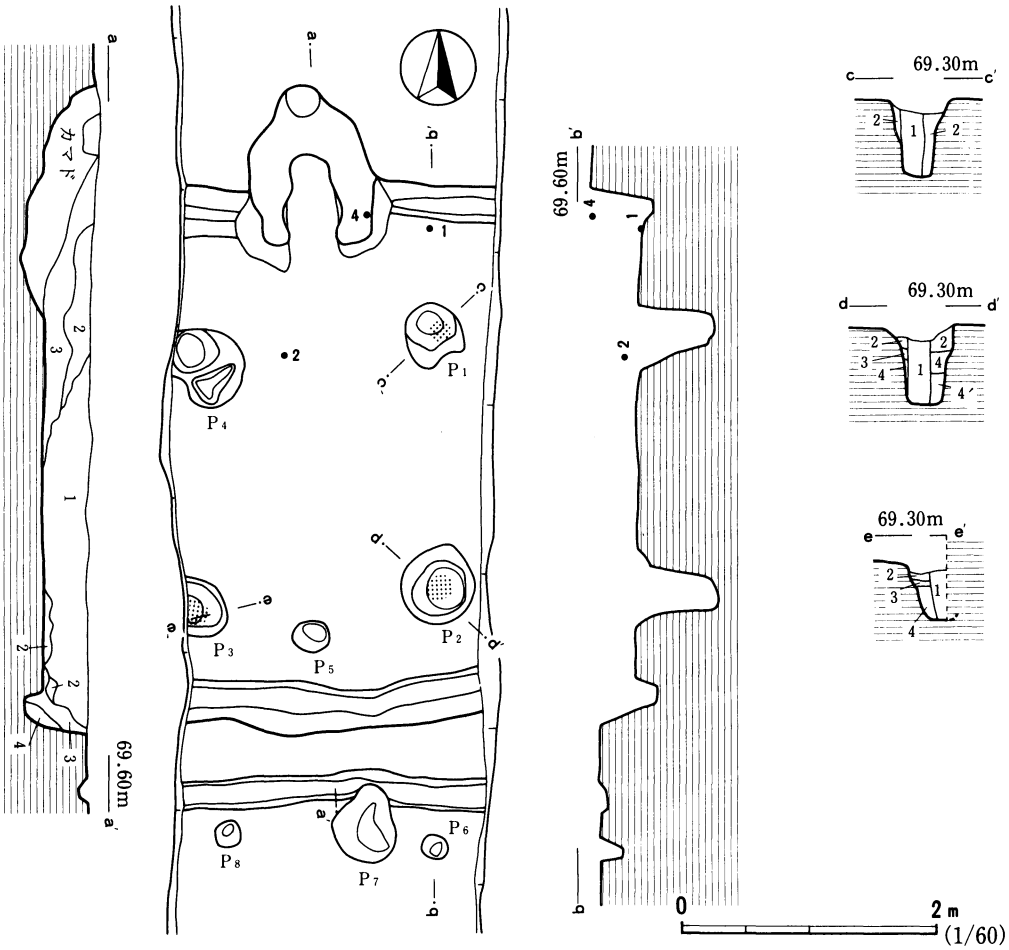
遺物　遺物出土総数は43点で土器片が42点、不明鉄製品の小片1点である。1は須恵器の杯である。口径12.2cm、器高3.3cm、底径8.7cmを測る。口径に比して底径も大きく、浅い作りとなる。底部は切り離し後全面に回転ヘラケズリが施されるが、中心部がやや突出し完全な平底とはなっていない。したがって不安定な感じを受ける。体部は下端で幾分丸味を付け直線的に立ち上がる。口唇部は尖り気味に納まり内側に弱い稜が生じる。外面のロクロ目は大変弱く、内面についてはほとんど認められない。外面の口縁部から体部中間にかけて油煙が付着しているので、灯明皿として使用されていた可能性がある。胎土はそれほど密な様子ではなくやや粗と

いう感じである。焼成については普通で色調は淡灰色を呈する。永田・不入窯の製品と考えられる(図版14－１)。２はいわゆるロクロ未使用の土師器杯で体部には粘土紐の接合痕が残されている。底部は全面手もちヘラケズリであると考えられ、やや曲面となる。体部は直線的に立ち上がり口唇部は丸く終わる。体部外面はヘラケズリを施した後軽いミガキを加えて仕上げ、口縁部及び内面はヨコナデを行なっている。色調は外内面とも黒色で、特に内面は真黒である。内面の色調について、それが黒色処理によるものかは不明である。胎土は密な状態を呈し焼成は良好である。復元口径13.4cm、器高4.2cm、底径8.8cmとなる(図版14－２)。３は甕の口縁部破片である。口縁部は頸部からゆるやかに外反する。口縁部直下からの縦方向へのヘラケズリが認められる。胎土にスコリアを含む（図版14－３)。

ＳＩ－002号跡（第６～８図、図版４・14)

遺構　本跡はＳＩ－001号跡から南へ40mのＶ－Ｃ７グリッドに位置する。好運だったともいえるのだろうか、それとも単に惜しまれる状態なのだろうか、住居跡の中央がそっくり調査範囲の中に収まってしまった。遺存は良好でカマドを北壁に設け、主軸方向はほぼ磁北を向いている。検出面からの壁高は北壁約40cm、南壁で約30cmを測る。北壁は約81°で立ち上がり、南壁はそれよりもゆるやかに傾斜し約70°の角度で立ち上がる。検出できた壁下には、北壁のカマド構築部を除いて壁溝が掘られる。幅は25cm前後で深さは５cmから16cmと一様でなく、北壁下に比較し南壁の壁溝の方が深い。また南壁は蛇行するような形で直線的ではない。北壁と南壁の上端を測ると4.20mあるので、おそらく東－西の長さも同じような規模になると考えられる。床面は貼床によって構築される。堅い面をよく残しているが東側では多少平坦さがくずれている。ピットは住居跡内で５ケ所に検出した。P_1～P_4は柱穴である。P_1・P_2・P_3で柱痕跡が確認された。それを基に柱間間隔を測定すると、P_1－P_2、P_2－P_3、P_3－P_4、P_4－P_1とも約２mである。柱穴の掘り方は不整円形で、床面からの深さは$P_1$58cm、$P_2$63cm、$P_3$60cm、$P_4$61cmである。P_5は南壁側へ向かって傾斜し、いわゆる梯子ピットと考えられる。深さは39cmを測る。P_6～P_8は遺構の外で見つかったピットである。このピットと南壁の中間には壁と平行する浅い溝も検出されており、両方とも住居跡と何らかの関係を有すると考えられる。溝の幅は20cm前後で深さは７～９cmである。ピットはP_6、P_8が深さ18cmで、P_7が径50cm、深さ22cmを測る。この溝とピットが位置からして入口に伴う施設であったとする仮定はたてられても、具体的には決定的な根拠を欠き不明である。カマドは北壁に構築されており、両袖と天井部の一部が遺存する。構築材は山砂と粘土を主たる材料とする。焚口の幅は40cmで火袋部でもそう大きな変化はない。また両袖は、山砂と小ロームブロックを混ぜた土を下に貼ってその上に構築している。煙道部は壁から80cm掘り込んで作られ、段状に傾斜しながら立ち上がる。

遺物　出土遺物数は158点である。内訳は土器片154点、礫３点、不明鉄製品の小破片１点とな



土層説明　a——a′

1．暗褐色土層　（黒色土に小ロームブロックと焼土粒を含み、しまりをもつ。）
2．暗褐色土層　（山砂、焼土を全体中に約2割含み、ややしまりをもつ。）
3．暗褐色土層　（小ロームブロック、焼土粒、山砂を僅かずつ含む。）
4．暗褐色土層　（ローム粒を主とし、小ロームブロック、焼土粒を含む。）

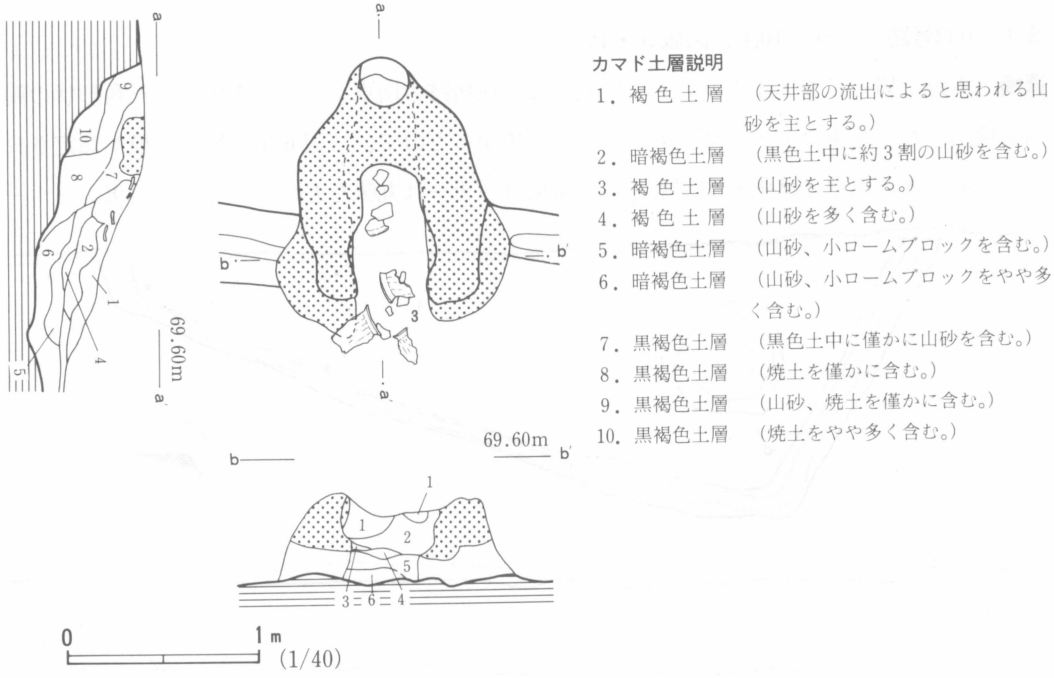
土層説明　c——c′、d——d′、e——e′

1．黒色土層　（柱痕跡と考えられローム粒を僅かに含む。）
2．黒色土層　（ローム粒を含み全体にややしまりをもつ。）
3．褐色土層　（ローム粒を多量に含み全体にややしまりをもつ。）
4．暗褐色土層　（ローム粒を含む。）
4′．暗褐色土層　（4層より多くのローム粒を含む。）

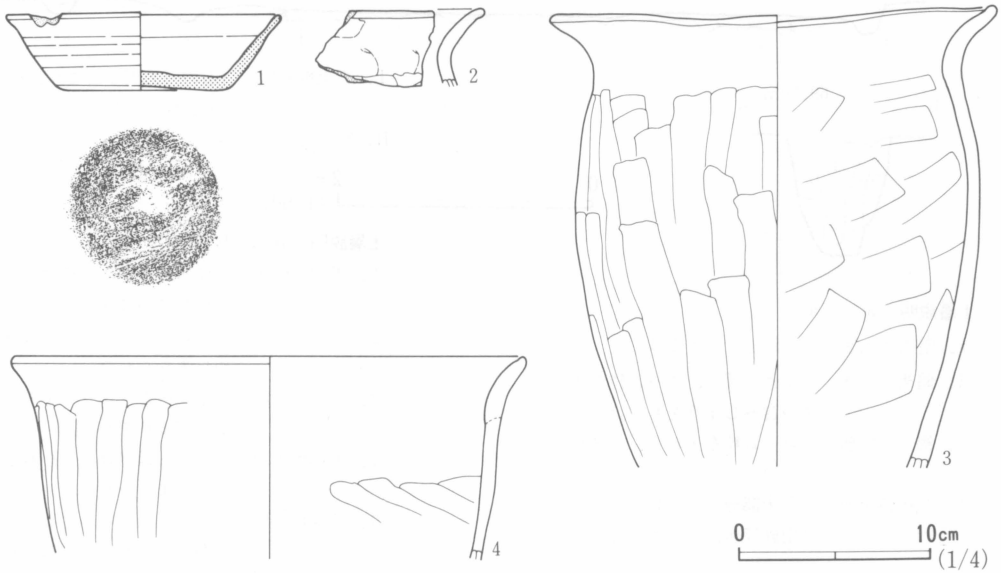
第6図　ＳＩ－002号跡実測図

る。1は須恵器の杯である。安定した底部から体部は直線的に開き、口縁部が僅かに外側に開く形となる。口縁部は体部に比べ器厚が薄く、口唇部は丸く納まる。底部の切り離しは、その痕跡が不鮮明ではっきりしない。切り離しの後は一方向の手もちヘラケズリが加えられる。体部下端にも調整が施されていた可能性があるが、器面が荒れているため不明である。胎土には雲母、石英、長石が多く混和されている。焼成はやや不良で色調は淡灰色を呈する。口径14.0cm、器高4.0cm、底径8.4cmを測る.(図版14－4)。2～4は甕である。2は破片で口縁部はゆる

やかに外反する。3はカマド内から出土したものである。長胴を呈し、底部がかなりすぼまる形になると考えられる。胴部最大径をかなり上部に置き、口縁部は外反する。胴部外面は縦方向のヘラケズリで整えられ、内面は横方向を主とするヘラケナデを行なっている。口縁部は外内面ともヨコナデである。胎土には小石やスコリアが目立ち焼成は普通である。色調は暗褐色



第7図　ＳＩ－002号跡カマド実測図

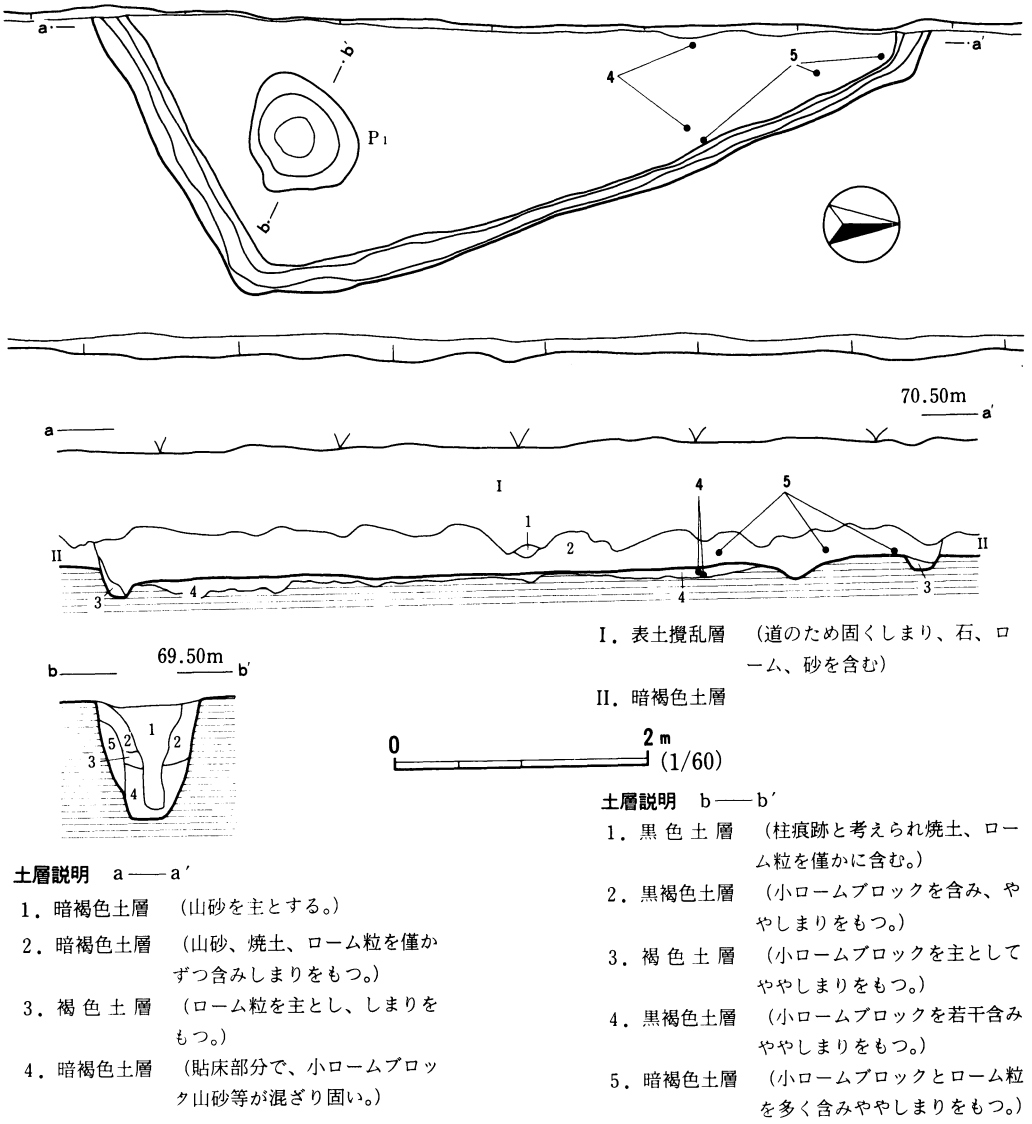


第8図　ＳＩ－002号跡出土遺物実測図

を呈する。口径23.0cmで現存器高23.7cmを測る(図版14－５)。４は頸部が明瞭でなく口縁部も大きくは開かない。胴部外面は縦方向のヘラケズリで、内面は斜方向のヘラナデを施している。口縁部は外内面ともヨコナデである。胎土に石英の細粒を含み焼成は良好である。色調は黒褐色を呈する。復元口径は26.5cmになる。(図版14－６)。

ＳＩ－003号跡（第９・10図、図版５・14）

遺構　本跡はⅥ－Ｃ０・１グリッドに位置する。住居跡の南東コーナーを中心に三角形状の範囲を検出した。北東コーナー部分もかろうじて掛かったので、一辺６ｍ前後の規模が想定される。完掘できた東壁には張りが認められ、南東コーナーは丸味をもつ。おそらく北東コーナー



Ⅰ．表土攪乱層　(道のため固くしまり、石、ローム、砂を含む)

Ⅱ．暗褐色土層

土層説明　a――a′

1．暗褐色土層　(山砂を主とする。)

2．暗褐色土層　(山砂、焼土、ローム粒を僅かずつ含みしまりをもつ。)

3．褐色土層　(ローム粒を主とし、しまりをもつ。)

4．暗褐色土層　(貼床部分で、小ロームブロック山砂等が混ざり固い。)

土層説明　b――b′

1．黒色土層　(柱痕跡と考えられ焼土、ローム粒を僅かに含む。)

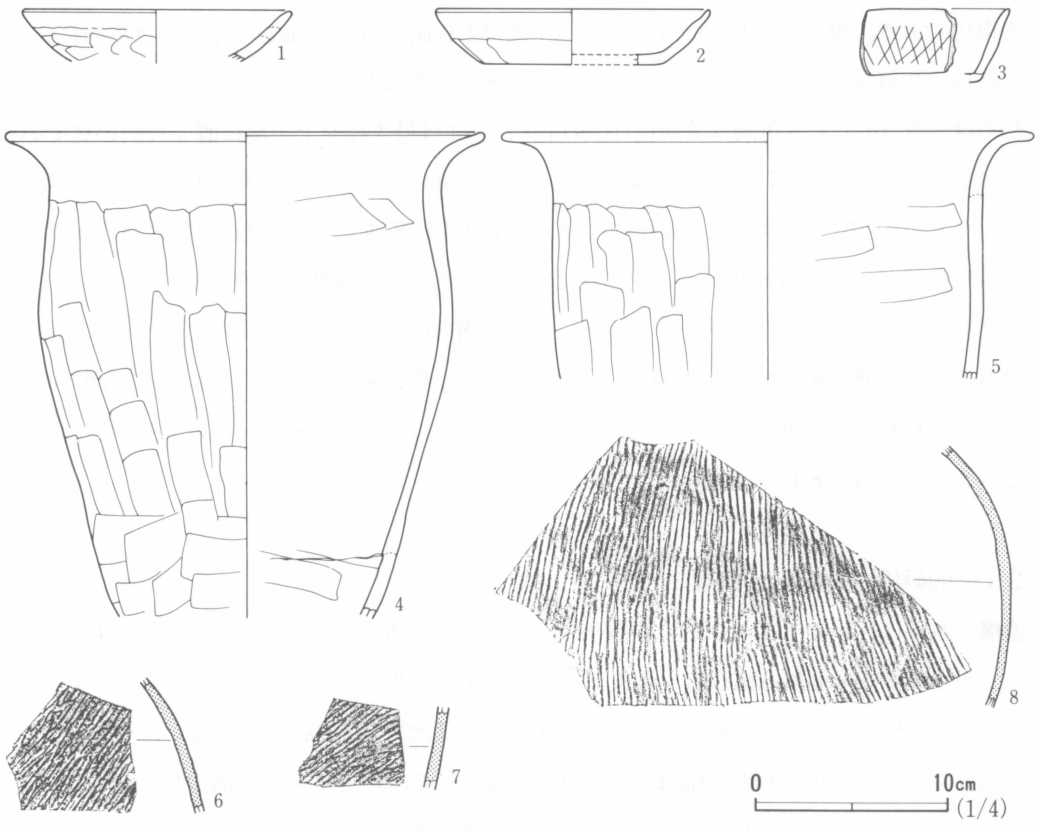
2．黒褐色土層　(小ロームブロックを含み、ややしまりをもつ。)

3．褐色土層　(小ロームブロックを主としてややしまりをもつ。)

4．黒褐色土層　(小ロームブロックを若干含みややしまりをもつ。)

5．暗褐色土層　(小ロームブロックとローム粒を多く含みややしまりをもつ。)

第９図　ＳＩ－003号跡実測図



第10図　ＳＩ－003号跡出土遺物実測図

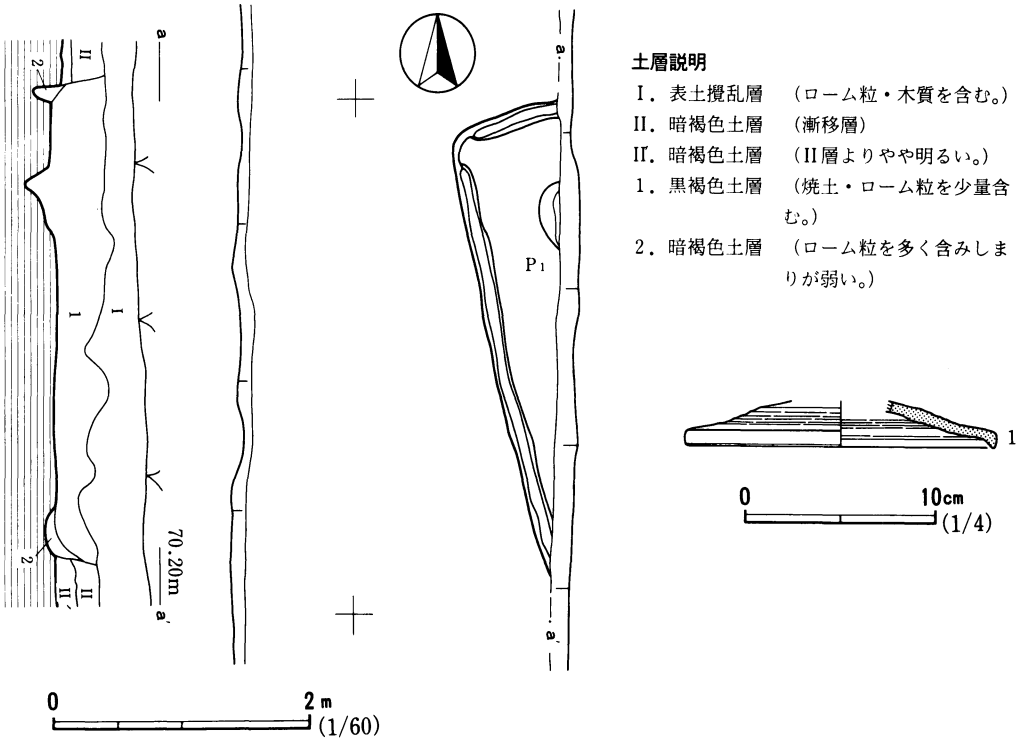
も丸味をもつものと考えられる。東壁の方向はＮ―19°―Ｗである。検出面から床面までの深さは、良く残っている南壁側でも15cmである。土層断面の観察によれば、もう少し上層で検出できたかもしれないが、平面的にはIII層上面まで下げなければ確認することが困難であった。検出した壁下には壁溝がめぐっている。東壁の一部では幅は10cmと大変狭く、南壁で約25cmの幅となる。深さは６～10cmである。床面は厚いところで10cmの貼床を施して平坦に構築される。北東のコーナー近辺でやや軟弱なところが認められる。貼床を剝がしてみたところ壁寄りが幅の広い溝を掘ったように窪み、中央がそれよりも高まりを見せていた。P_1は柱穴と考えられる。半裁して土層を観察したところ柱痕跡を確認することができた。掘り方の平面形は不整楕円形で長径98cm、短径82cmを測り、床面から94cmの深さに穿たれている。このP_1のほかにはカマドや貯蔵穴のような附属施設は発見されていない。

遺物　出土遺物総数は118点である。内訳は土器片114点、礫４点である。１は丸底の杯である。体部上半はあまり内彎せず、外に開くように立ち上がる。外面はヘラケズリ後ナデを施し内面はミガキで仕上げている。胎土に砂を含むが密な状態を呈し焼成は普通である。色調は暗褐色。復元口径は13.8cmとなる。２は安定した平底で、体部は直線的に開きながら立ち上がる。調整は体部外面の下半は手もちヘラケズリであるが、内面は不鮮明である。焼成は不良で色調は明

赤褐色である。復元口径14.2cmを測り、以下器高2.9cm、底径9.2cmとなる。３は内面にいわゆる斜格子状暗文が施された杯の破片である。外面の調整及び内面の暗文は器面が磨滅しているためはっきりしない。色調は茶褐色(図版14－７)。４は最大径を上半部に置く長胴の甕である。口縁部は外反して開き口唇部は丸味をもつ。胴部外面はヘラケズリが施され、内面は丁寧なヘラナデである。胎土には目立つ混和物は含まれず焼成は普通である。復元口径は24.5cmである。５は口縁部が急激に折れ曲がるように外反する甕である。口縁部は外内面ともヨコナデで、胴部外面は縦方向にヘラケズリをしている。内面は横方向のヘラナデである。胎土にスコリアを含み焼成は普通。復元口径25.0cm。６～８は須恵器の甕の破片である。いずれも外面にタタキ目が残される。６の焼成がやや不良であるが、７・８は胎土が緻密で、焼成も堅緻となっている（８は図版14－８)。

ＳＩ－004号跡（第11図、図版５）

遺構　本跡はⅣ－Ｃ２グリッドに位置する。住居跡の北西コーナー部分を調査できたにとどまる。多くは調査区域外へ広がる。北西コーナーは僅かに丸味を有し、西壁はＮ－14°－Ｗの方向を向く。規模については不明。検出面から床面までは大変浅く10cm弱しかない。壁溝はコーナー部分を除いて検出された。幅は10～13cmで、深さは７cm程度である。溝中にピットは検出されない。床面は全体に約10cmの貼床を施し平坦に構築される。ただ検出した部分のみではそれ



第11図　ＳＩ－004号跡・出土遺物実測図

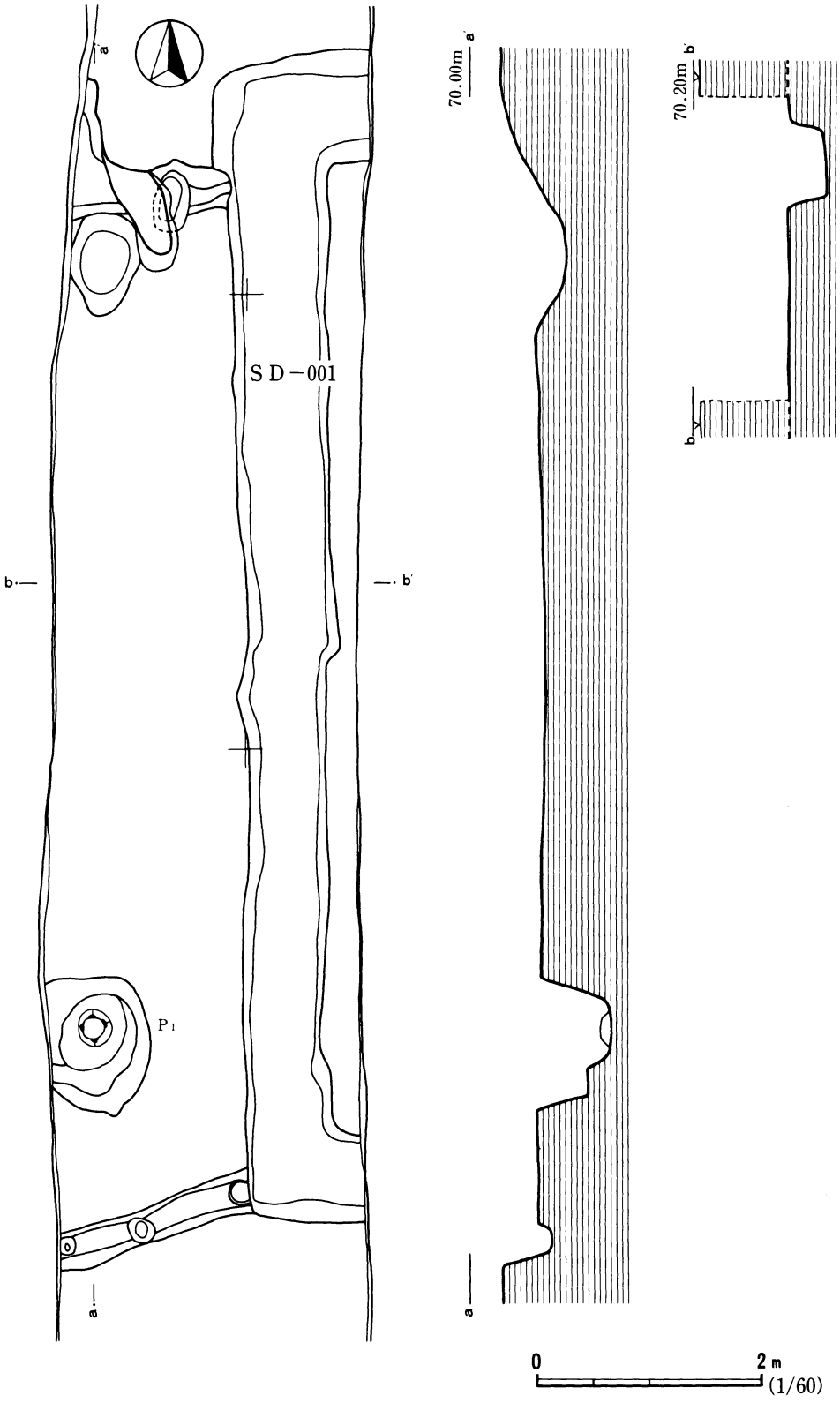
ほど堅い様子はみられない。P_1はおそらく柱穴になるであろう。大部分が調査区域の外であるため掘り方の一部しか検出できなかった。

遺物　出土遺物は土器片が6点出土したにすぎない。いずれも小破片で、かろうじて図示できたのが1の須恵器蓋である。口縁部内側にかえりはなく端部は下に折り曲げられている。天井部は回転ヘラケズリで調整される。胎土には長石の様な白色微細粒を含み焼成は普通となっている。色調は灰色を呈する。復元口径16.0cmを測る。

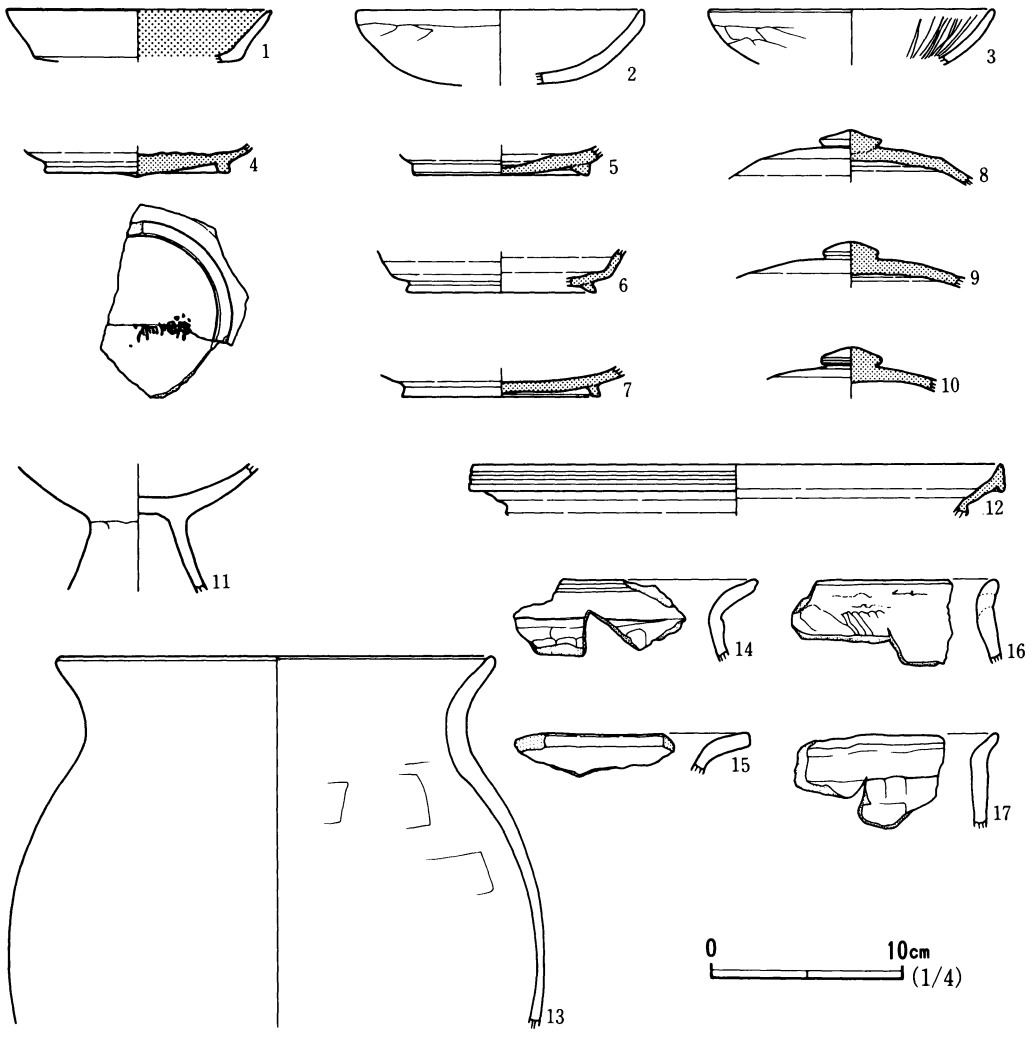
ＳＩ－005号跡（第12・13図、図版5・14・15）

遺構　本跡はVI－Ｂ5・6・7グリッドに位置する。住居跡の中央部を南－北に縦断するような形で検出されたものである。ＳＤ－001号跡と重複関係にあり、ＳＤ－001号跡が本跡の床面を切っているので新・旧関係は明らかである。遺構は北壁と南壁の一部とカマドの約半分が調査できた。北壁と南壁の間は9.30mを測るので、割と大型の住居跡であることは推測されるが、全体については不明である。検出面から床面までは35cmを測る。北壁のカマド東側と南壁下には壁溝が認められ、南壁の壁溝中には3ケ所に小ピットが発見されている。この小ピットは円形に穿たれ、一番西に検出されたものが深さ20cmで、他の2個は5cmである。南壁の立ち上がり傾斜角度は約75°である。床面は貼床によって平坦に構築されて、カマドの南側では堅い状態を良く残している。また中央部は壁際より僅かに低くなっている傾向がある。床面上で確認したピットはP_1の1カ所である。このピットはカマドの反対側で南側から110cm内側に位置する。掘り方の平面形は不整形で長径120cmを測る。南壁で一度段を設けて底面に至り、底面には径10cm、高さ10cmにロームを突き固めた部分がある。これは柱の沈下を抑えるための工夫であると考えられる。普通このP_1の位置には入口に伴う梯子ピットが置かれることが多いが、真直に掘られていることなどを考えると柱穴とするのが妥当であろう。カマドは半分検出したにとどまる。天井部は崩落し右袖の遺存も不良である。煙道部は壁から約80cm掘り込まれ、約30°というゆるやかな角度で立ち上がる。火床部は長径90cm、短径約65cmの楕円形に形成され厚さ10cm弱の焼土が検出された。

遺物　出土遺物数は1,150点ですべてが土器片である。図示した遺物の中にはＳＤ－001号跡から出土した土器片と接合したものもあり本跡の遺物は大なり小なり原位置を失って出土していると考えられる。1～3は土師器の杯である。1は体部下端がやや張り出し、体部は直線的に開く。外面の調整は不鮮明で内面は黒色処理が施される。復元口径13.8cm。2は丸底を呈し体部と口縁部との境に弱い稜を形作る。口唇部は直立して丸く納まる。体部外面はヘラケズリ後ナデを加え、内面は全面にナデ調整である。焼成はやや不良で暗褐色を呈する。復元口径14.6cm。3は丸底で体部も僅かに内彎しながら立ち上がる。体部外面にはヘラケズリが施され、内面はミガキで調整した上に放射状に暗文風のミガキが加えられる。口縁部外面はヨコナデであ



第12図　ＳＩ－005号跡実測図



第13図　ＳＩ－005号跡出土遺物実測図

る。胎土にはスコリアの含有が多く認められ、焼成はやや不良。色調は外内面とも暗褐色である。復元口径14.6cm。４～７は須恵器の高台付杯である。４は底部の中央部が高台より突出し不安定である。杯底部は回転ヘラケズリが行なわれている。胎土は密で焼成も悪くない。色調は灰色。底径は9.6cm。この杯の底面には墨書が残されている。「□里長」と三文字が認められるが、ちょうど割れて二つに分かれた位置に書かれているため一字めは不明である（図版14—9）。５も底部が高台より突出する。胎土には長石の微細粒が認められ焼成は普通である。復元底径9.4cmを測る（図版14—10）。６は高台が「ハ」の字形に外側に開き、杯部は底部下端から傾斜しながら立ち上がる。胎土には混和物が目立たず、焼成に普通となっている。復元底径9.8cmを測る（図版15—１）。７の杯部底部はゆるやかに彎曲し底面は回転ヘラケズリが施されている。復元底径10.6cm。８～10は蓋である。いずれも天井部には扁平な擬宝珠形のつまみが付けられる。８は３点の中で最も堅緻に焼かれており、天井部外面全体には自然釉が掛かっている。

断面及び内面の色調は青灰色を呈する（図版15－２、９は図版15－３）。11は高杯である。杯部は内彎する様子がみられ、脚部は直線的に開きながら下降する（図版15－４）。12は須恵器の甕の口縁部で内側に自然釉が掛かる。胎土は緻密で焼成は良好。復元口径27.6cmを測る。13～17は甕で口縁部の形態は、大きく外反するものと、直立気味に立ち上がるものとが存在する。13は胴部上半に張りを有し頸部で絞られ、口縁部はゆるやかに外反する。口唇部の内側には弱い稜が走る。外面の調整痕は器面が荒れているため明確ではないが、ヘラケズリが施されたものとみなされる。内面は口縁部が横方向のナデで、胴部がヘラナデである。胎土は砂質で焼成も甘い。色調は外面が暗褐色で内面が褐色である。復元口径22.6cm（図版15－５）。

ＳＩ－006号跡（第14図、図版５・15）

遺構　本跡はⅥ－Ｂ９、Ⅶ－Ｂ０グリッドを主に位置する。ＳＩ－005号跡同様住居跡の中央部を南－北に縦断するような形で検出された。遺存は不良で、検出面から床面までに10cm程度の覆土しか堆積していない。壁溝の存在によって規模がつかめるという状況である。南・北の壁とカマドの所在は判明したので、そこから主軸の方向を測定するとＮ－25°－Ｗとなる。北壁から南壁までは7.6ｍである。壁溝は北壁のカマド構築部以外で検出されている。幅は北壁で20cmを測り、南壁で20～25cmである。深さはどちらとも５cm前後で、溝中に楕円形の小ピットが北側で１ケ所、円形のものが南壁で検出されている。床面は貼床によって構築される。場所によっては貼床の厚さが異なり平坦さを欠いているが、全体に堅い様子をとどめている。ピットは２ケ所に検出された。P_1の掘り方は径90cm、深さ74cmに穿たれる。P_2は攪乱が伴うため掘り方の平面形は明らかにできない。床面からの深さは84cmである。P_1・P_2とも柱穴と考えられる。カマドは右袖と思われる山砂が残るだけで、火床部や煙道部は攪乱によって破壊されている。詳細については明らかにし得ない。このカマドの東側と南側際には焼土が検出されている。炭化材は認められないので、この焼土が即火災によるものとは決められないが、一応火災住居という可能性も残される。

遺物　遺物は721点出土している。内訳は土器片583点、石器１点、自然小礫136点、鉄器小破片１点である。土器片は小片が主で、礫についてはその性格は不明である。１は丸底を呈する杯である。口縁部は外に開くように終わる。体部外面はヘラケズリ、内面は全体にナデを行ない、口縁部の外面にはヨコナデが施される。胎土は砂質で焼成は普通。復元口径14.2cm。２は鉢である。底部は明らかでなく、体部は直線的に開きながら立ち上がる。口縁部との境には弱い稜が生じ、そこから僅かに外反して口唇部は丸味をもつ。体部外面はヘラケズリ後ナデを施し、内面はヨコナデ後にミガキを加えている。口縁部の外面はヨコナデである。胎土は砂質で焼成は普通。色調は明褐色を呈する。復元口径15.2cm。３は須恵器の蓋である。天井部は回転ヘラケズリで平坦にされ、あまり高くならないつまみが付く。端部は急激に下に折り曲げられる。

第14図　ＳＩ－006号跡・出土遺物実測図

胎土は密で混和物も認められないが、焼成は不良でやわらかな感じを受ける。色調は外面が暗灰色で内面は淡灰色になっている。復元口径17.0cm、器高3.6cm（図版15－6）。4は須恵器の甕の口縁部である。中位に突帯がめぐる。焼成不良で色調は黒灰色を呈する。5・6は甕口縁部の破片である。5は急激に外反し、6はゆるやかに開きながら立ち上がる。7は底部で外面の調整は下部で斜方向を主とするヘラケズリで、その上は縦位のヘラケズリが施される。内面はヘラナデである。胎土に多くの砂が含まれる。底径5.8cm（図版15－7）。

ＳＩ－007号跡（第15図上、図版6）

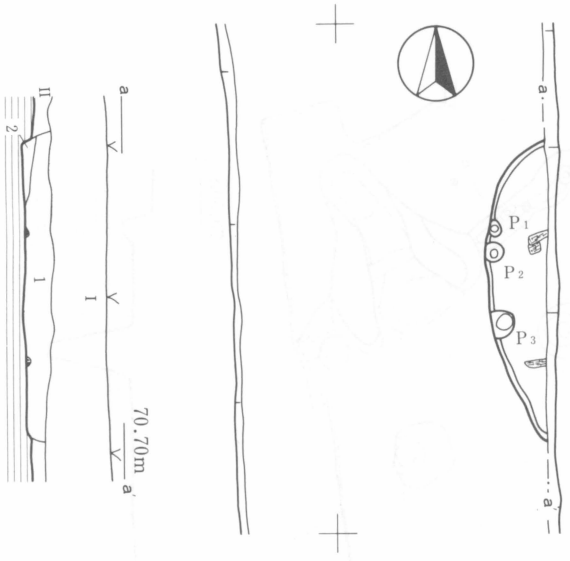
遺構　本跡はⅦ－Ｃ5グリッドに位置する。円形か楕円形を呈する住居跡の一部分が検出されたにすぎず、大部分は調査区の外側へ広がっている。検出した壁は弧を描き、検出面から、床面まで約10cmと浅い。壁下に壁溝は検出されず、壁はゆるやかに立ち上がり方を示す。住居跡の端なので全体の規模については復元できない。床面は堅く、大きな凹凸は認められない。ピットは壁に接して3ケ所に検出された。いずれも円形の小ピットで床面からの深さは$P_1$20cm、$P_2$10cm、$P_3$16cmである。柱穴とはならないであろう。P_1の東側とP_3の南東側には炭化材が出土しており火災に遭った可能性を示している。

遺物　炭化材が出土したほかは人工遺物及び礫などは1点も出土しなかった。明確な時期は不詳であるが、形態やＳＩ－008号跡の存在などから考えると弥生時代の所産となる可能性が高い。

ＳＩ－008号跡（第15図下、図版6・19）

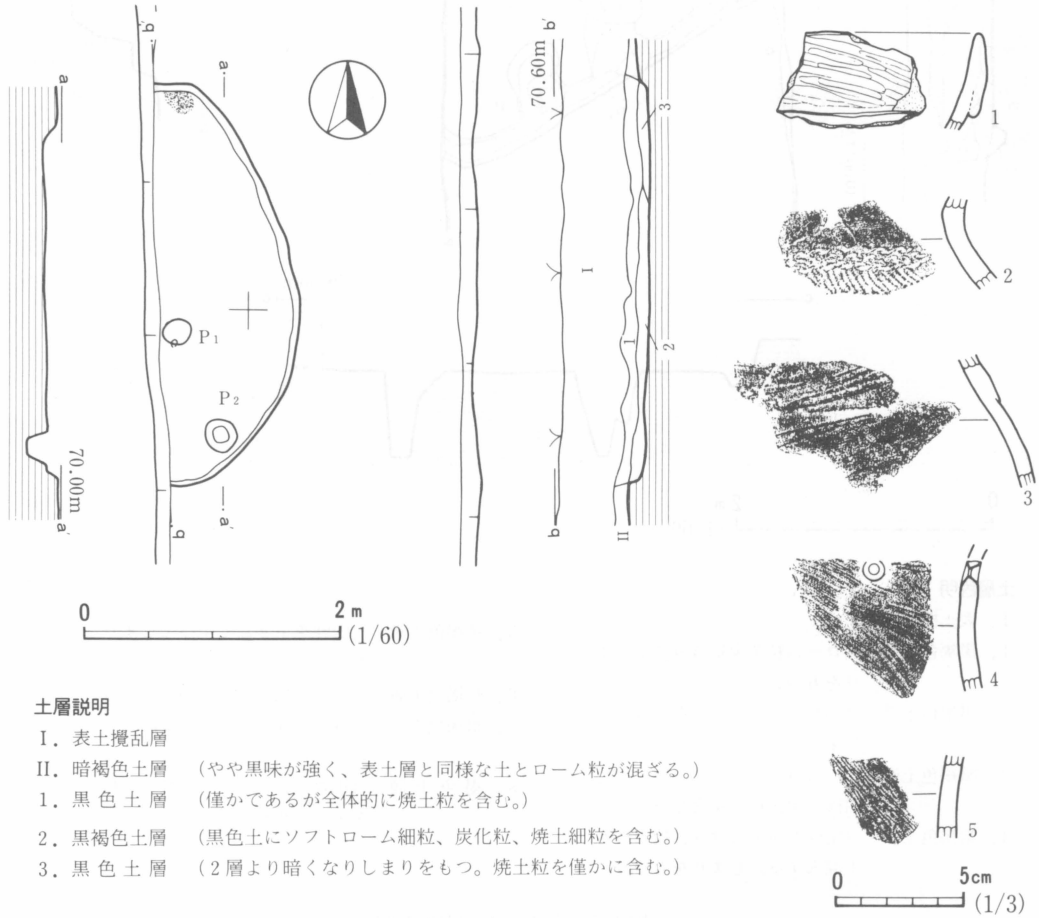
遺構　本跡はⅦ－Ｂ6グリッドに位置し、北東にＳＩ－007号跡が近接する。大半が調査区域の外へ広がるため規模は不明確である。形態については検出部分から推測して円形ないし楕円形を呈するものと思われる。検出面から床面までは10cmである。土層断面の観察によればもう少し上層で確認できたのかもしれない。検出された壁下には壁溝は掘られてなく、壁はやや傾斜して立ち上がる。床面は比較的しっかりしており容易に検出することが可能であった。ピットは2ケ所に検出した。P_1は径20cmの円形の掘り込みを有し、下端でかなりすぼまって深さは40cmある。P_2は壁寄りで見つかり深さは16cmでP_1と比較し浅い。このP_1とP_2については全体の中で位置がはっきりしないので柱穴と断定はできない。ピット以外には炉などの施設は検出されなかったが、北側の壁寄りで径25cmの範囲に焼土の堆積が確認された。

遺物　出土遺物数は、土器片が7点と大変少ない。1～5は土器片である（図版19－1）。1は壺の口縁部で折り返し口縁となっている。外内面とも丁寧なミガキによって調整される。2は壺の頸部で口縁部側には赤彩が施され、肩部にかけては結節文とＲＬを原体とする細かい縄文が施文されている。3～5は甕である。外面の調整は3がナデで4・5にはハケ目の調整痕が残されている。焼成は概して良好である。



土層説明

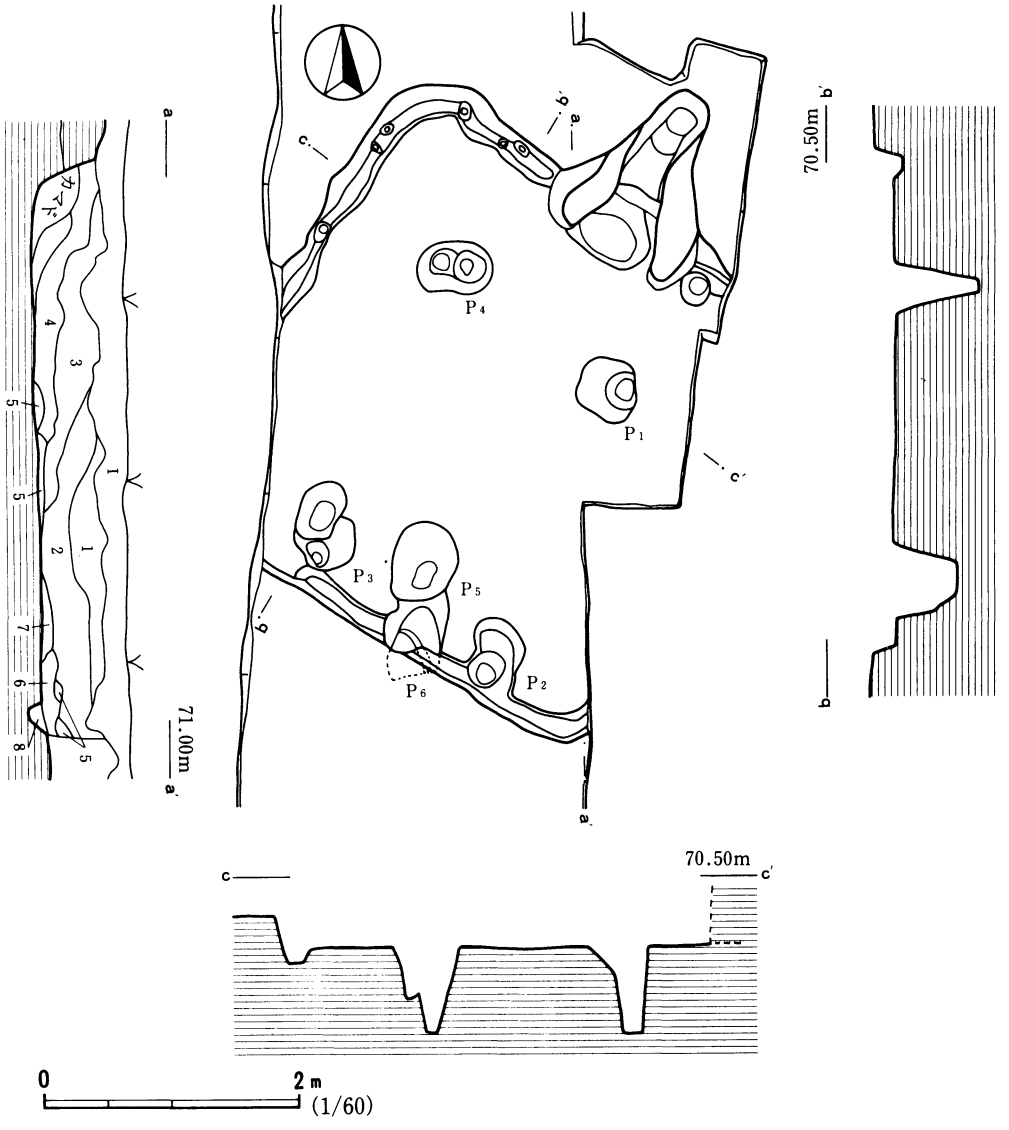
Ⅰ．表土攪乱層
Ⅱ．暗褐色土層　（ソフトローム粒と黒色土が混ざる。）
1．黒色土層　（炭化物片、焼土粒、ローム細粒を含む。しまりをもたない。）
2．黒色土層　（1層より明るくソフトローム粒を多く含む。ややしまりをもつ。）



土層説明

Ⅰ．表土攪乱層
Ⅱ．暗褐色土層　（やや黒味が強く、表土層と同様な土とローム粒が混ざる。）
1．黒色土層　（僅かであるが全体的に焼土粒を含む。）
2．黒褐色土層　（黒色土にソフトローム細粒、炭化粒、焼土細粒を含む。）
3．黒色土層　（2層より暗くなりしまりをもつ。焼土粒を僅かに含む。）

第15図　ＳＩ－007・008号跡実測図、ＳＩ－008号跡出土土器拓影図



土層説明

Ⅰ．表土攪乱層

1．黒褐色土層　（ローム粒を少量含みややしまりをもつ。）

2．黒褐色土層　（小ロームブロックを含みややしまりをもつ。）

3．暗褐色土層　（ローム粒、小ロームブロック、山砂、炭化物片を含む。）

4．暗褐色土層　（山砂を多量に含み、焼土が若干混入する。しまりをもつ。）

5．黄褐色土層　（山砂を主として全体にしまりをもつ。）

6．暗褐色土層　（ローム粒を含みやわらかい。）

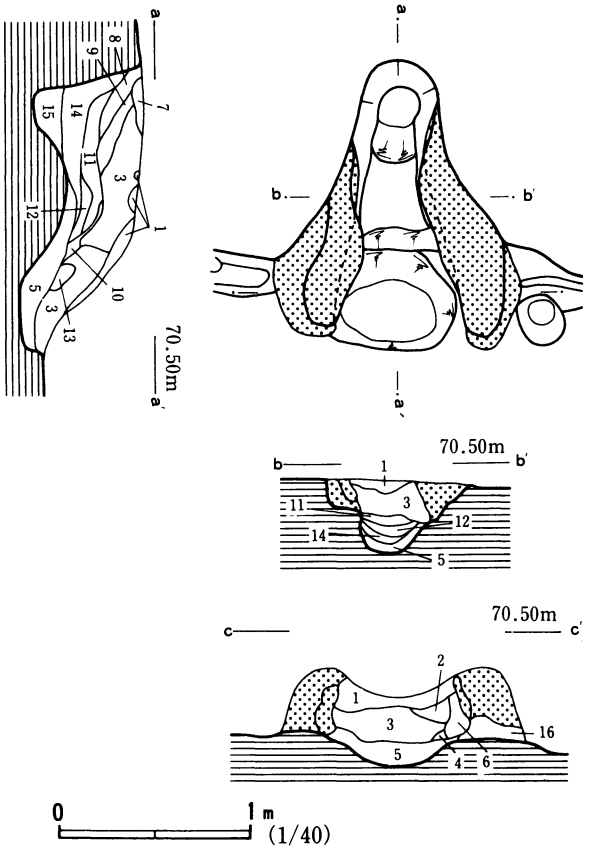
7．暗褐色土層　（焼土が混ざり全体にやわらかい。）

8．褐色土層　（小ロームブロック、ローム粒を主としやわらかい。）

第16図　ＳＩ－009号跡実測図

ＳＩ－009号跡（第16～19図、図版７・15・16）

遺構　本跡はⅦ－Ｂ７・８、Ｃ７・８グリッドに位置する。ＳＩ－010号跡と重複関係にあり、ＳＩ－010号跡は本跡によって切られている。住居跡は北西と南東のコーナー部分が明らかになり、カマドも全掘できたので全体の３分の２は調査し得たものと思われる。検出範囲からこの住居の規模を復元すると、一辺は約４ｍ前後になると考えられる。また、北西コーナーに丸味があるのでおそらく隅丸方形の平面形を有するものとみられる。主軸方向はＮ－31°－Ｅで東に偏している。検出面からの壁高は一部を除き15～18cmである。カマド構築部分と南壁の西側以外では壁下に壁溝が検出された。壁溝の幅は10～20cmでかなりのばらつきがあり、深さは10cm程のところが多い。北西のコーナーから北壁と西壁にかけては溝底中に小ピットが発見されている。径は小さいもので８cm、大きくとも15cmで深さは５cmである。床面は貼床によって構築される。カマドの南側及び住居中央部では良く踏み固められているが、壁際ではやや軟弱な様子が認められる。ピットは６ケ所に検出された。P_1～P_4は柱穴と考えられるが、P_2とP_3の位置はかなり南壁に寄ったところに穿たれている。４本柱を有する他の住居跡と比較すれば通常を逸脱するような配置である。各柱穴が不整形となっているのも特色である。それぞれの床面



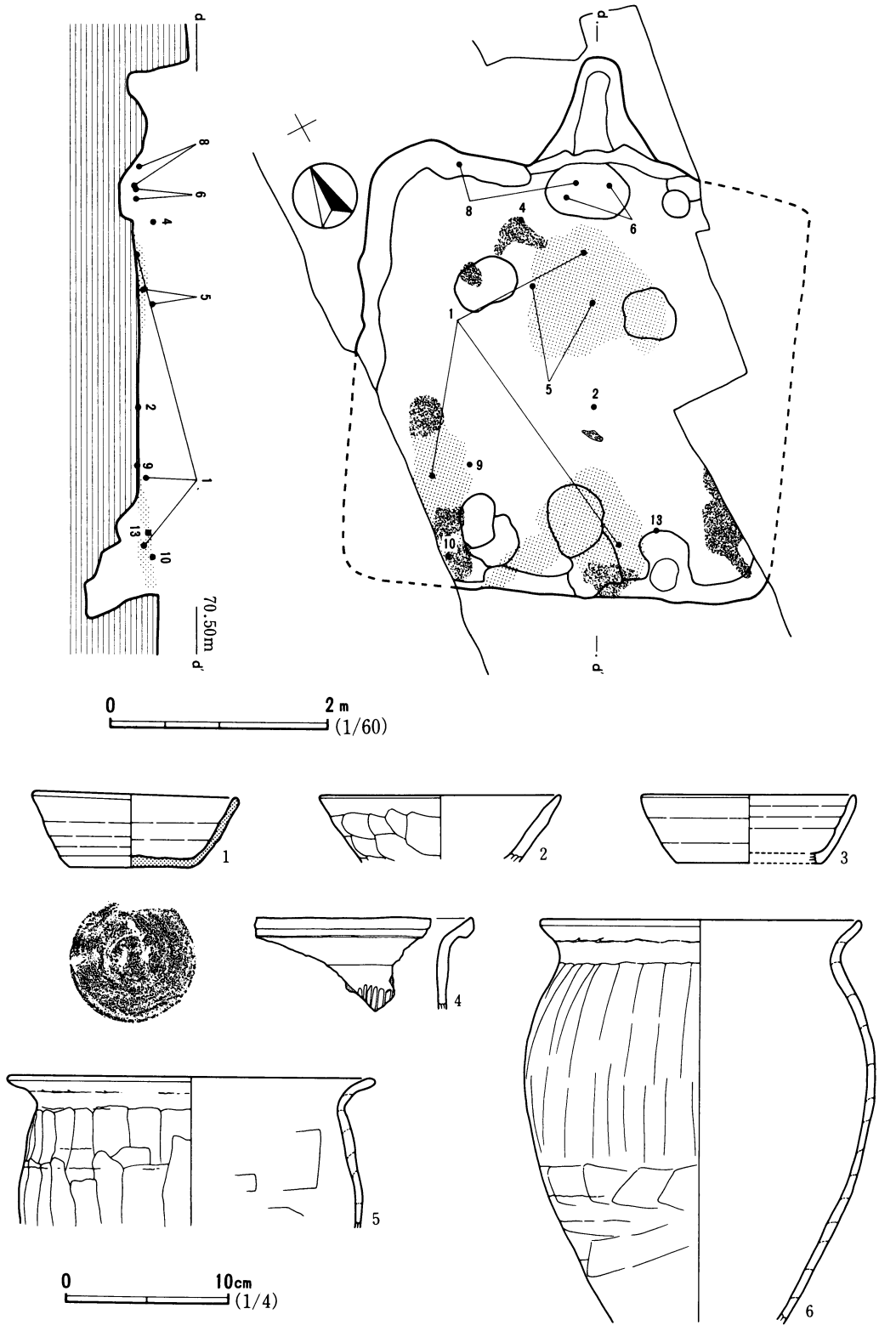
カマド土層説明

1．黒色土層　（山砂、焼土、炭化物が混ざる。）
2．暗褐色土層　（山砂と黒色土が混ざる。）
3．黄褐色土層　（山砂と粘土を主とする。）
3′．黄褐色土層　（３層に黒色土が僅かに混ざる。）
4．暗褐色土層　（山砂、焼土、黒色土が混ざる。）
5．橙褐色土層　（焼土を主とした山砂が混ざる。）
6．暗褐色土層　（山砂と粘土の中に焼土を含む。）
7．黒褐色土層　（黒色土に山砂、焼土が混ざる。）
8．黒褐色土層　（黒色土を山砂を主とする。）
9．暗褐色土層　（黒色土と山砂が混ざり焼土を含む。）
10．橙褐色土層　（山砂と焼土が混ざる。）
11．橙褐色土層　（焼土、山砂と黒色土が少量混ざる。）
12．暗褐色土層　（山砂と黒色土を主とし焼土を含む。）
13．橙褐色土層　（焼土と山砂を主とする。）
14．黒褐色土層　（黒色土と山砂ブロックが混ざる。）
15．暗褐色土層　（山砂とロームを主とする。）
16．黒褐色土層　（袖の下部構築材で粘土と黒色土が混ざる。）

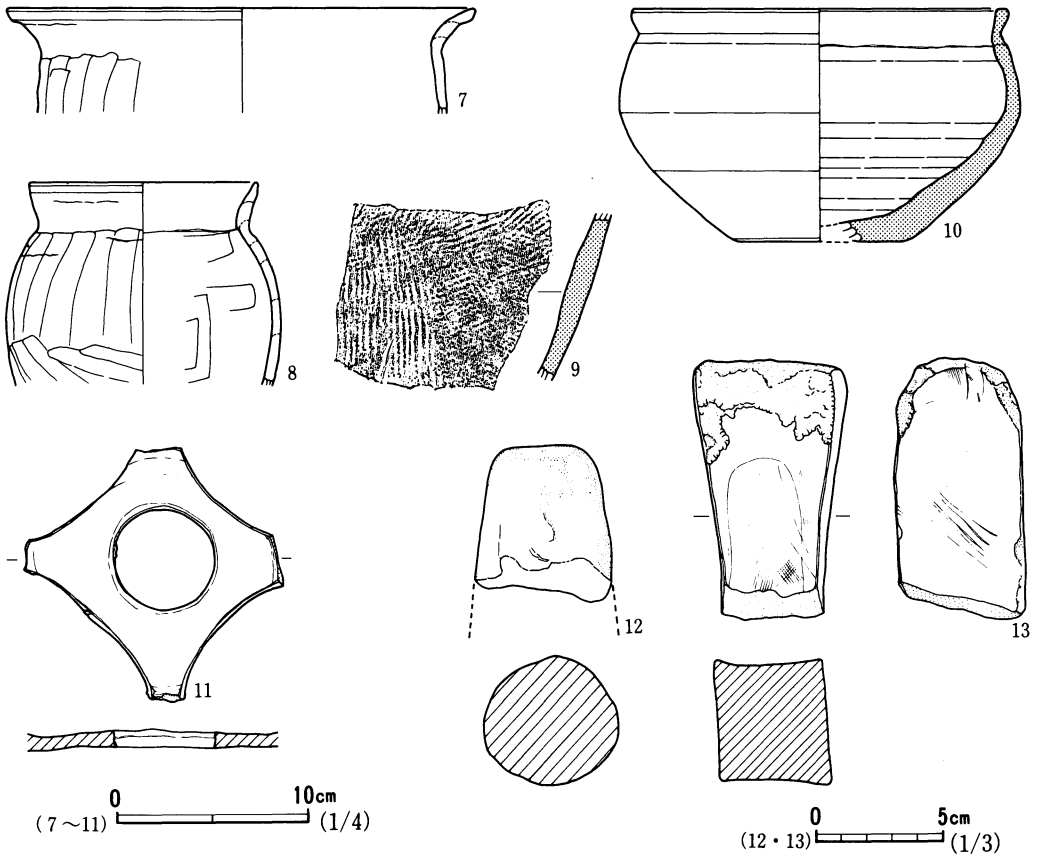
第17図　ＳＩ－009号跡カマド実測図

からの深さを示せばP₁66cm、P₂51cm、P₃47cm、P₄65cmとなっている。P₃・P₄には掘り替えが行なわれた様な形跡を認める。柱間はP₁－P₂245cm、P₂－P₃177cm、P₃－P₄225cm、P₄－P₁159cmとかなり不揃いである。ピットは柱穴のほかにP₅とP₆がP₂とP₃の中間に検出されている。P₅は長径65cm、短径50cmの楕円形で深さ38cm。P₆は住居跡の内側に向いて傾斜し、オーバーハングしている。P₅は入口に伴う梯子ピットで、P₆は貯蔵穴か特別の施設になろうか。カマドは北壁に構築されている。両袖は「ハ」の字形に開いて検出できたものの天井部はすでに崩落して遺存しない。焚口の幅は50cmを測る。煙道部は壁から65cmまで先に掘られ、煙出し部分の直下はピット状になる。以上のような住居跡の構造とは別に焼土と山砂が広範囲に検出された。この事実は本跡が火災住居の可能性が高いということを物語るものである。

遺物　出土遺物数は306点である。内訳は土器片283点、土製品1点、石器1点、砥石1点、礫20点である。このうちの石器1点とは第49図3に示した石斧である。おそらく本跡には伴わないと考えられる。1は須恵器の杯である。深めな作りでいわゆる箱型に近い。体部のロクロ目は割に強く口唇部は若干肥厚する。底部の切り離し痕はその後の回転ヘラケズリで全く消される。体部下端も底部同様回転ヘラケズリが行なわれる。胎土はスコリアが目立ちやや粗な状態を示す。焼成は甘い。色調は全体に灰褐色を呈し、灰色というよりか褐色に近い。復元口径12.4cm、器高4.5cm、底径7.6cmを測る。(図版15－8)。2はロクロ未使用の土師器杯である。体部は開きながら直線的に立ち上がり外面はヘラケズリを施す。内面はヨコナデの後軽いミガキを加える。胎土に砂、スコリアを含み焼成は普通。色調暗褐色。復元口径14.8cmを測る。3はロクロ整形で作られた杯で体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。胎土は砂質で焼成は普通。暗褐色を呈す。復元口径13.0cm、器高4.2cm、底径9.2cmである。4は須恵器か土師器かはっきりしない寸胴の甕の口縁部である。口唇部は三角形に肥厚し、胴部にはタタキ目が認められる(図版15－9)。5～8は甕である。5は口縁部が急激に外反する特徴をもつ。胴部調整は外面がヘラケズリで内面がヘラナデである。口縁部は外内面ともヨコナデである。胎土は砂質、復元径22.0cm(図版15－10)。7についても5と同様である。6は胴上半に張りをもち口縁部は外反して開く。胎土にスコリアを含み焼成は不良で器面が磨滅する。色調暗黄褐色。復元口径19.5cm(図版16－1)。8は丸い胴部から口縁部は直立気味に立ち上がる。胎土は砂質で焼成は普通。色調暗褐色。復元口径12.8cm(図版16－2)。9は須恵器の甕の胴部破片でタタキ目が加えられている。10は広口短頸壺である。胴部上半に張りをもち口縁部は短く立ち上がり、口唇部は平坦になる。胎土は密だが長石の微細粒を認める。焼成は良好。色調は暗灰色を呈す。永田・不入窯の製品である。復元口径19.6cm、器高12.3cm、底径9.2cm(図版16－3)。11は甑の底部である。須恵器か土師器かはっきりとしない焼成である(図版16－4)。12は土製支脚の上半部で13は砥石である。砥石の石材は砂岩で各面ともかなり使用された跡を残す。使用された4面のうち相対する2面は凹状となり、もう2面は平坦になっている(図版16－5)。



第18図　ＳＩ－009号跡遺物出土状況・出土遺物実測図①

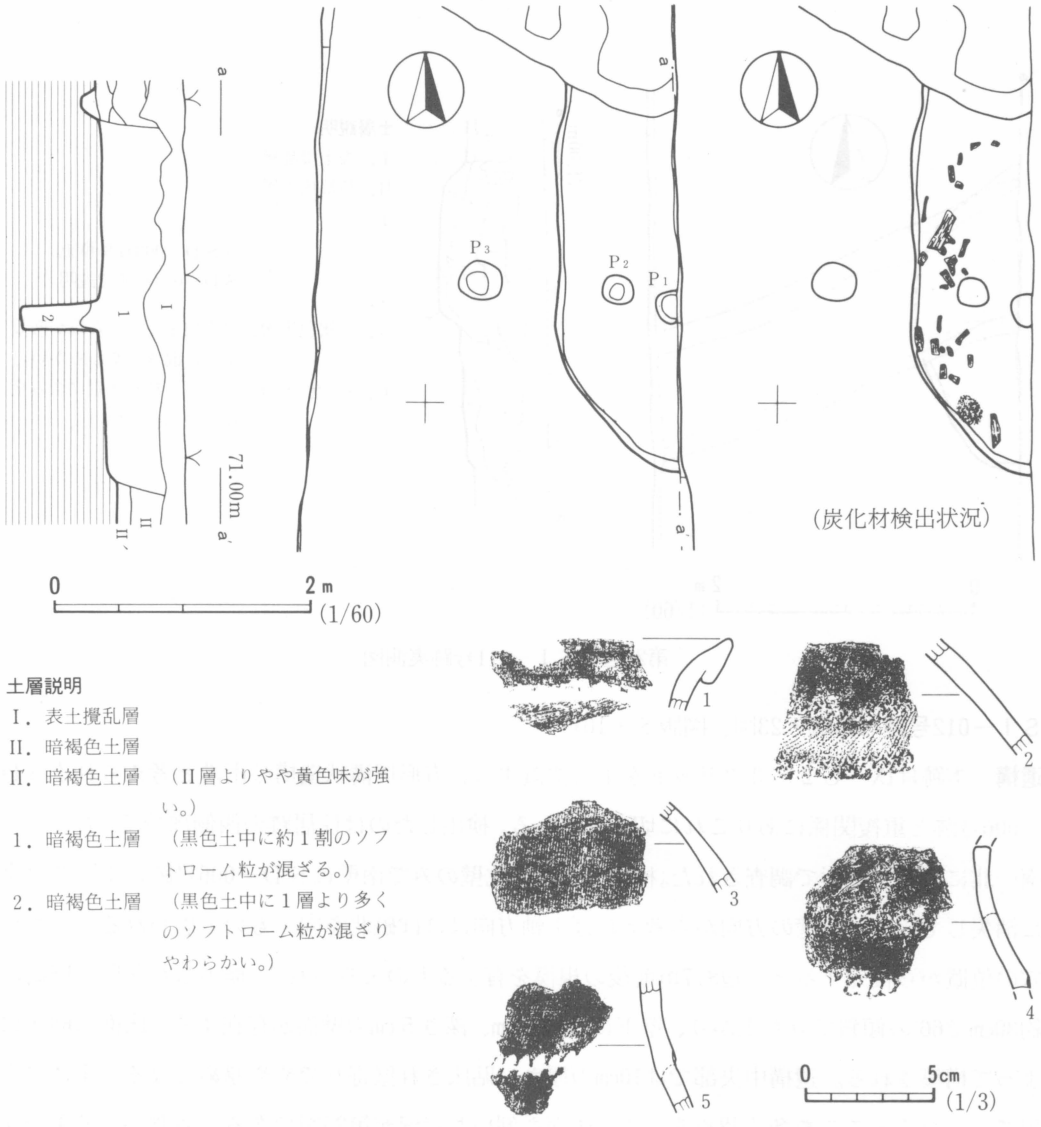


第19図　ＳＩ－009号跡出土遺物実測図②

ＳＩ－010号跡（第20図、図版７・19）

遺構　本跡はⅦ－Ｃ８グリッドに位置する。ＳＩ－009号跡と重複し、本跡の方が古いことは土層断面の観察、床面の消失から明らかになっている。遺構は弧を描く壁の一部を検出したにとどまる。大部分が調査範囲の外側へ広がる。したがって規模及び平面形態は明らかでない。検出面から床面までは10cmで、壁下に壁溝は確認されていない。また壁は傾斜して立ち上がる。床面は堅緻である。ピットは２ケ所に検出された。深さはP_1が63cmでP_2は32cmを測る。住居跡の外側P_3が検出されているが、遺構に伴うものか否かについては断定できない。P_1は柱穴になるかもしれない。そのほか炉などの施設は検出されなかった。本跡からは多量の炭化材が床面から検出されている。火災を受けたことを示すものである。

遺物　出土遺物数は土器片が５点である。図示した遺物がすべてであるが、北側で出土したものはＳＩ－009号跡として注記を行なっている。１は折り返し口縁を呈する壺の口縁部である。特に文様は施されない。２は壺の上半部で結節文の間にＬＲを原体とする細かな縄文が施されている。文様施文部分以外ではミガキの上に赤彩を行なっている。３は文様は認められないものの赤彩が施されている。４・５は甕の破片である。２点とも胴部と頸部との境で、接合部の



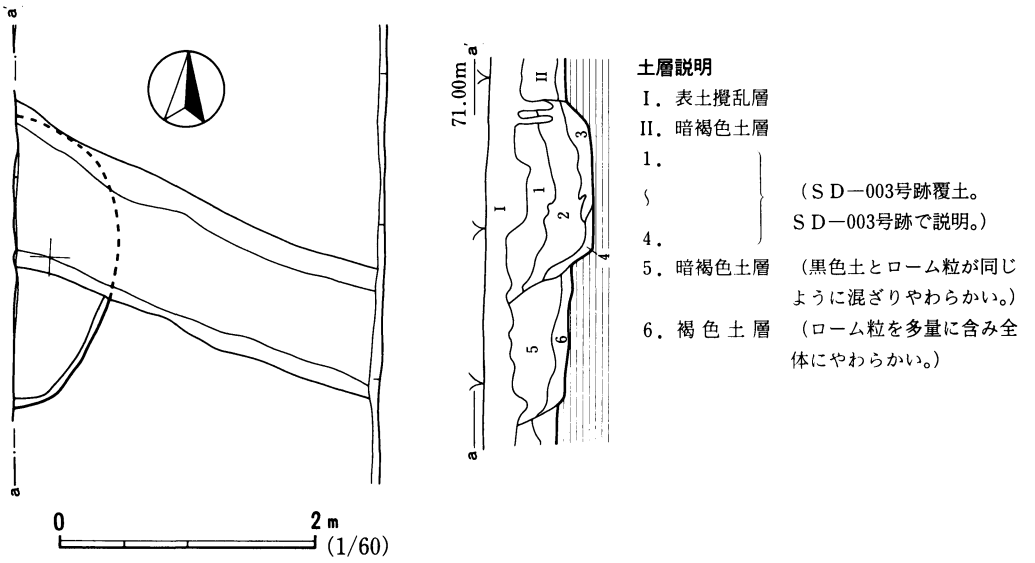
第20図　ＳＩ－010号跡実測図、出土土器拓影図

上に連続した刻み目が加えられている。焼成は概ね普通である（図版19―２）。

ＳＩ―011号跡（第21図）

遺構　本跡はⅧ―Ｂ４グリッドに位置する。円形周溝の一部と思われるＳＤ―003号跡と重複関係にあり、本跡はＳＤ―003号跡に完全に切られている。検出したのは遺構の極一部分でしかない。壁は弧を呈するがはたしていかなる形態であるかということは不明である。検出面から床面までは大変浅く10cmしかない。壁は傾斜しながら立ち上がり、その壁下に壁溝は存在しない。床面は堅い様子が認められるが平坦さを欠いている。ピットは１ケ所も検出されなかった。

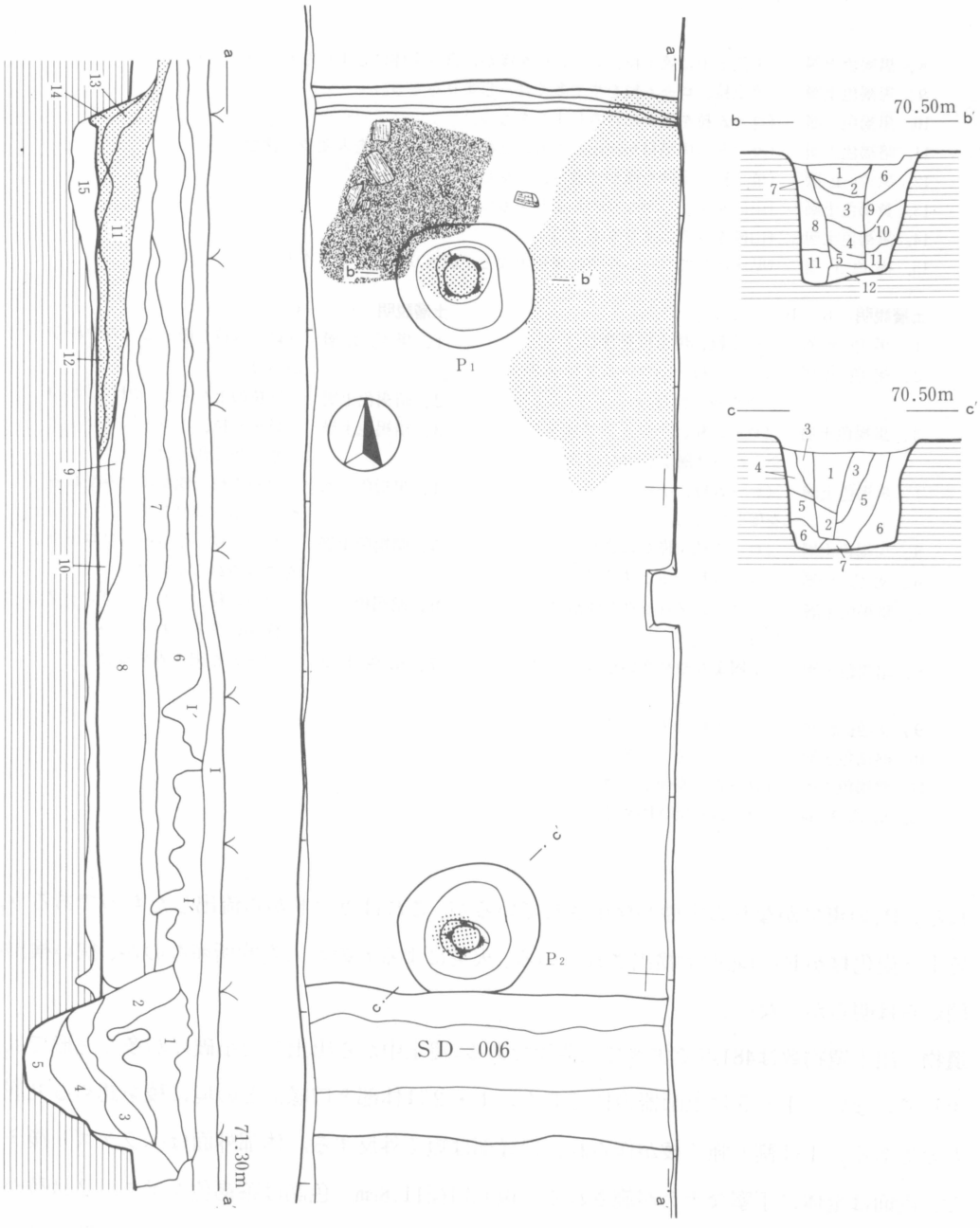
遺物　本跡からは１点の遺物も出土しなかった。したがって時期については不詳である。



第21図　SI−011号跡実測図

SI−012号跡（第22・23図、図版8・16）

遺構　本跡はIX−C2・3グリッドを主に位置する。方形周溝状遺構の南溝と考えられるSD−006号跡と重複関係にありこれに切られている。検出したのは住居跡の西側部分で、ちょうど南一北に縦断する形で調査された。検出した壁は北壁のみで南壁はSD−006号跡によって完全に消失している。北壁の方向から考えれば主軸方向はほぼ磁北を向くものと思われる。また柱穴の位置から復元すると一辺8.7m前後の規模を有するものとみられる。検出した北壁の壁高は約30cmで66°の傾斜で立ち上がり、壁下には幅10cm、深さ5cmの壁溝が存在する。床面は貼床によって構築される。遺構中央部では10cmの厚さに貼床され壁寄りでやや厚めとなる。全体に平坦で堅くなるところを多く認める。この床面を剝いだ状況が第23図である。西側から6条の溝が中に向いて伸びている。これはおそらく間仕切りの溝として考えられるものである。また検出範囲の東側では円形の小ピットが14ケ所に発見された。性格は判然としない。ただ本跡の周辺から加曽利B式土器の破片が出土していることと、ピットの配置が弧を描くことを考えると、縄文時代後期の竪穴住居跡の柱穴ととらえられないこともない。さて再び第22図に戻り、本跡に伴う柱穴はP_1とP_2の2ケ所に検出されている。2ケ所とも掘り方の平面形は略円形を呈し、その直径は$P_1$115cm、$P_2$118cmとかなり大きなものである。床面からの深さは$P_1$110cm、$P_2$95cmを測る。この柱穴で特徴的なのは柱穴の底に作られた据え方である。一度掘り方が完掘し終った後、中央にロームを突き堅めて作っている。柱穴をこの上に置いて沈下を抑えたと考えられる。こうした規模と、柱痕跡からかなりの柱材が使用されていたことが想像される。ピットはこのほかには検出されていない。カマドは検出部分より東側の北壁に構築されていると思わ



土層説明　a——a′

Ⅰ．表土攪乱層

Ⅰ′．表土攪乱層　（Ⅰ層と同様な土であるけれども、大変固くしまっている。）

1．
〜
7．　（ＳＤ−006号跡の覆土。6・7層についてはマウンドの可能性をもつ。ＳＤ−005・006号跡については47ページと48ページに記載。）

第22図　ＳＩ−012号跡実測図

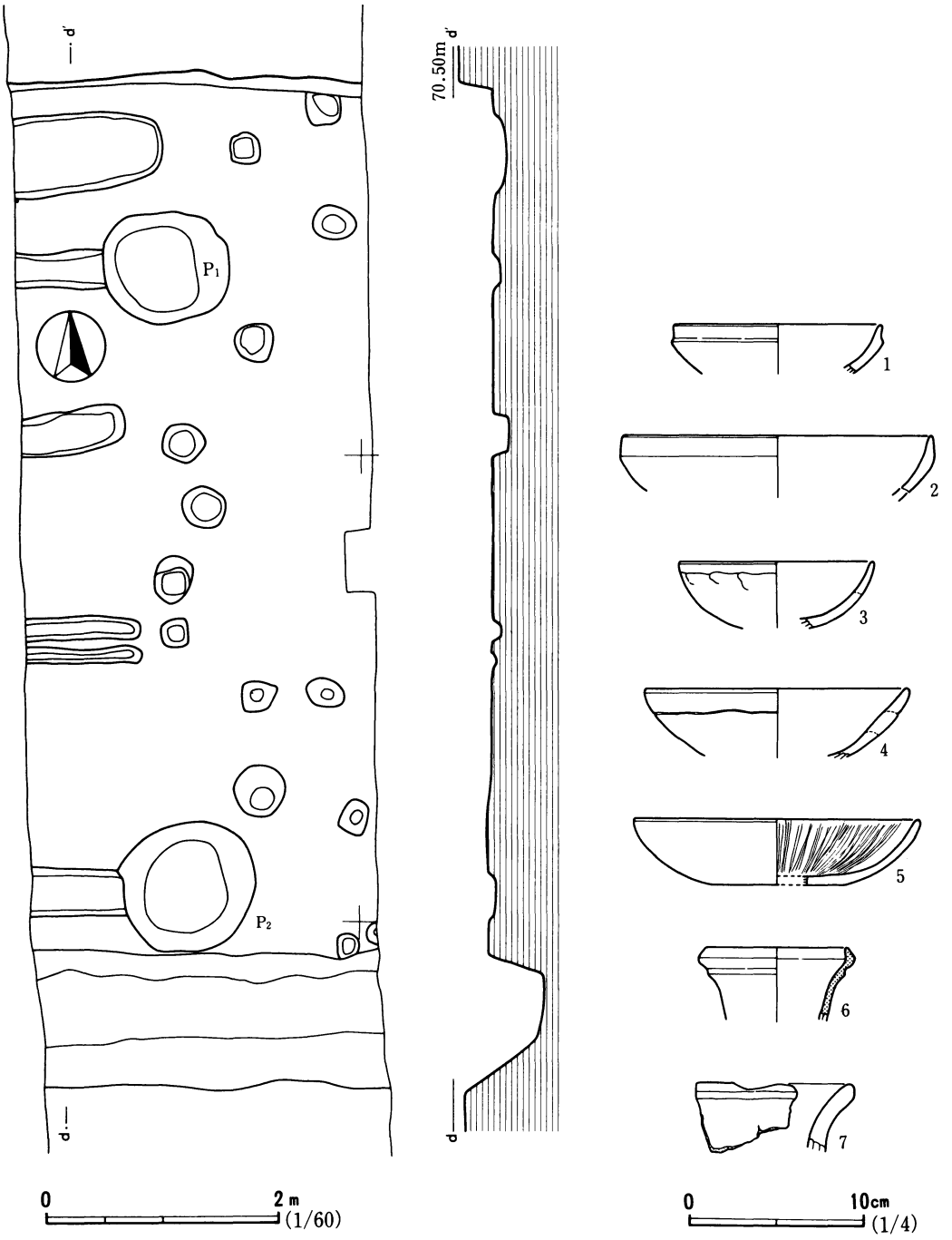
8．黒褐色土層　(黒色土中に焼土粒、ローム粒を僅かに含み全体にしまりをもつ。)
9．黒褐色土層　(焼土粒、ローム粒をやや多く含みしまりをもつ。)
10．黒褐色土層　(ローム粒を僅かに含みしまりをもつ。)
11．暗褐色土層　(カマドの構築材が流出したものと考えられ、山砂を大変多く含む。)
12．黒色土層　(焼土粒、山砂を僅かに含み、ややしまりをもつ。)
13．黄褐色土層　(山砂を主としかなりのしまりをもつ。)
14．黒褐色土層　(山砂を含みしまりをもつ。)
15．褐色土層　(貼床部分でロームを主に黒色土などが混ざり固くしまりをもつ。)

土層説明　b－b′
1．黒色土層　(炭化粒、焼土粒を含む。)
2．褐色土層　(ローム粒、小ロームブロックをやや多く含む。)
3．黒褐色土層　(ローム粒、小ロームブロックを含むが2層より少ない。)
4．黒褐色土層　(ローム粒、小ロームブロックを僅かに含む。)
5．黒褐色土層　(ローム粒を僅かに含む。)
6．褐色土層　(ローム粒を主とする。)
7．暗褐色土層　(小ロームブロックを僅かに含む。)
8．暗褐色土層　(7層よりやや多い小ロームブロックを含む。)
9．褐色土層　(ローム粒を主とする。)
10．暗褐色土層　(ローム粒をやや多く含む。)
11．暗褐色土層　(ローム粒を僅かに含む。)
12．褐色土層　(ロームを突き固める。)

土層説明　c――c′
1．黒色土層　(ローム粒を僅かに含みやわらかい。)
2．暗褐色土層　(細粒の土を主としやわらかい。)
3．暗褐色土層　(ローム粒、小ロームブロックをやや多く含む。)
4．黒褐色土層　(ローム粒を僅かに含みやわらかく、ボソボソとする。)
5．暗褐色土層　(ローム粒、小ロームブロックを含みやわらかい。)
6．暗褐色土層　(ローム粒、小ロームブロックを僅かに含みやわらかい。)
7．褐色土層　(ロームを突き固める。)

れる。P_1の東にかなりの山砂が検出されているが、これはカマドから流出したものであろう。焼土と炭化材がP_1の北西で検出されている。火災によるものか人為的所産なのか、狭い検出範囲からは明らかでない。

遺物　出土遺物数は481点ですべて土器片である。覆土中から出土した小破片が多く完形では出土していない。1～5は土師器の杯である。1・2は体部と口縁部との境に稜を認める丸底のものである。1は割と強く稜が作られ、口縁部は短く外反する。体部外面はヘラケズリ後ナデで、内面は全体に丁寧なナデが施される。復元口径11.8cm。色調は茶褐色を示す。2は稜が弱く口縁部は直立する。外面調整は1と同じで、内面はヨコナデ後ミガキを行なう。胎土は砂質で焼成も悪いため器面は荒れている。復元口径17.5cm。暗黄褐色の色調を示す。3は半球状の体部を有する。外面はミガキ、そして内面はナデの後に赤彩を施す。胎土には目立ってスコリアが含まれる。焼成はやや不良である。複元11.0cm。4は体部が内彎しながら立ち上がる。丸底になるか平底をもつか不明だがおそらくは平底と考えられる。調整は外内面ミガキである。胎土は砂質で焼成は普通。復元口径12.8cm。色調暗褐色。5は底部が作られ体部は内彎しながら立ち上がる。体部外面の調整はヘラケズリの後に軽いミガキで、内面は丁寧なナデである。また内面はナデの上に大変細くしかも密に放射状の暗文を施して仕上げている。胎土にはスコ



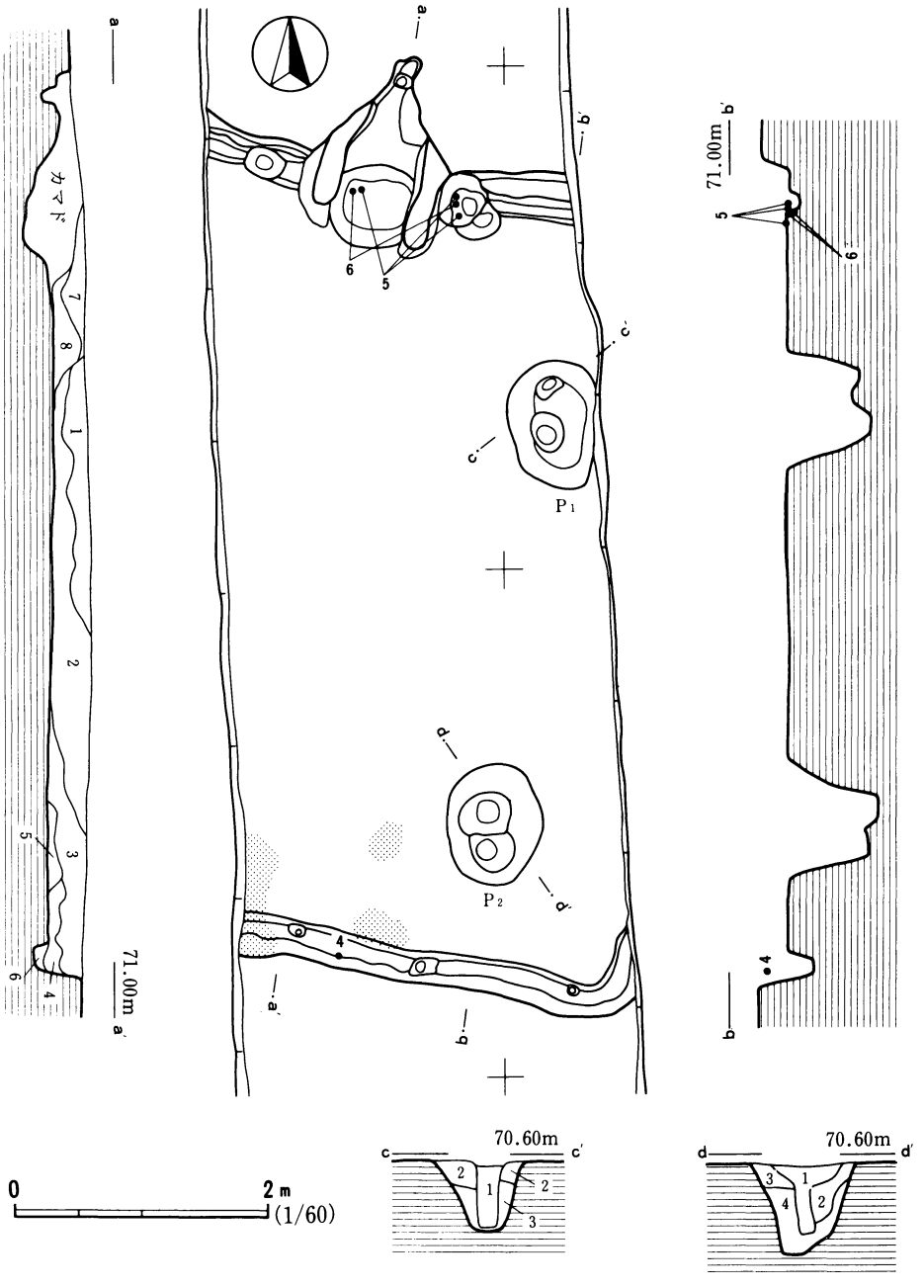
第23図　ＳＩ－012号跡掘り方・出土遺物実測図

リアが僅かに含まれる。焼成は普通である。色調は破片によって異なる。復元口径16.2cm、器高3.7cm、底径7.3cmを測る(図版16―６)。６は平瓶の口縁部になると考えられる。口縁上端部は内側に折られるように内傾する。胎土は微密で焼成は普通。断面の色調は淡灰色を呈す。復元口径8.0cm（図版16―７)。７は甕の口縁部破片で外内面ともヨコナデ調整される。

ＳＩ－013号跡（第24～26図、図版９・17）

遺構　本跡はIX－Ｃ６・７グリッドを主に位置する。カマドと南東のコーナー部分が掛かったので規模を復元することが可能となった。平面形は南東コーナーに丸味が認められることから隅丸方形を呈すると考えられ、一辺は6.5cm前後になるものと推測される。主軸方向はＮ－９°－Ｅである。検出面からの壁高は北壁20cm、南壁25cmを測り壁溝が伴う。南壁については壁直下に溝を認めるが、北壁側は壁の下端より内側に検出されている。深さは北側が５cm程で浅く、南壁の壁溝は小ピットを伴って深いところでは20cmを測る。南壁溝中の３ケ所小ピットのうち中央に位置するものは深さ40cmである。床面は貼床によって構築される。全体に良く踏み込まれており平坦な状態を残している。ピットは２ケ所に検出した。柱穴である。両方とも掘り方の下に２ケ所の凹部を有し、掘り替えが行なわれたような形跡を示す。P_1の深さは浅い方が56cmで深い部分が70cmである。P_2も同様に、64cmと75cmを測る。柱間間隔は340cm前後となる。カマドは両袖のみが遺存し天井は崩壊している。焚口の幅は約40cmで、袖は「ハ」の字形に構築される。煙道部は壁から60cm掘り込まれ、煙出し部の下には小ピットが穿たれている。袖及び火床部の下には構築材とは別の土が貼られている。火床は径50cmに浅く窪み、厚さ５cmに焼土が堆積する。また袖の左右にピットが検出されているのが特色である。おそらくカマドに附属するものであろう。本跡の南壁寄りには山砂が点在して検出されているがその性格は明らかでない。

遺物　出土遺物数は633点である。内訳は土器片618点、小礫15点となる。１は丸底で体部と口縁部との境に張り出す稜を作る杯である。口縁部は稜から直立する。調整は外内面とも最終的なナデを施して仕上げている。胎土は砂質で焼成不良。色調は外面暗褐色、内面黒色を呈する。復元口径12.2cm。２・３は丸底で体部は内彎しながら立ち上がる。２の調整は外内面ともミガキである。胎土にスコリアを含み焼成は普通。色調は明褐色を呈する。復元口径15.4cmである。３は器面が磨耗して調整痕が不鮮明である。色調は黄褐色。復元口径15.8cm。４は曲面とはなるが底部が意識されている。体部は僅かに内彎して立ち上がり、口縁部は短く直立して端部を丸く納める。内側は全体に半球状のきれいな曲面となる。調整は外面体部がヘラケズリの後に軽いミガキを加えている。内面は丁寧にミガキを行ない、その上に繊細な放射状暗文を施す。胎土にスコリアの含有が認められ焼成は普通である。色調は暗褐色を示す。復元口径11.8cm、器高4.35cm、底径5.6cm（図版17－１）。５は大形の杯である。基本的な形態及び調整は４と同様であるが口縁部の作りに若干の違いを認める。内面には間隔を置いて放射状の暗文が施される。胎土は砂質で焼成はやや不良。色調は暗褐色を呈す。復元口径19.4cm、器高5.9cm、底径8.2cmを測る（図版17－２）。６は高杯である。半球状の杯部と、上部で円筒形を呈する脚部とがナデによって微妙に接合しているのが特徴的である。杯部の調整は外面がナデで内面はナデの上に軽いミガキを施している。脚部外面は縦位のヘラナデである。胎土に砂、スコリアを含み焼



土層説明　a——a′

1．暗褐色土層　（焼土、山砂を僅かに含みややしまりをもつ。）
2．黒褐色土層　（ローム粒、山砂を僅かに含む。）
3．黒褐色土層　（小ロームブロック、ローム粒を僅かに含む。）
4．暗褐色土層　（ローム粒を僅かに含む。）
5．暗褐色土層　（山砂、焼土粒を含む。）
6．黒褐色土層　（ローム粒を僅かに含みやわらかい。）
7．暗褐色土層　（焼土、ローム粒、山砂を僅かずつ含みやわらかい。）
8．黒褐色土層　（山砂、焼土粒を僅かに含む。）

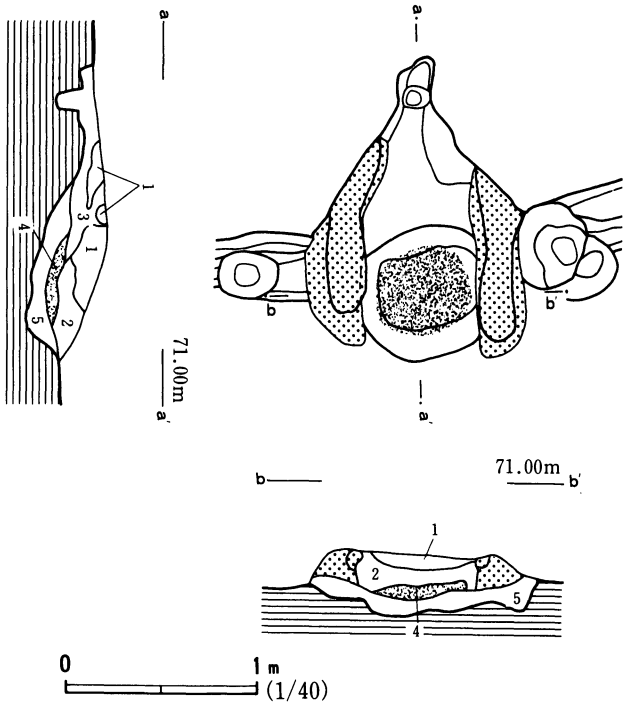
第24図　ＳＩ－013号跡実測図

土層説明　c——c′

1．黒褐色土層　（柱痕跡と考えられ、ローム粒、焼土粒を僅かに含む。）
2．暗褐色土層　（ローム粒を多く含む。）
3．暗褐色土層　（ローム粒をやや多く含む。）

土層説明　d——d′

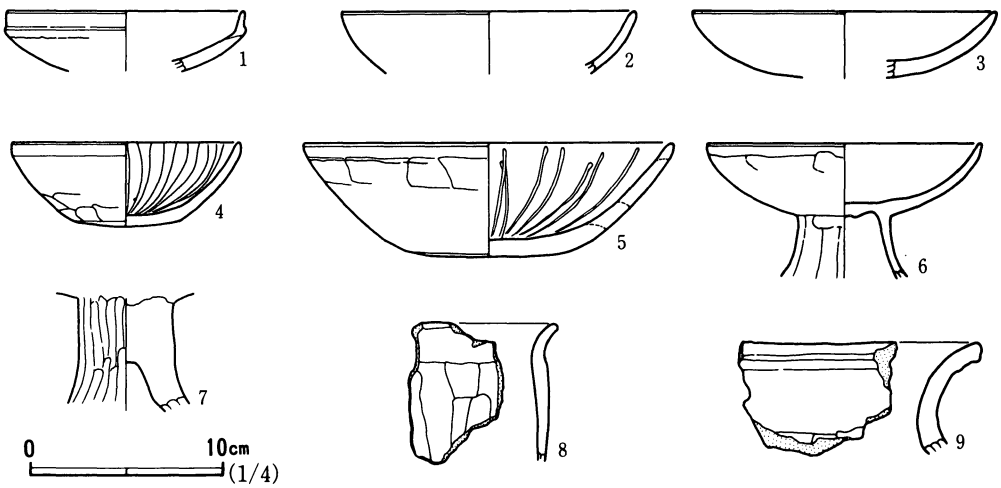
1．黒色土層　（柱痕跡と考えられ、ローム粒を僅かに含む。）
2．暗褐色土層　（ローム粒を多く含む。）
3．褐色土層　（ロームを主としてしまりをもつ。）
4．褐色土層　（ロームを主としやわらかい。）



カマド土層説明

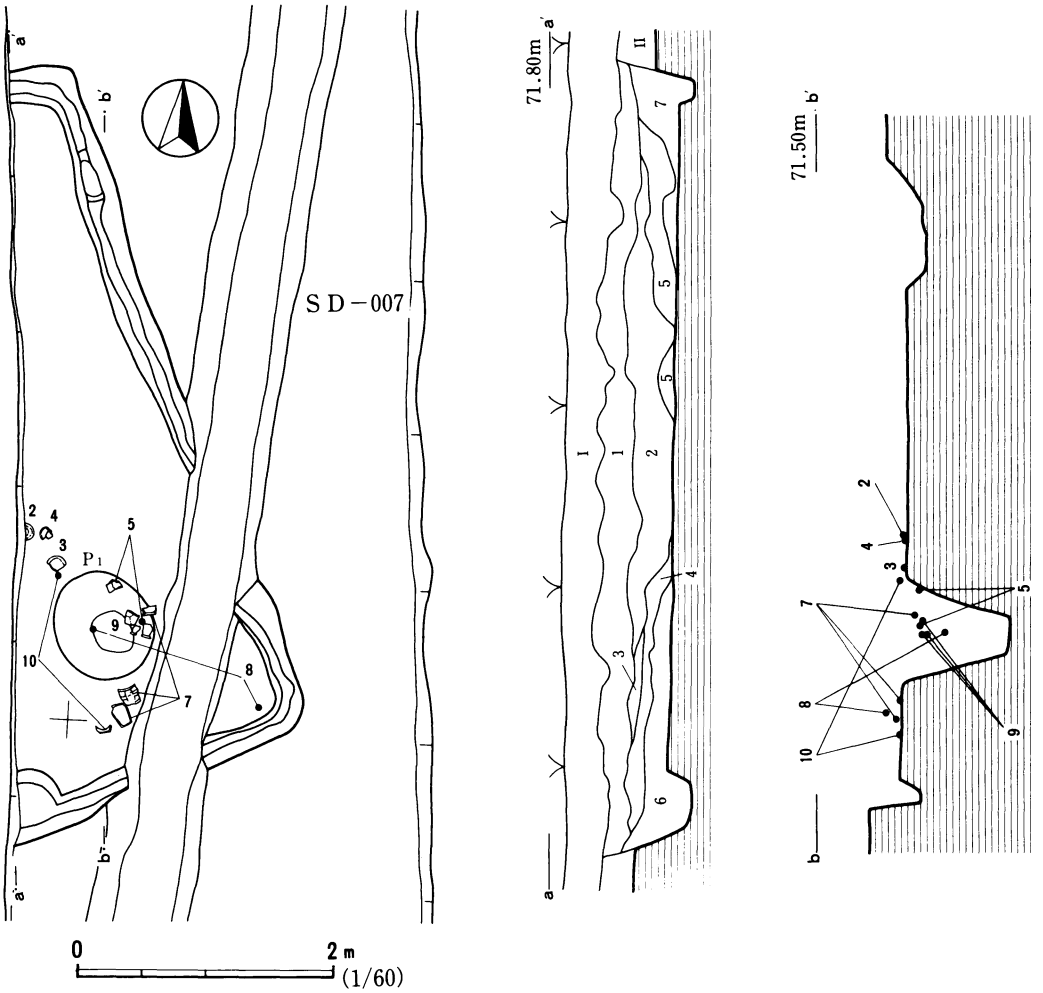
1．灰褐色土層　（山砂を主とし天井の崩落部分と考えられる。）
2．暗褐色土層　（焼土、山砂を霜降り状に含む。）
3．暗褐色土層　（焼土、山砂を均一的にやや多く含む。）
4．橙褐色土層　（焼土を主とする。）
5．暗褐色土層　（貼った部分で山砂、焼土、ローム粒が混ざる。）

第25図　ＳＩ－013号跡カマド実測図



第26図　ＳＩ－013号跡出土遺物実測図

成はやや不良である。色調は外面黄褐色、内面茶褐色を示す。復元口径14.3cm（図版17－３）。７は高杯の脚部で６と比較するとかなりごつい感じを受ける。８・９は甕の口縁部破片である。８の胴部はあまり張りをもたないと考えられ、口縁部はゆるやかに外反する。９は口唇部が僅かに肥厚する。胎土にスコリアを認める。



土層説明

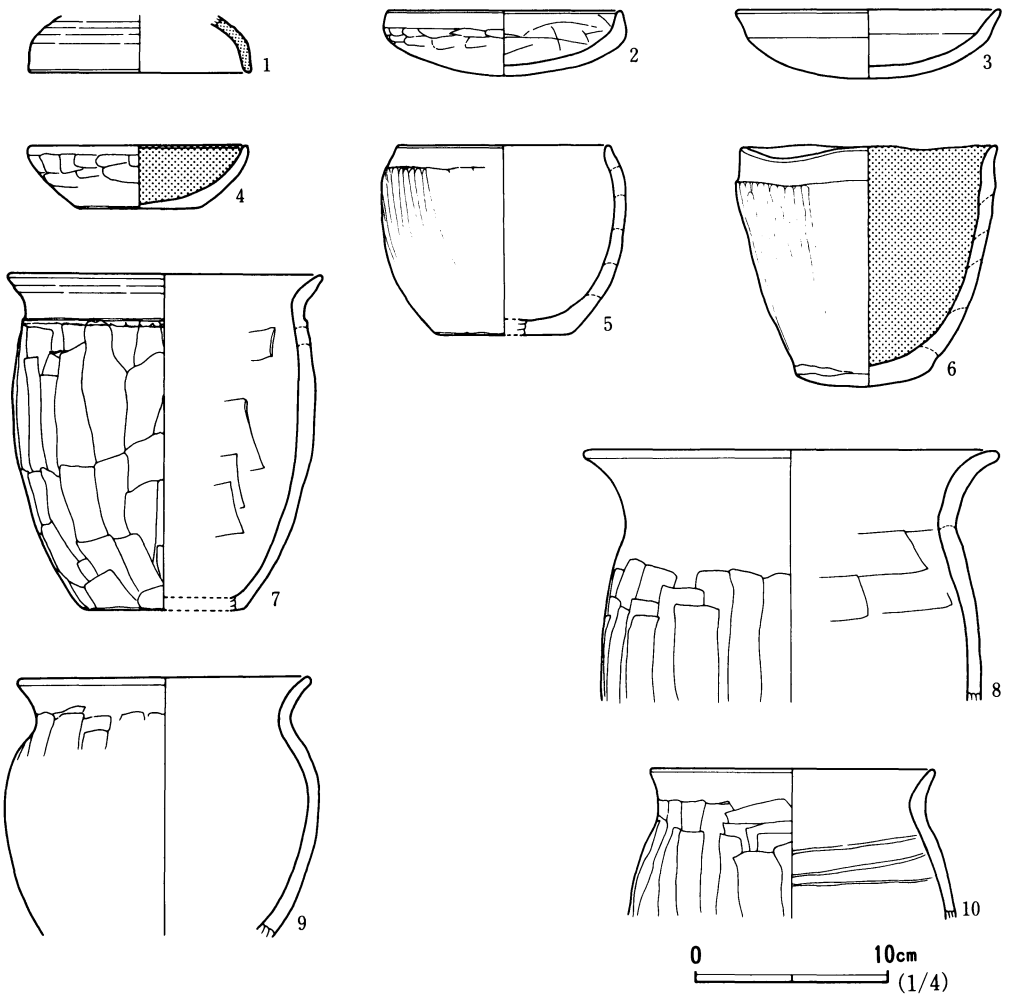
Ⅰ．表土攪乱層
Ⅱ．暗褐色土層
1．暗褐色土層　（焼土粒、炭化物、ローム粒を僅かずつ含みやわらかい。）
2．黒褐色土層　（黒色土にローム粒を僅かに含みやわらかい。）
3．黒色土層　（ローム粒は目立たずやわらかい。）
4．黒褐色土層　（ローム粒、小ロームブロックを含みやわらかい。）
5．暗褐色土層　（ローム粒をやや多く含みやわらかい。）
6．暗褐色土層　（５層より少なめのローム粒を含みやわらかい。）
7．暗褐色土層　（ローム粒を主とし全体にやわらかい。）

第27図　ＳＩ－014号跡実測図

ＳＩ－014号跡（第27・28図、図版９・17・18）

遺構　本跡はＸ－Ｃ４・Ｄ４グリッドを主に位置する。方形周溝状遺構と考えられるＳＤ－007号跡と重複関係にあり、本跡が切られている。検出したのは東壁と南東コーナー、それと北東のコーナーの一部である。完掘した東壁の規模は6.55mを測り、その方向はＮ－25°－Ｗを指す。検出面からの壁高は25cmで約80°の傾斜で立ち上がる。壁下には壁溝がめぐる。南壁の一部分を除き幅は25cm前後で深さは10～20cmである。床面は貼床によって構築される。全体に平坦で堅く踏み込まれている。ピットはP_1が検出されたのみである。掘り方は円形を呈し、上端で径85cm、下端で30cmを測る。深さは床面から85cmである。柱穴と考えられる。出土遺物のほとんどがP_1の周辺に集中する。カマドなどそのほかの施設は検出されなかった。

遺物　出土遺物数は428点である。内訳は土器片385点、礫15点、鉄器小片１点である。１は須恵器の杯である。天井部は甲高気味となり、口縁部は長く下に折り曲げられた形となる。胎土は長石の微細粒を含むが緻密な状態で、焼成も良好である。色調は暗灰色を呈する。復元口径11.4cm。２は丸底で体部と口縁部との境に弱い稜を作る杯である。体部外面はヘラケズリ後軽いミガキを施す。内面はナデの上に不規則な暗文を加えて仕上げている。胎土にはスコリアが認められ、焼成は普通。色調は明褐色を呈する。口径12.2cm、器高2.9cm（図版17－４）。３は丸底の杯で、口縁部は体部との境に作られた稜からゆるやかに外反する。外内面とも器面が剝落しており調整痕は不鮮明。色調黒褐色。口径13.6cm、器高3.7cm（図版17－５）。４は平底が作られ、体部は全体に内彎しながら立ち上がる杯である。内側は半球状を呈し、底部の器厚は薄い。調整は体部外面がヘラケズリの後ナデで、内面はミガキの上に黒色処理を施している。胎土は砂質で焼成はやや甘い。色調は暗茶褐色を呈する。口径11.2cm、器高3.3cm、底径6.2cm（図版17－６）。５は体部に弱い張りを有する鉢である。底部は平底で安定し、口縁部は内傾して端部を丸く終わらせている。体部外面はヘラケズリの後ミガキを施し、内面は全体にミガキで仕上げている。胎土は密な状態を示すがスコリアが目立ち、焼成は普通となっている。色調は茶褐色を呈する。口径11.0cm、器高9.9cm、底径7.0cmである（図版17－７）。６も鉢であるが底部は丸底に近く不安定である。体部は下端で若干くびれ、中位は僅かに張りをもって立ち上がる。口縁部と体部とは稜によって明瞭に分かれ、端部は僅かに外反する形となる。調整は５と同様であるが、内面には黒色処理が施されている。胎土は密であるが焼成は不良で、器面の剝落が著しい。外面の色調は暗黄褐色である。口径13.0cm、器高12.5cm、底径は下端部の稜の位置で7.2cmを測る（図版18－１）。７は胴部に僅かに張りを有する小型の甕である。口縁部は外反して開く。胴部外面の調整はヘラケズリで、下位は斜方向に、そして中位から上位にかけては縦方向に行なわれている。内面はヘラナデで、ヘラ当て痕が明瞭に残されている。口縁部はヨコナデである。胎土にスコリアが認められ、焼成はしっかりしている。色調は茶褐色を呈する。口径16.0cm、器高17.4cm、底径8.4cm（図版18－２）。８は肩があまり張らず、口縁部が

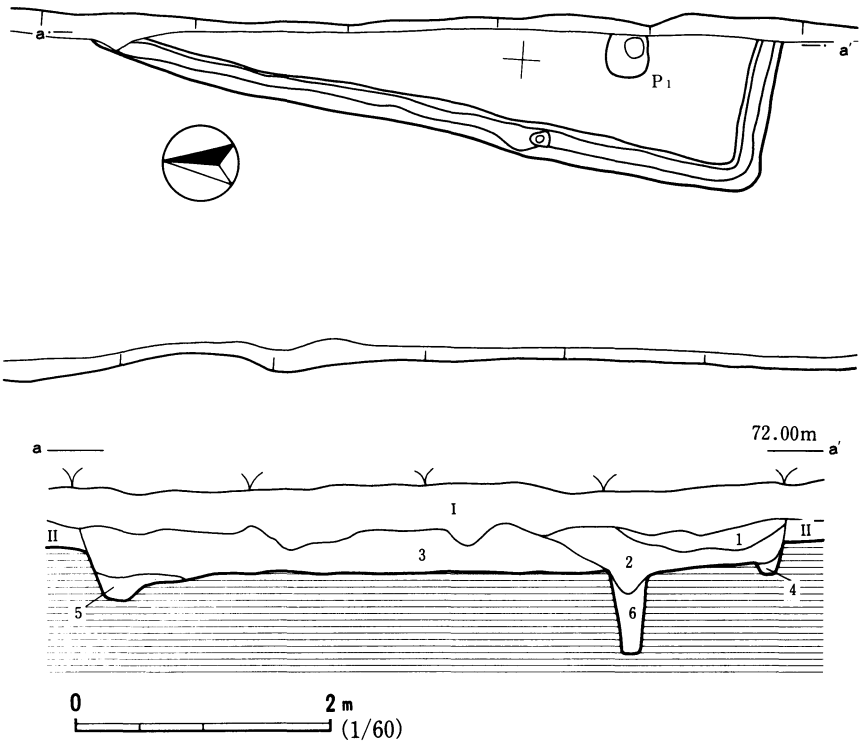


第28図　ＳＩ－014号跡出土遺物実測図

外反する甕である。調整は口縁部から頸部にかけてヨコナデで、胴部外面にはヘラケズリが施される。内面はヘラナデである。胎土中には石英粒、長石粒が多く含まれており、焼成は良くない。色調は暗褐色となっている。復元口径21.2cmを測る（図版18－３）。９は胴上半部、肩のあたりに張りのある小型甕である。外面の調整は最終的にナデで、内面はヘラナデである。胎土には小石や、長石粒、石英粒が多く含まれている。焼成は甘くもろい感じである。色調は暗褐色。口径14.8cmを測る（図版18－４）。10も小型甕で、口縁部は小さく外反して立ち上がる。胴部外面にはヘラケズリ痕が残る。胎土はスコリアを認めるが密な状態を示し、焼成も概ね良い。色調は明褐色を呈す。復元口径14.5cm（図版18－５）。

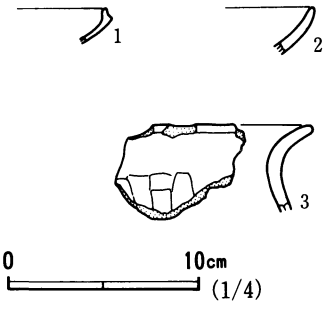
ＳＩ－015号跡（第29図、図版10）

遺構　本跡はⅪ－Ｄ１・２グリッドに位置し、今回の調査で検出した住居跡のうち最も南で発見されたものである。しかし、南西のコーナー部分と西壁を明らかにできたにすぎない。検出



土層説明

Ⅰ．表土攪乱層　（全体にかなり固くしまっている。）
Ⅱ．暗褐色土層　（Ⅰ層と同様全体に固くしまっている。）
1．黒褐色土層　（僅かに焼土を含みしまりをもつ。）
2．黒褐色土層　（1層よりやや多い焼土を含み、しまりをもつ。）
3．黒褐色土層　（黒色土にローム粒が含まれ若干しまりをもつ。）
4．暗褐色土層　（ローム粒を主とし全体にやわらかい。）
5．暗褐色土層　（黒色土にローム粒を僅かに含む。）
6．暗褐色土層　（黒色土とローム粒が混ざる。）

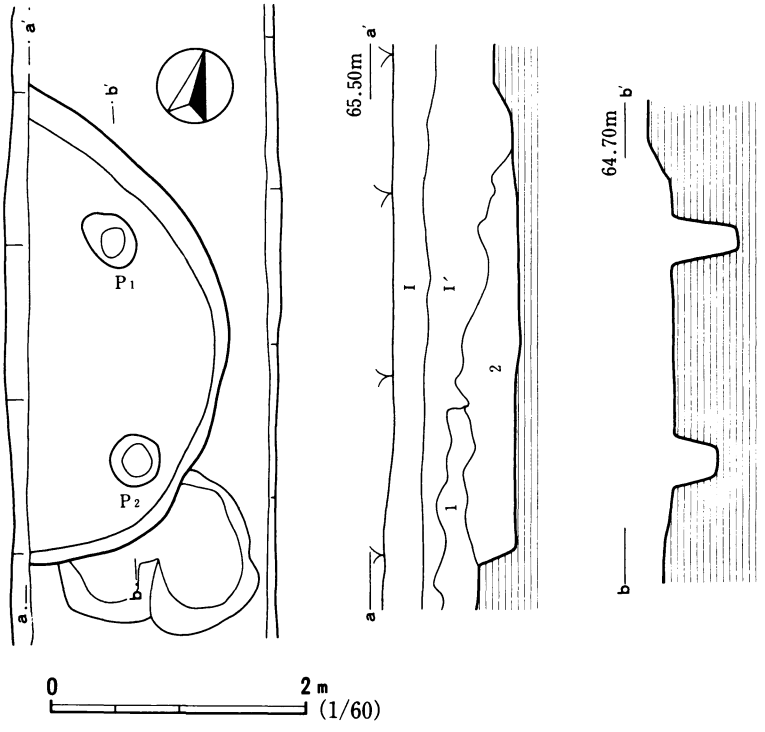


第29図　ＳＩ－015号跡・出土遺物実測図

面から床面までは20cmで、壁下には溝がめぐる。西壁の溝に小ピットが穿たれているほかは、幅20cm前後で深さは５～10cmである。壁は、約80°の傾斜で立ち上がり、遺存は良好である。床面は特に堅いとまではいかないが、貼床によって平坦に構築される。ピットはP1の１カ所が検出された。円形の掘り方で床面からの深さは65cmである。位置から考えて柱穴であろう。カマドなどのほかの施設については明らかでない。

遺物　出土遺物数は土器片が44点である。多くは細片で接合もしない。そのなかから図示できたのが口縁部破片の３点である。１は口縁部と体部との間に稜を作る杯である。口縁部は短く内傾しながら立ち上がる。胎土は密で焼成は良好である。色調は暗褐色を呈する。２は全体に内彎し口唇部が丸く終わる杯である。外面の調整はミガキで、内面にはナデが施される。色調

は黄褐色である。3は口縁部が大きく外反している甕である。調整は外内面ともヨコナデで、外面の頸部以下にヘラケズリが認められる。胎土は砂質で、焼成は普通になっている。色調は暗褐色を呈する。



土層説明

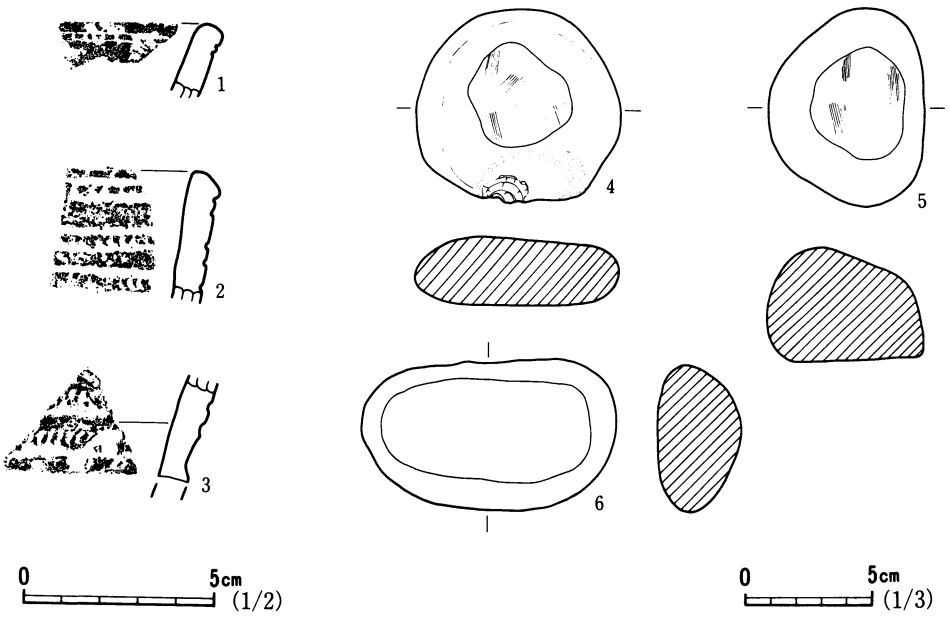
I．表土攪乱層　（かなりのしまりをもつ。）
I'．表土攪乱層　（真黒の土を主にしてやや粘性を有する。）
1．暗褐色土層　（黒色土とローム粒が混ざりやや粘性をもつ。）
2．暗褐色土層　（焼土粒を僅かに含む。）

第30図　ＳＩ－016号跡実測図

ＳＩ－016号跡（第30・31図、図版10・18）

遺構　本跡はII－Ｂ１・２グリッドを主に位置する。調査した住居跡のなかで最も北側で発見されたもので、ちょうど尾根状の部分に所在している。遺構の平面形は円形あるいは楕円形を呈すると考えられる。検出したのはその東側の半分である。南側ではＳＫ－008号跡と切り合い関係にあり、現状での規模は最大を測るところで3.70mである。壁の立ち上がりは東壁から北壁は比較的ゆるやかで、南側で約70°となっている。壁溝は検出されていない。床面は平坦に構築されているが、場所によっては堅さを欠くところもある。ピットは２ケ所に検出されている。P_1は不整楕円形の掘り方を示し、深さ52cmある。P_2は径40cm弱で、深さは38cmを測る。２ケ所とも壁寄りに穿たれている。柱穴と考えられる。この２ケ所のピット以外には炉などの施設は検出されなかった。

遺物　出土遺物数は42点である。内訳は土器片20点、石器３点、礫19点である。土器片はすべ



第31図　ＳＩ－016号跡出土遺物実測図

て縄文式土器の細片で、多くは採拓に堪えないものである。第31図１は口縁部に幅の狭い半截竹管状工具によって、横方向に爪形文が施文されている。遺存部には爪形文は一段のみ認められ、やや間隔を置いて施されている。２も半截竹管状工具によって爪形文が施文される。遺存部では口縁部に３列認められる。３は口縁部の直下と考えられる。１・２と同様爪形文が認められる。いずれも胎土は砂質である（図版18－６）。４～６は磨石である。石材は４・５が砂岩で、６は安山岩が用いられている。また６には熱を受けた痕跡が認められ、色調が赤茶色になっている。

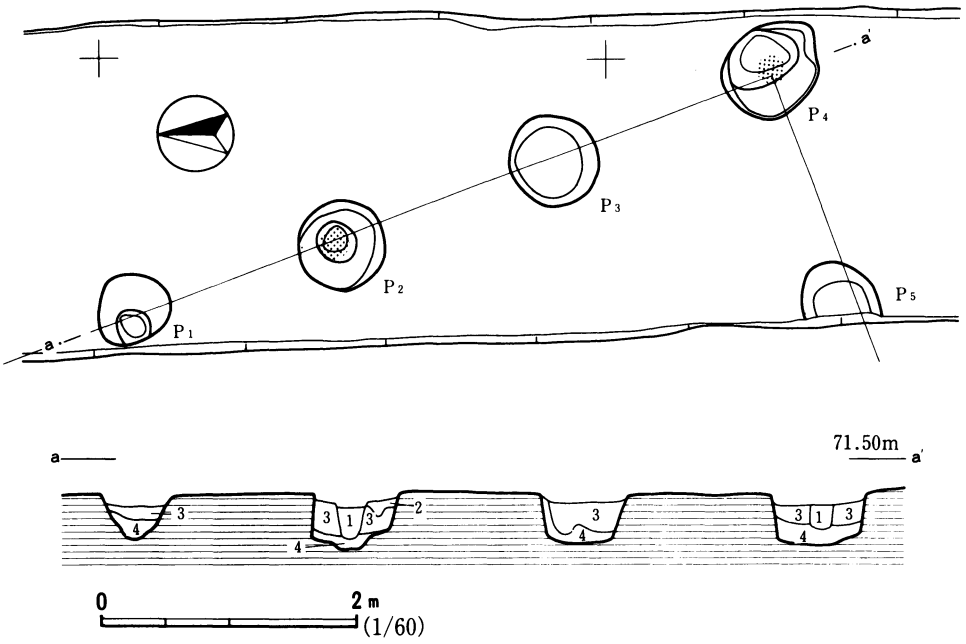
２　掘立柱建物跡と出土遺物

検出した掘立柱建物跡は１棟である。

ＳＩ－001号跡（第32図、図版10）

遺構　本跡はXI－Ｄ１・２・３グリッドに位置する。調査遺構中最も南にあたる。桁行３間、染行１間を検出したにとどまり、全体の規模については明らかでない。P_1－P_4の桁行方向はＮ－20°－Ｗに傾く。各柱穴の掘り方の平面形は円形を呈し、直径は$P_1$54cm、$P_2$68cm、$P_3$74cm、$P_4$80 cm、$P_5$62cmである。検出面からの深さは、$P_1$31cm、$P_2$46cm、$P_3$37cm、$P_4$38cm、$P_5$35cmで柱穴底面のレベルにそれほど大きな差はない。P_2とP_4では柱痕跡が確認されており、これをもとにP_1からP_4の柱間間隔を測ると1.8mの等間隔になる。また、P_4とP_5の間隔は1.9m前後になる。

遺物　合計18点の土器片が出土しているが、構築時期を決定するには不十分なものである。



土層説明

1．黒褐色土層　（黒色土にローム粒と焼土粒を含む。柱痕跡と考えられる。）
2．暗褐色土層　（ソフトローム粒と黒色土か混ざり、焼土粒を少量含む。）
3．黒色土層　（黒色土にソフトローム粒が混ざり、炭化粒と焼土粒を含む。）
4．暗褐色土層　（ソフトローム粒を主として、小ロームブロックを含む。）

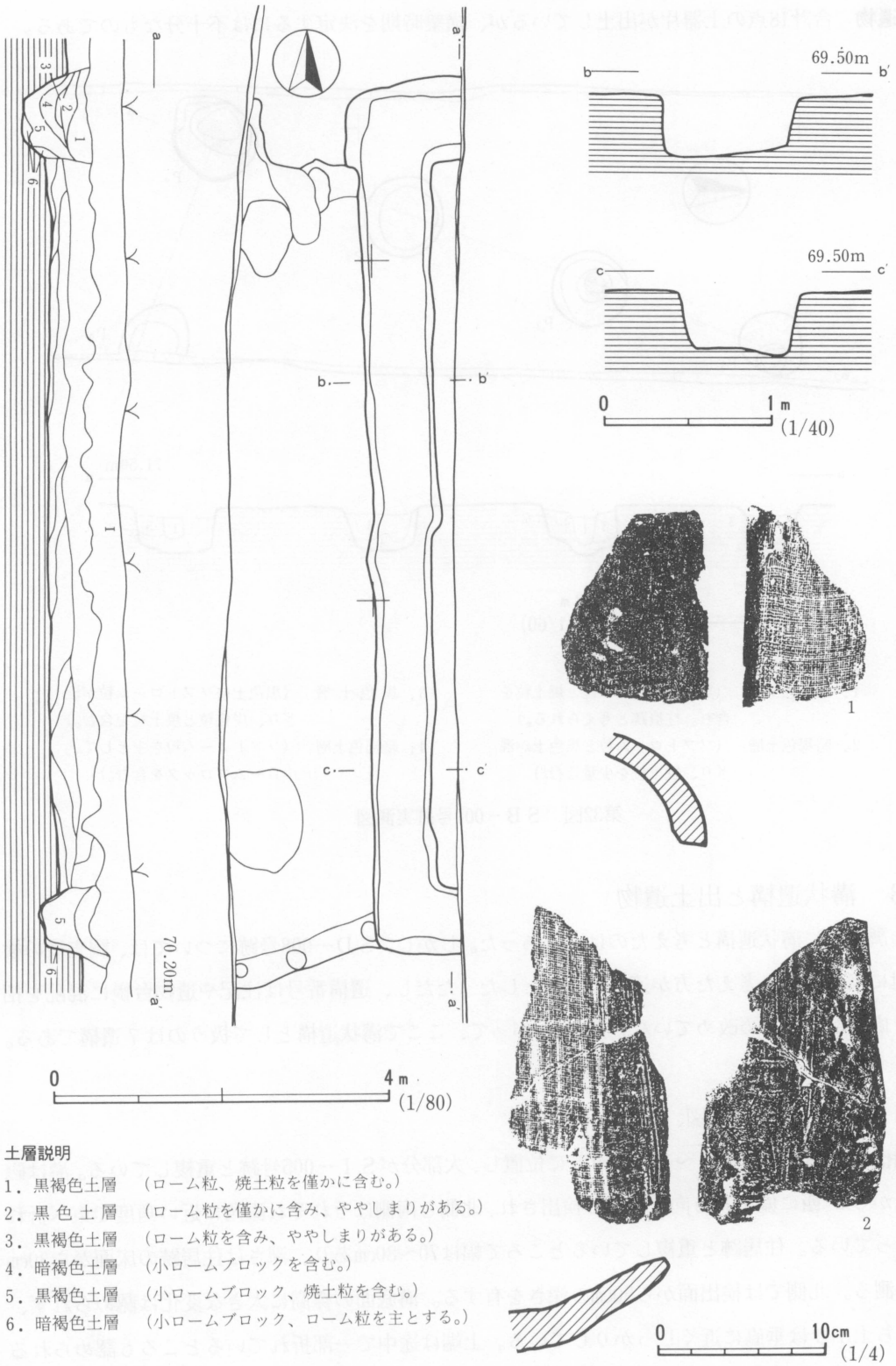
第32図　ＳＢ－001号跡実測図

3　溝状遺構と出土遺物

調査時に溝状遺構と考えたのは８条あった。しかし、ＳＤ－008号跡については、調査後の検討により土坑と考えた方が適切であるとした（ただし、遺構番号は注記や遺物台帳に混乱を招く虞れがあるため改めていない）。したがって、ここで溝状遺構として扱うのは７遺構である。

ＳＤ－001号跡（第33図、図版５・20）

遺構　本跡はⅥ－Ｃ５～８グリッドに位置し、大部分がＳＩ－005号跡と重複している。溝は磁北から２°西に偏する方向に伸びて検出され、北側と南側はそれぞれ直角に近い角度で東へ折れ曲っている。住居跡と重複しているところで幅は70～80cmあり、深さは住居跡の床面から30cmを測る。北側では検出面から50cmの深さを有する。溝底面の標高に大きな変化は認められず、立ち上がりは垂直に近くしっかりしている。上端は途中で一部折れているところも認められるが、ほぼ直線的に伸び、長さは外側で10.4mである。本跡は方形周溝状遺構の西溝と考えられ北側で東へ伸びる溝は北溝に、そして南端で東へ走っている溝は南溝の一部と考えられる。



土層説明

1．黒褐色土層　（ローム粒、焼土粒を僅かに含む。）
2．黒 色 土 層　（ローム粒を僅かに含み、ややしまりがある。）
3．黒褐色土層　（ローム粒を含み、ややしまりがある。）
4．暗褐色土層　（小ロームブロックを含む。）
5．黒褐色土層　（小ロームブロック、焼土粒を含む。）
6．暗褐色土層　（小ロームブロック、ローム粒を主とする。）

第33図　ＳＤ－001号跡・出土遺物実測図

遺物　出土総数は731点である。内訳は土器片665点、瓦３点、鉄片１点、礫62点である。しかし、ＳＩ－005号跡のところでも述べたとおり、本跡とＳＩ－005号跡の遺物とは混在してしまった様子を示し、確実さを欠くところがある。「□里長」の墨書土器の半分は本跡から出土したもので、かなり物の移動が考えられる。図示したのはこれらの遺物のなかで住居跡の方からは出土しなかった瓦である。２については２点の破片が接合したものである。

丸瓦　１は左広端部の破片である*。凸面はナデツケ調整で、叩きの痕跡は消されている。側面を凹面側に２面ヘラケズリで調整している。凹面の布圧痕から、経糸25本×緯糸24本（３cm四方）の平織りの布を使用していることがわかる。糸切り痕はみられず、粘土板の状態ですり消しているのかもしれない。胎土がやや粗い、灰白色の瓦である。

平瓦　２は右広端部の一部が残る破片。凸面は全体をナデツケ、ところどころ押圧とみられる浅いくぼみがある。叩き目はまったく観察できない。側端は５㎜ほどの厚みしかなく、凹面側でかなり厚く切り捨てている。凹面には枠板痕と思われるタテ方向の段差のラインがみられる。そしてそれと直角に交差する、布をもちあげていた痕跡が４本ある。間の長さは、狭端側から、５cm・4.5cm・４cmとなり、これが桶の枠板に綴じ込んであった糸の痕跡かどうか不明だが、枠板を何らかの方法によって、糸で補強していたのではないだろうか。胎土は丸瓦１に似て、やや砂っぽく、色調も灰白色である。桶巻作りで、下っても８世紀中葉までであろう。

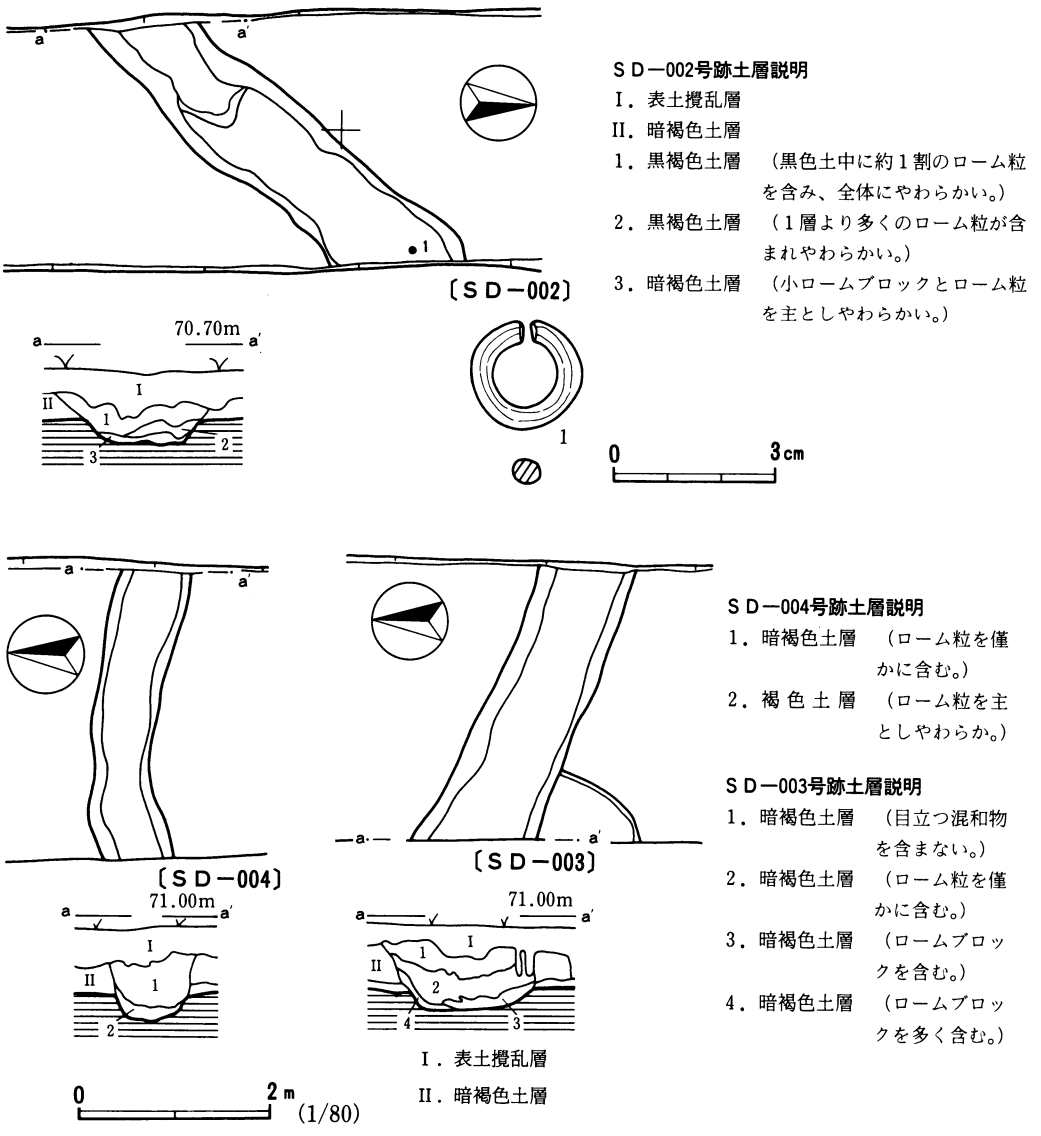
（今泉　潔）

ＳＤ－002号跡（第34図上段、図版13・20）

遺構　本跡はⅦ－Ｂ３・Ｃ３グリッドに位置している。調査区内をＮ－40°－Ｅの方向に向き、北と南に伸びている。掘り方の上端は直線的でなく、細かにみれば蛇行を呈する。幅は80cm～100cmで検出面からの深さは北東側で10cm～15cm、南西側ではそれよりやや深くなって25cm～30cmである。断面形態は箱形から「Ｕ」の字形となるが、底面には小さな凹凸が認められる。調査範囲の北東端で耳環が出土しており、本跡は古墳の周溝の一部という可能性が強い。しかし、どのような規模の周溝で、この検出部分の続きがどう続くのかは全く判らない。

遺物　71点の土器片と耳環１点、それに小さな礫が３点出土している。土器片は流れ込んだ状況で覆土中に混在して出土している。時期の決め手になる資料ではなく、いずれも細片である。１は北東側の底面からやや浮いた位置から出土した耳環である。銅地金銅張りで僅かに図の左右方向が長く、外側で長径2.02cm、短径1.95cmを測る。断面は5.0㎜×4.3㎜の楕円形である。

＊　右・左は、丸瓦の場合は凸面を上にして上からみた状態。平瓦は凹面を上にした状態でいう。



SD−002号跡土層説明

Ⅰ．表土攪乱層

Ⅱ．暗褐色土層

1．黒褐色土層　（黒色土中に約1割のローム粒を含み、全体にやわらかい。）

2．黒褐色土層　（1層より多くのローム粒が含まれやわらかい。）

3．暗褐色土層　（小ロームブロックとローム粒を主としやわらかい。）

SD−004号跡土層説明

1．暗褐色土層　（ローム粒を僅かに含む。）

2．褐色土層　（ローム粒を主としやわらか。）

SD−003号跡土層説明

1．暗褐色土層　（目立つ混和物を含まない。）

2．暗褐色土層　（ローム粒を僅かに含む。）

3．暗褐色土層　（ロームブロックを含む。）

4．暗褐色土層　（ロームブロックを多く含む。）

Ⅰ．表土攪乱層

Ⅱ．暗褐色土層

第34図　SD−002・003・004号跡実測図、SD−002号跡出土遺物実測図

SD−003号跡（第34図下段右、図版13）

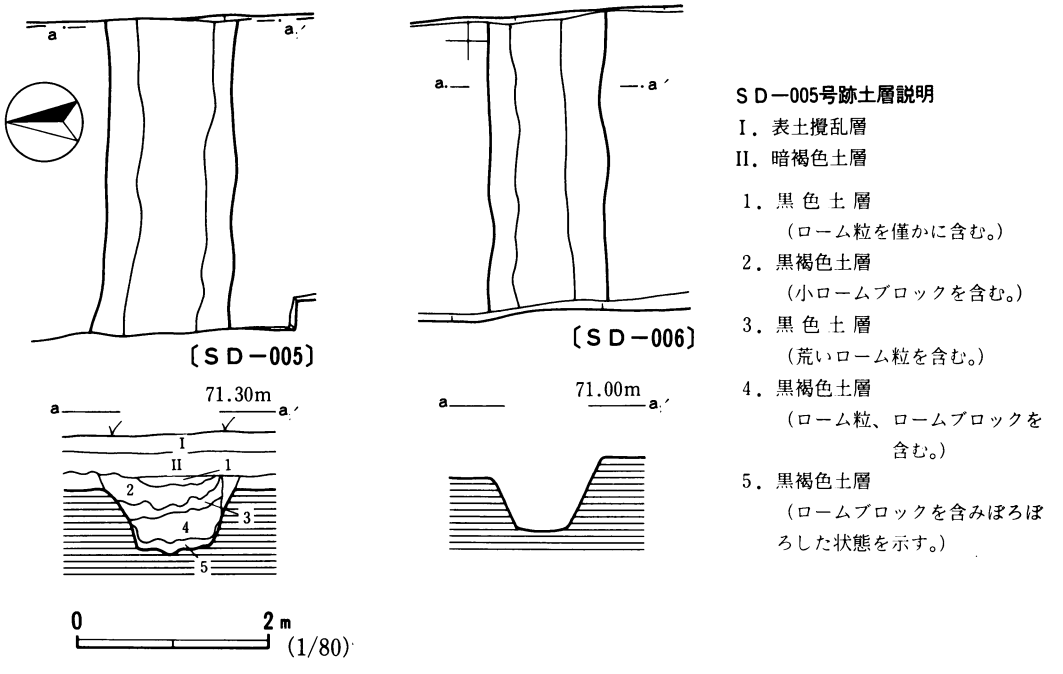
遺構　本跡はⅧ−C3・4グリッドに位置する。SI−001号跡を切って掘り込まれ、N−70°−Wの方向で東西ともに調査区外へ続いている。検出部分での幅は100cm前後で一定しており、直線的に走っている。深さは20〜25cmを測る。底面は、踏み固められている様な状況は認められないが比較的平坦である。検出部分が限られているので全体について推測することは無理があるかもしれないが、本跡はSD−004号跡と同一の溝となり、円形周溝の一部になるとも考えられる。なお、遺物については1点の出土もなかった。

SD−004号跡（第34図下段左、図版13）

遺構　本跡はⅧ－Ｃ０グリッドを主に位置する。調査区内を弧を描くように検出され、さらに東西へ続いている。幅は60cm～80cmで、きれいな同心円となるような弧とまではいかない。深さは20cm前後を測る。底面から両方の立ち上がりはやや傾斜をみせている。あくまで推測であるが、本跡はＳＤ－003号跡と同一の溝で円形周溝の一部という可能性がある。しかしそれを実証する遺物は、細片も含め全く出土しなかった。

ＳＤ－005号跡（第35図左・図版13）

遺構　本跡はⅨ－Ｃ０グリッドに位置する。調査区のなかをＮ－87°－Ｗと、ほぼ東西を向いて走る。検出したのはほんの限られた部分でしかなく東と西に続くことは明らかである。溝の底には小さな凹凸が各所に認められるが、立ち上がりはしっかりしている。立ち上がりの傾斜は南側で約65°を測り、北側はそれよりやや開きかげんである。検出面での幅は130cm前後を測り、深さは70cm程で、小さな凹凸を除けはそう大きな変化は認められない。本跡の掘り方及び方向と同じような状態を示す溝がもう一条検出されている。本跡から南へ16mに位置するＳＤ－006号跡である。どちらからも年代を決定する遺物は出土していないので、同時期と断定するにはこころもとないところである。しかし、方向や掘り方、またＳＤ－001・007号跡の存在を考えると、本跡とＳＤ－006号跡は同一の溝という可能性が非常に大きくなる。そうした場合この溝は方墳の溝か、方形周溝墓、あるいは方形周溝状遺構ということが考えられる。とすると本跡はその北溝となる。



第35図　ＳＤ－005・006号跡実測図

ＳＤ－006号跡（第35図右、図版８）

遺構　Ⅸ－Ｃ４グリッドに位置し、ＳＩ－012号跡の南壁を切っている。方向はほぼ東西に走り、東と西にそれぞれ続く。掘り方はＳＤ－005号跡と同様整った逆台形を呈する。上端の幅120cm、下端の幅50cmを測る。溝底は比較的平坦である。こうした溝の方向や掘り方の特徴は、本跡がＳＤ－005号跡と同一で方墳の周溝か、方形周溝状遺構の溝である可能性が大変強いことを示している。ＳＤ－005号跡に対する南溝の一部と考えておくことが妥当であろう。その規模は溝の外側で18mを測り、かなり大きな遺構になる。

遺物　ＳＩ－012号跡の遺物が流れ込んで、覆土中に混在したと考えられる土器片が出土している。細片が多く実測に耐えない。

ＳＤ－007号跡（第36図、図版９）

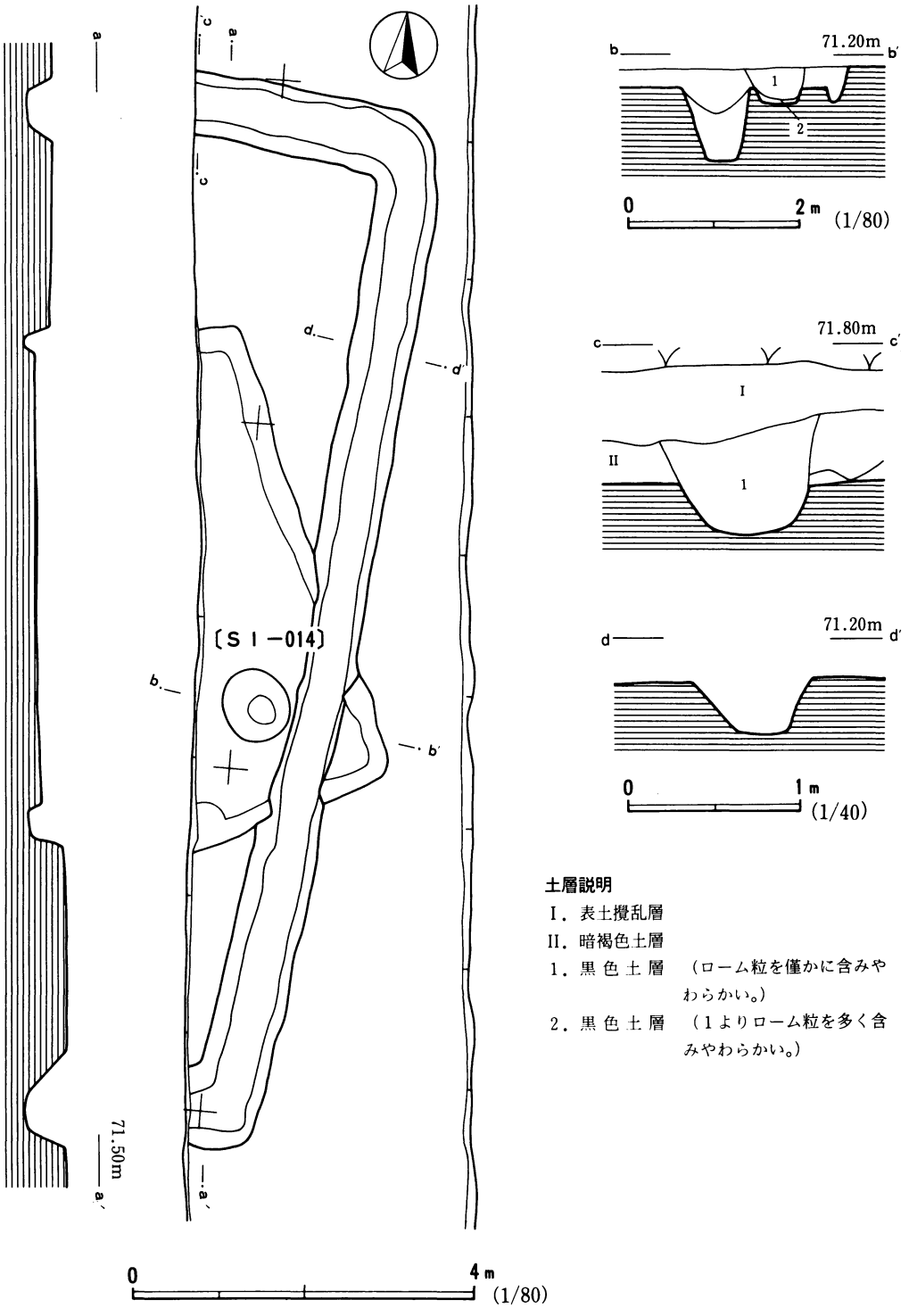
遺構　本跡は調査区のなかでは南側になるＸ－Ｄ３・４・５・６グリッドを主に位置する。一部でＳＩ－014号跡と切り合い関係にあり、本跡がＳＩ－014号跡の床面を切っているので、構築の新旧ははっきりしている。調査範囲での検出状況は、Ｎ－５°－Ｅの方向に伸びる溝の両端が、直角に近い曲がり方を示し調査区の外へ続いている。ちょうど検出した部分の平面形は「コ」の字形を呈している。攪乱は認められず、遺存状況は良い。掘り方は全体に丁寧である。底面は中央部が深くなって彎曲するところもあるが、断面は概ね箱形に近い形を示す。こうした状況から本跡は、単に溝というよりは、方形周溝状遺構となると考えて間違いないものとみられる。検出したのは東溝の全体と北溝及び南溝の一部ということになる。東溝の規模は溝の外側で12.4mを測る。幅は70cm前後で、検出面からの深さは30cm～40cmである。おそらく残りの北・南・西の溝も同じような規模になると思われる。西側の調査区外との境になる土層を観察して、マウンドの痕跡が認められるかどうか調べてみたが、それらしき跡は確認されず、表土層の下層は自然堆積の第II層であった。

遺物　覆土中から335点の土器片が出土した。しかし、接合して形が明らかになったものは１点も存在しなかった。土器は土師器の細片が主で、構築時期を限定するには不十分であった。

4　炉穴と出土遺物

ＳＦＰ－001号跡（37～39図、図版11・20）

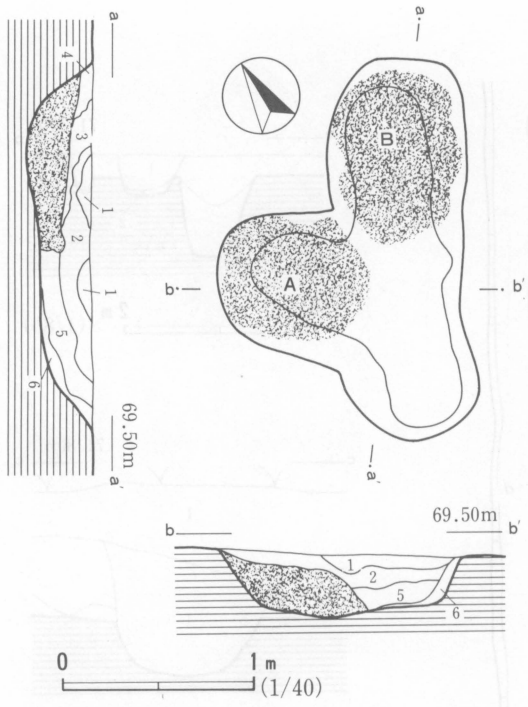
遺構　本跡はⅥ－Ｃ３グリッドを主に位置する。焼土の堆積が２ケ所に認められ、平面形は、楕円形の途中から、半円形を呈する張り出し部が付いたような形を示す。長軸203cm、短軸128cmを測る。燃焼部のうち西に位置するＡは、検出面から底面まで33cm前後の深さを有し、底はロームが加熱され赤色に変化して硬化している。焼土は径60cmの円形の範囲に認められ、厚さ26cmに堆積している。一方燃焼部Ｂは北側に検出され、底面までは35cmを測る。焼土は長径100



土層説明

Ⅰ．表土攪乱層
Ⅱ．暗褐色土層
1．黒色土層　（ローム粒を僅かに含みやわらかい。）
2．黒色土層　（1よりローム粒を多く含みやわらかい。）

第36図　ＳＤ－007号跡実測図

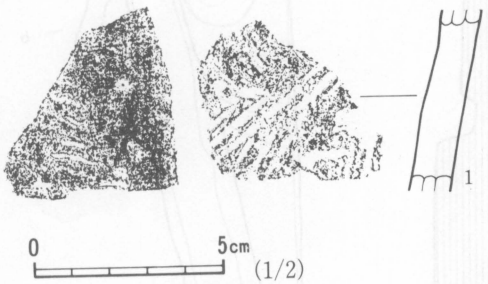


土層説明
1．黒色土層　（細粒の黒色土を主にする。）
2．黒褐色土層　（焼土粒を僅かに含む。）
3．暗褐色土層　（ローム粒と少量の焼土粒を含む。）
4．褐色土層　（焼土粒をやや多く含む。）
5．黒褐色土層　（焼土粒を少量含む。）
6．褐色土層　（ローム粒を少量含む。）

第37図　ＳＦＰ－001号跡実測図

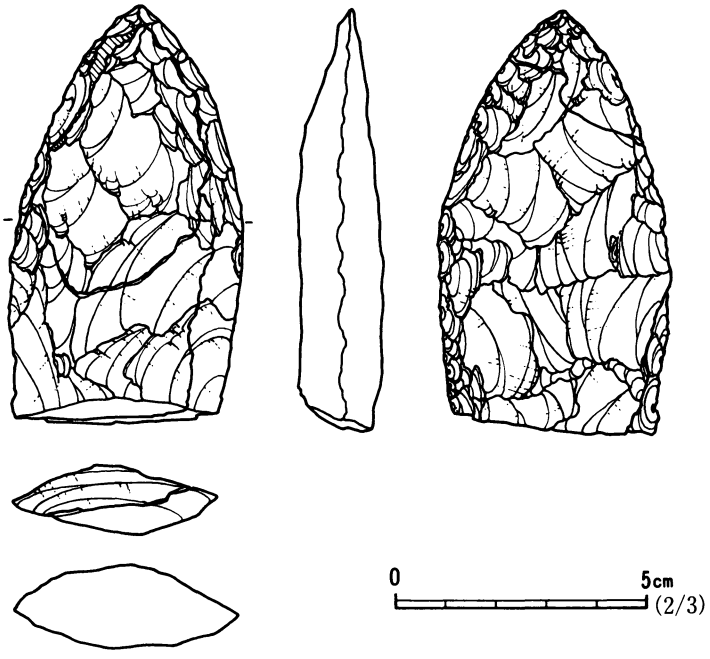
cm、短径60cmの楕円形に残され、厚さは24cmとＡ同様かなり厚い。いわゆる足場は南側に形成され、検出面からゆるやかに傾斜して底面に至る。燃焼部２ケ所の新旧はＡ→Ｂと考えられるが、時間的隔たりは僅かしかないと思われる。

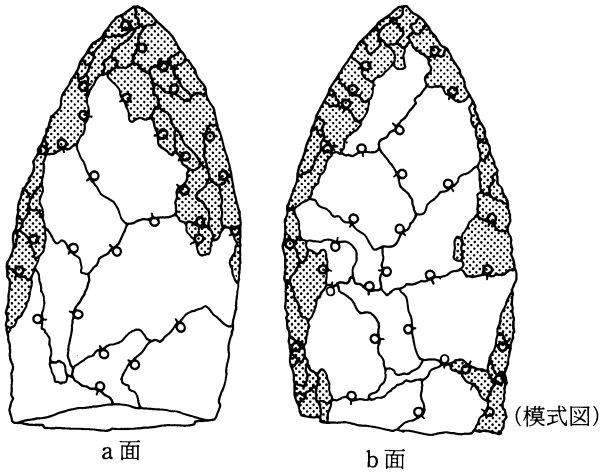
遺物　Ｂの焼土中から土器片１点と石器１点が出土した。第38図１の土器は裏面に条痕が施され、表はナデによって調整されているものである。表面には３条の刺突か、何かの押圧痕と思われる細い凹部が認められる。これが文様であるか否かについては判然としない。胎土は砂と、僅かながら繊維が含有され焼成は良い。色調は外面が黒褐色で、内面が褐色である（図版20－４）。



第38図　ＳＦＰ－001号跡出土土器拓影図

第39図は焼土の堆積のなかから出土した石器である。石材はやや砂質の粘板岩。器表は風化し黄褐色をしているが、剝離面を構成する稜線はシャープである。現状は長さ84㎜、最大幅46㎜、最大厚16.7㎜。一端を欠損しており、残存部が先端部なのか基部なのかは判定できない。遺存部より推定すると、もともとは全長120㎜程度となろう。現在石器は平行に３枚に剝落しているが、これは２次的な自然剝離と考えられ、人為的な剝離にかかわるものではない。なお炉穴内の「堆積焼土」内からの検出であるが、器表からは焼成、被熱を受けた痕跡をうかがうことはできない。ただし、器表の一部には、斑状に黒色の物質が附着しているが、その性格につ





第39図　ＳＦＰ－001号跡出土石器実測図，模式図

いては今のところ何ともいえない。

さて、この石器の両面を覆う剝離痕について、若干の検討を加えておこう。ここでは便宜的に模式図を用いて説明する。この際、図に向って左側をａ面、右側をｂ面としよう。まず、この石器を見て気がつくのは、器表をおおう剝離面が大きく２種に識別されることである。すなわち、石器縁辺部に認められる小剝離痕群と、石器中央に切り合う大剝離痕群とに分けられる。そこで仮に、大剝離痕群を剝離面Ｉ類、小剝離痕群を剝離面II類としよう。模式図では見やす

いように、剝離面II類には全て網をかけてある。

剝離面Ⅰ類についてまず観察する。Ⅰ類は石器中央を主軸に沿って走る中央稜線を境に左側の面（ＩＬ面）と右側の面（ＩＲ面）とが区別される。a面ではＩＬ面は4枚、ＩＲ面は3枚あり、b面ではそれぞれＩＬ面6枚、ＩＲ面4枚となり、表離合計Ⅰ類に属する面は17枚あることになる。各面の切り合いを見よう。a面では、ＩＬ面の剝離面は全てＩＲ面のそれを切り、b面では上半についてはＩＲ面がＩＬ面を切っているが、下半では逆にＩＬ面がＩＲ面を切っている。次にＩＲ、ＩＬ各面に帰属する剝離面の状況を見ると、だいたい3面を1単位とする小群に細別されることが分る。すなわち、a面ではＩＬ面上半の3面が継起的に剝離され、ＩＲ面の4面も同様である。両者の剝離の方向が逆であることは図より明らかである。一方、b面においても、ＩＲ面の3面が欠損部から先端部にかけて継起的に剝離されている。ただし、b面のＩＲ面ではこのような継起性は見いだすことができないようにみえる。a面とb面との切り合いは、II類の存在のために分明ではないが、リングの状況からa面ＩＬ→b面ＩＲ、a面ＩＲ→b面ＩＬとなろう。すなわち、a面の剝離作業ののち石器は反転され、b面が形成されたものと見られる。

剝離面II類に関しても、Ⅰ類と同様にIIＬ面、IIＲ面とを区別することができる。a面ではIIＬ、IIＲ両面は先端部寄りにのみ認められるが、b面ではほぼ全縁にわたって看取される。各面の剝離状況の詳細は略するが、3～5枚の一連の剝離痕が一単位となり、別の単位と切り合うという状況がうかがわれる。a面とb面との切り合いは明らかであり、b面IIＲ→a面IIＬ、a面IIＬ→b面IIＲとなり、基本的には、a面の剝離後b面の剝離が行なわれ、最終的にa面の左側の補整が実施されたと見るべきであろう。以上の観察結果をまとめると、次のような製作工程が復元される。

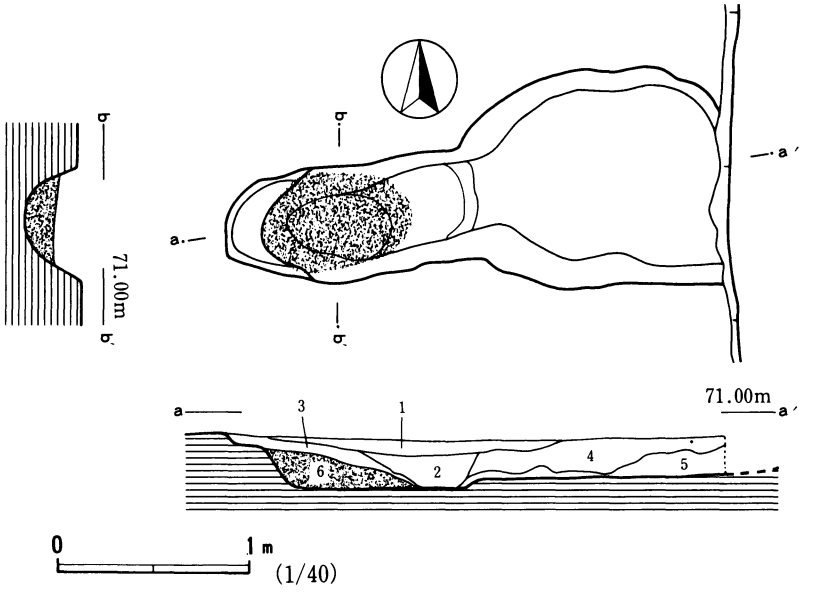
段　階Ⅰ　a面Ⅰ類の形成
↓
Ⅰa　左側縁寄りからの一連の剝離
Ⅰb　右側縁寄りからの一連の剝離
↓
段　階II　b面Ⅰ類の形成
↓
段　階III　a面II類の形成
↓
段　階IV　b面II類の形成とa面の補整

段階Ⅰ～IIは成形の段階III～IVは調整の段階ととらえられ、その間の経緯の概略は以上において明らかである。

本石器が炉穴の「堆積焼土」内から検出されたことはすでに触れたが、このような出土状況

からみる限り、本資料が縄文早期後葉に製作、あるいは使用されたことが推定できる。ところが、筆者の管見による限り、この種の石器が早期後葉に製作された事例は無いであろう。本例のみによる時期決定は危険であるが、だいたい下総編年先土器時代III b 期（新）段階に相当しよう。したがって、この石器は炉穴の時期とは一致しないことになる。ところで、炉内の「堆積焼土」の成因については諸説あるが、仮に森幸彦の所説*に従えば、「堆積焼土」は人為的に炉穴燃焼部に搬入されたものであるから、この石器もその際に偶然混入したとの見方もできよう。しかし、ここではさらに一歩進めて森の説くように、炉穴内に搬入された土が火種の保存と温度調節のために、炉穴使用時にかなり頻繁に移動を要するものとするならば、この石器はその際に「移植ゴテ」として、縄文早期の人々によって使用されたものとも想像しておこう。もしそうならば、この石器は、当時の人々の生活圏のどこかで拾得されたものと考えられる。

（田村　隆）



土層説明

1．黒褐色土層　（黒色土にローム粒を少量含みやわらかい。）
2．黒褐色土層　（1層よりやや多いローム粒を含む。）
3．暗褐色土層　（焼土粒を含む。）
4．黒褐色土層　（ローム粒及び焼土粒を僅かずつ含む。）
5．暗褐色土層　（ローム粒を多く含む。）
6．焼　土　層　（赤色の焼土を主とする。）

第40図　ＳＦＰ－002号跡実測図

ＳＦＰ－002号跡（第40図、図版11）

遺構　本跡はⅨ－Ｃ９グリッドを主に位置する。形は不整形で東西に長い。あえて物の形に例えるならば柄鏡状の形態を示す。東側の一部は調査区外へ広がるが、この東側に足場が作られ、

＊　森　幸彦　「炉穴の形態と機能に関する考察」『多聞寺前遺跡Ⅰ』昭和57年３月

西側に燃焼部１カ所が認められる。燃焼部は、検出面から底面まで30cm前後で、５cmと僅かではあるが足場より一段低く掘られている。焼土は長径80cm、短径50cmの楕円形の範囲に認められ、厚くなるところで18cm堆積している。足場は燃焼部より広く、底面は平坦である。

遺物は、周辺で表裏に条痕文の施された土器が採集できたが、遺構に伴って出土したものは１点も認められない。

5　土坑と出土遺物

ＳＫ－001号跡（第41図、図版11）

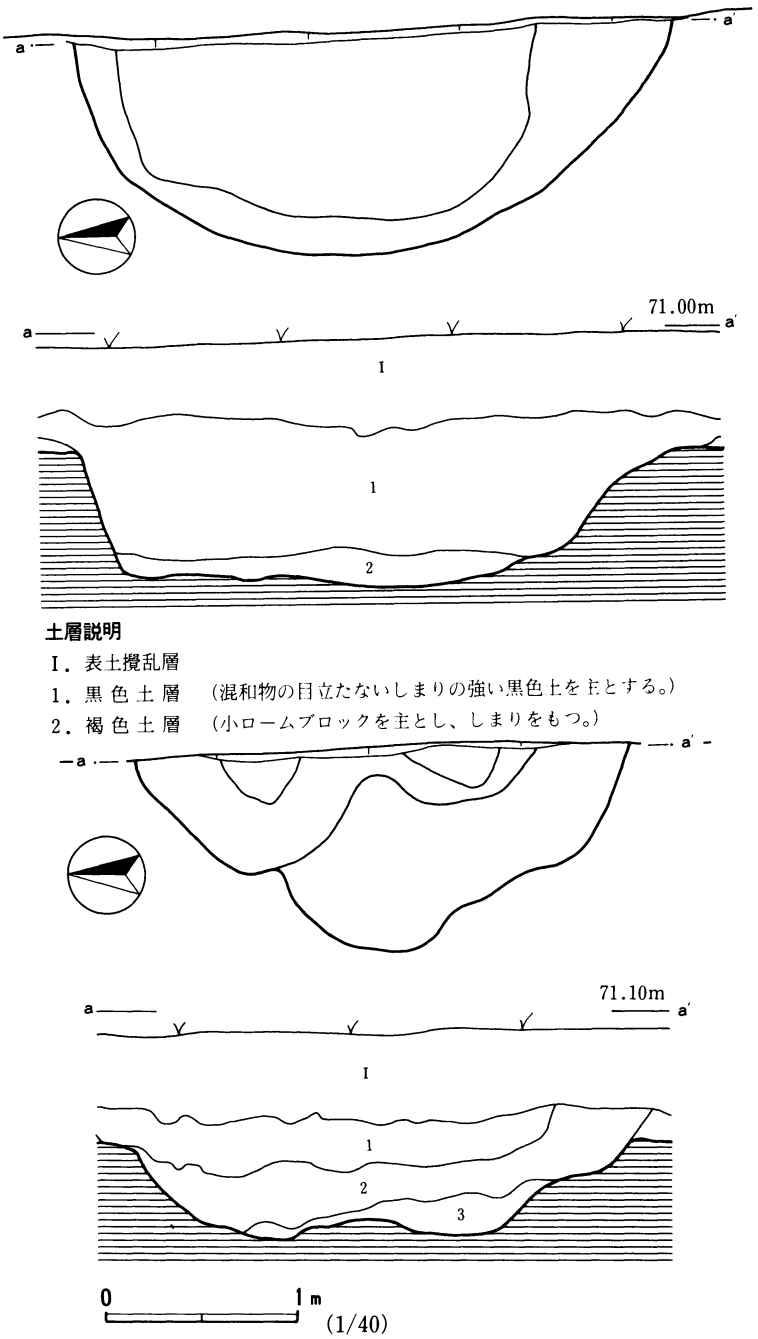
遺構　本跡はⅧ－Ｃ６グリッドに位置する。プラン確認段階では住居跡の落ち込みではないかと思われたが、精査の結果土坑であることが判明した。検出したのは遺構の西側部分で東側は調査区外へ続いている。全体については明らかでないが、現状からは円形を呈することが予想される。西側の掘り方の平面形は整った弧を呈し、深さは60cm前後である。底面は場所によって凹凸が目立ち、壁は北から西にかけて急に立ち上がり、南側はそれに比較してゆるやかである。覆土は大きく２層にしか分けることができず、上位から下位まで固くしまっている。特に下層の第２層については住居跡の貼床を思わせる状態で堆積している。覆土の状況からいえば、短期間に埋まってしまったと思われる。そしてそれが人為的な埋め戻しということは十分考えられる。また、遺物の出土は認められなかった。

ＳＫ－002号跡（第41図、図版12）

遺構　本跡はＳＫ－001号跡から南へ３m、Ⅷ－Ｃ７・８グリッドに位置する。ＳＫ－001号跡と同じような検出状況を示したが、底面は平坦でなく大きな凹部が存在する。その最も深くなる部分は検出面から45cmである。立ち上がりも急角度となるところは認められず、傾斜しながら開くような形になる。全体に不整な土坑である。遺物については１点の出土もみなかった。検出部分のみからは、本跡の性格等については不明なところが多いといわざるを得ない。ＳＫ－001号跡と同じような性格かもしれない。

ＳＫ－003号跡（第42図、図版12）

遺構　本跡はⅧ－Ｃ８・９グリッドに位置する。北側の一部分が調査区外へ続くが、ほぼ完掘することができた。平面形は隅の丸くなる長方形を呈する。長軸292cm、短軸63cmを測る。検出面からの深さは10～15cmである。覆土は、ややしまりのある暗褐色土の単一層で、ローム粒を多く含んでいる。底面は、中央部分が立ち上がりの下端よりやや低くなるが比較的平坦である。北側に円形の落ち込みが認められるが、これは本跡とは直接関係はなく、壁の遺存はしっかりしている。覆土にしまりがあり、また、遺構全体の状況からみると、本跡はいもの貯蔵穴のよ



土層説明

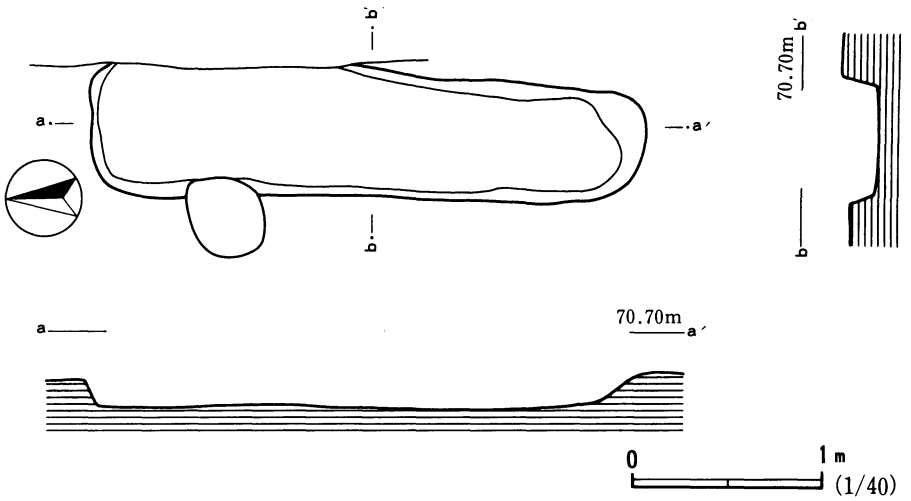
Ⅰ．表土攪乱層
1．黒 色 土 層　(混和物の目立たないしまりの強い黒色土を主とする。)
2．褐 色 土 層　(小ロームブロックを主とし、しまりをもつ。)

土層説明

Ⅰ．表土攪乱層
1．黒 色 土 層　(しまりがあり混和物の少ない黒色土を主とする。)
2．黒 色 土 層　(黒色土にローム粒を少量含む。)
3．褐 色 土 層　(ローム粒、小ロームブロックを多く含む。)

第41図　ＳＫ－001・002号跡実測図

うなごく新しい時代のものではないと考えられる。墓壙であったという可能性もあるが骨片や遺物が出土していないので実証することは難しい。



第42図　ＳＫ－003号跡実測図

遺構　遺物は土器片３点と、鉄製品の一部と思われる破片が２点出土している。いずれも器種や時期が明確に判るだけ遺存していない。

ＳＫ－004・005号跡（第43図、図版12）

遺構　本跡は調査区の北側にあたるII－Ｃ８グリッドポイント付近に位置する。当初１基の土坑と考えていたが、円形を呈する２基が近接して掘られていることが明らかになった。南に位置する方をＳＫ－004号跡、北側をＳＫ－005号跡とした。また、両土坑の周囲は全体に凹状を呈している。ＳＫ－004号跡は直径約100cmの円形の平面径を有し、深さは55cm前後を測り、底面には多少凹凸が生じている。掘り方は円筒状である。

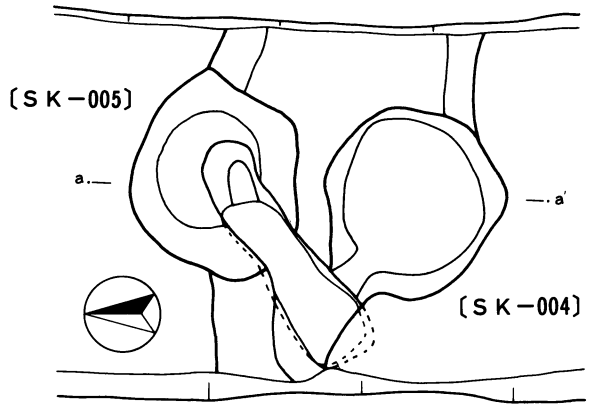
ＳＫ－005号跡は長径110cm、短径90cmの不整な楕円形で、深さは75cmある。底面は径55cmの円形で、さらに楕円形の落ち込みが認められる。この楕円形の落ち込みは長径125cm、短径30cmで南西方向へ張り出す。その底面までの深さは115cmを測る。

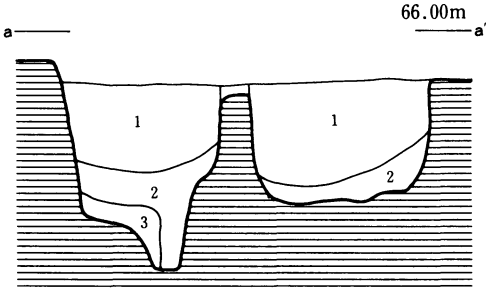
ＳＫ－004・005号跡いずれからも縄文式土器の破片が少量検出されている。

ＳＫ－006号跡（第43・44図、図版12・19）

遺構　本跡はII－Ｃ６グリッドを主に位置する。円形の土坑に浅い張り出しをつけた形を示す。しかし、張り出した部分についてははっきりしないところもあり、本来は円形を呈するものと考えられる。上端は直径90cmで、検出面から約45cmで底面に達する。底面は直径65 cmの円形で比較的平坦に作られている。壁はやや傾斜して立ち上がるが、全体としては円筒状の掘り方を示す。遺物から考えると、構築時期は縄文時代前期という可能性がもたれる。

遺物　前期に比定される縄文式土器破片が出土している。第44図１は無文土器の口縁部で口唇部は丸棒状に終わる。外内面ともミガキによって調整される。胎土は砂質である。２・３は鉢



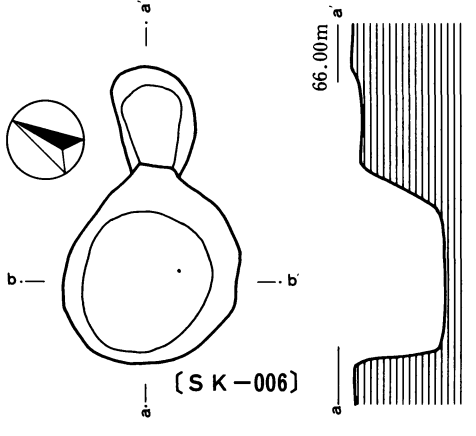


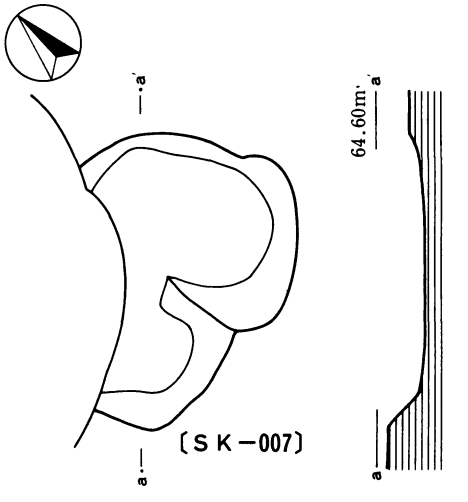
SK－004号跡土層説明

1．褐色土層　（ローム粒を主とし、小ロームブロックを含む。）
2．暗褐色土層　（小ロームブロックを少量含む。）

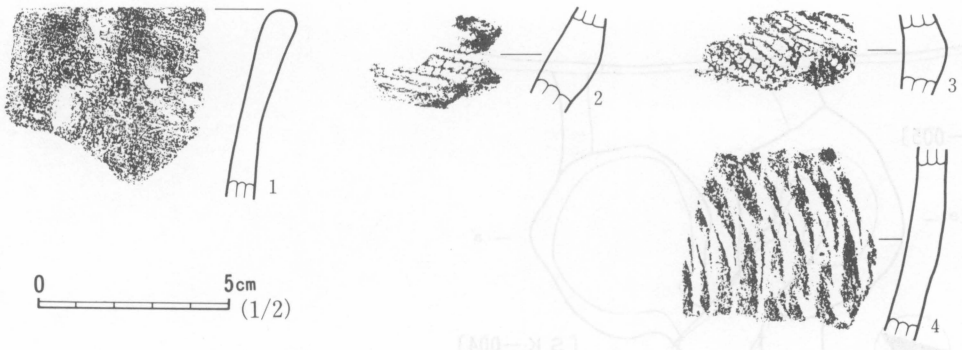
SK－005号跡土層説明

1．暗褐色土層　（小ロームブロックを少量含みやわらかい。）
2．黒褐色土層　（黒色土と細粒のローム粒が混ざり若干しまりをもつ。）
3．褐色土層　（ローム粒を主とする。）





第43図　SK－004・005・006・007号跡実測図



第44図　ＳＫ－006号跡出土土器拓影図

形土器の上半部の一部と考えられるものである。どちらも文様は縄文が施文されている。４は波状貝殻文が施されている。以上の土器は、１～３については諸磯ｂ式と考えられ、４は浮島式になると思われる（図版19―３）。

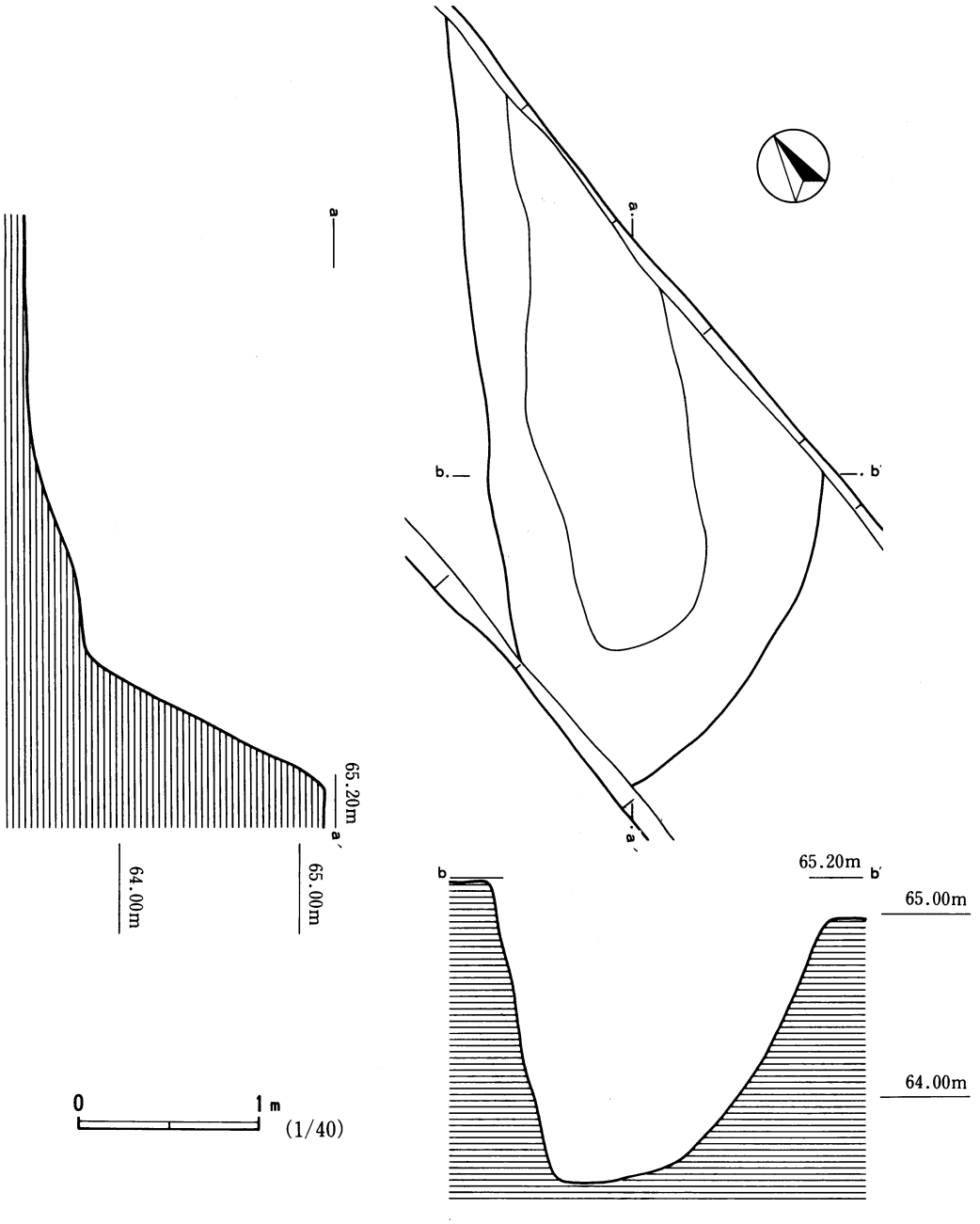
ＳＫ―007号跡（第43図、図版12）

遺構　本跡はII－Ｂ２グリッドに位置し、ＳＩ－016号跡と切り合い関係を有する。平面的には不明瞭であったが、本跡が切られていると考えられる。平面形は不整形で、深さは５cm～12cmと大変浅い。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる様子がみられる。長径は150cmを測る。遺物は縄文式土器の小破片が２点出土している。

ＳＤ―008号跡（第45・46図、図版13・21）

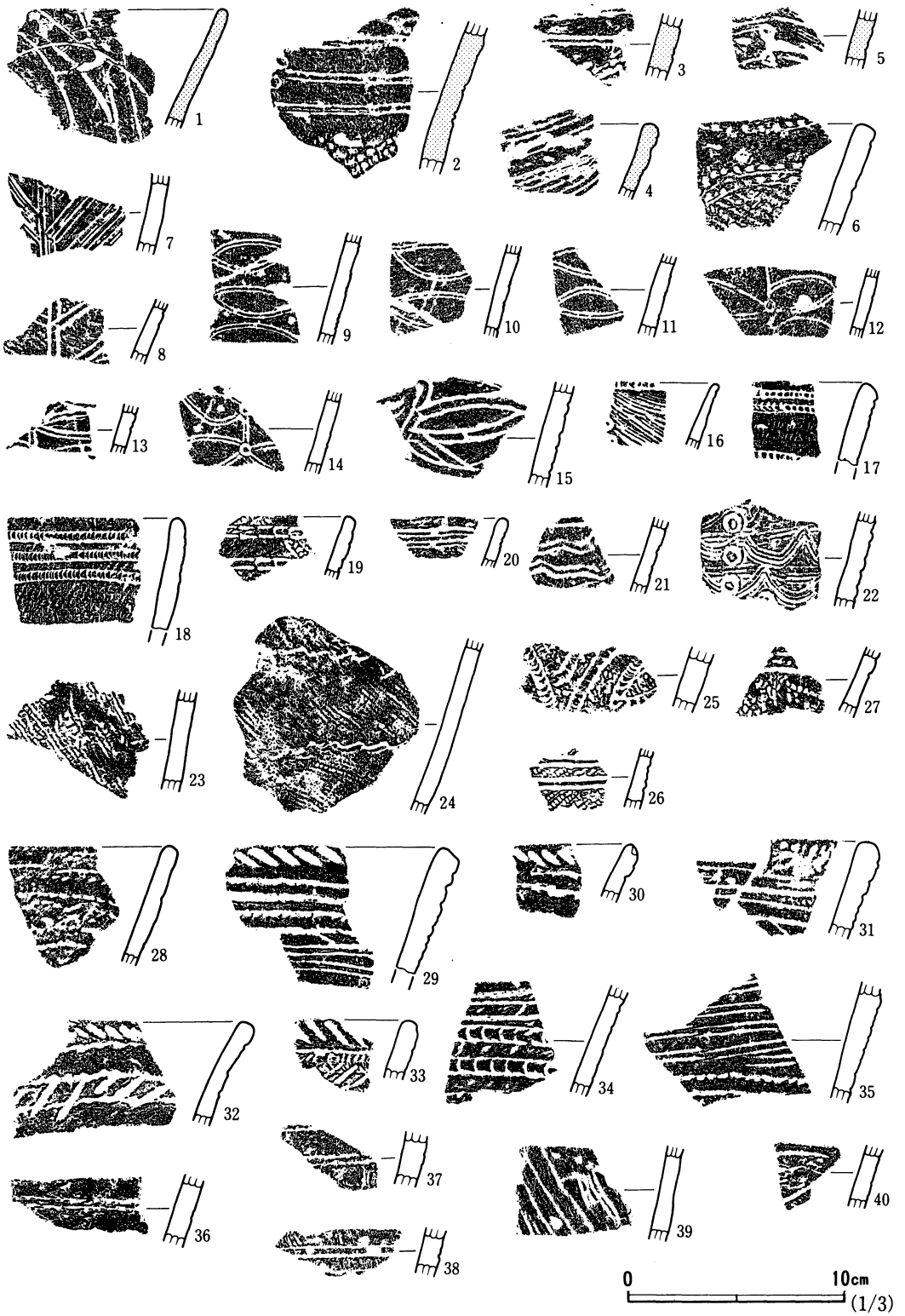
遺構　本跡は調査区の北側で、尾根状となるII－Ｂ３・４グリッドに位置する。現場では、溝状遺構と考えたが、一方の立ち上がりが確定されていることと、東側にそう続くこともないと考えられるため、整理に入ってから土坑とした。平面形は確定できないが、検出部分から推測すれば楕円形を呈するものとみられる。現況での短径は190cmを測り、深さは深いところで検出面から160cmに達する。長径は不明であるが、４ｍ以上になることは確実である。長軸方向の南西部から東側にかけては、約60°の傾斜で底面に向かい、北西側では急激に下降する。断面形態は「Ｕ」の字形を呈する。形から判断すれば、いわゆる落し穴に似ている。

遺物　縄文式土器の破片176点が覆土中から出土した。１～５は胎土中に繊維を混入する土器である。１は直線的に開く口縁部で、斜行する不規則な沈線文が施文されている。色調は黒褐色で、内面はミガキ調整されているものの細かなヒビ割れが生じている。２～５は半截竹管状工具による平行沈線文が施されているものである。２・５は平行沈線文の途中に竹管の刺突が加えられ、２・３は縄文も施文されている。６は口縁部に弧状の有節沈線文と縄文の組み合わせが認められる。器面がざらつき色調は黄褐色を示す。７・８は垂下する平行沈線文の左右から、枝別れするように斜方向に平行沈線文が引かれている。いわゆる肋骨文が構成されているもの



第45図　ＳＤ－008号跡実測図

である。８は地文に縄文が施されていた可能性がある。９～15は木葉文の施文されている例である。その間４㎜を幅の狭い平行沈線でシャープに描かれている。12・14のように木葉文が連結する箇所に円形の刺突文をあしらったものもある。15は９～14と比較すると平行沈線の幅がやや広く、全体にくずれた感じをみせている。色調は暗褐色が多く、15が黄褐色である。16は櫛歯状施文具か多截竹管のようなもので引いた沈線文が斜方向に流れ、その上に円管状の刺突文を加えたものである。17・18は半截竹管による連続爪形文のあるもので、平行沈線の幅はそ



第46図　ＳＤ－008号跡出土土器拓影図

う広くない。19は地文の縄文が認められる。20～22は波状文をもつものである。22は多截竹管の平行沈線文間に波状文を埋め、また縦位に円管の刺突文を置いている。23・24は胴部の破片である。おそらく2～22に示した破片の、その多くの胴部は縄文で飾られていたと思われる。24には2列のS字状の綾繰文が認められる。25は地文を縄文とし、幅の広い半截竹管による爪形文が曲がりながら展開している。26・27は地文に平行沈線文が施文されているものである。28以下については27までの土器と趣を異にする一群である。28～33・35は有節平行沈線文とほかの文様とを組み合わせている。28は平行刺突文で、29・30・35は平行沈線文である。29～32の口唇部は僅かに肥厚し、斜めに深い刻みがつけられている。33は口唇部に刻み目があり、その下に有節沈線文がみられ、さらに変形爪形文が施文されている。34は17や18と同じように爪形文が認められるものであるが、そればかりを文様とせずに平行沈線文や刺突文が加えられている。また爪形文にしてもやや幅が広くなっている。36～39は平行沈線文のみが残されている破片で、全体の一部を構成しているものと思われる。

以上SD－008号跡から出土した縄文式土器は、すべて前期後半に比定されるものである。1～5は胎土に繊維の含有が認められ、この点以外では文様構成などは6以下と同じ部分をもつ。繊維の有無によって分ければ黒浜式土器となろう。6～22は諸磯a式である。肋骨文・木葉文は諸磯a式を代表する文様である。25は幅広の爪形文が、17・18からの発展としての意匠文を描いており、諸磯b式の古い部分として考えられる。26・27も諸磯b式になるであろう。28～40は浮島式土器である。地文に撚糸文をもつ古いものは出土していないが、有節平行線文が多用されている特徴からI式に比定されるであろう。一つの遺構から諸磯式と浮島式が出土していることは興味を引くところである。

6　グリッド出土遺物

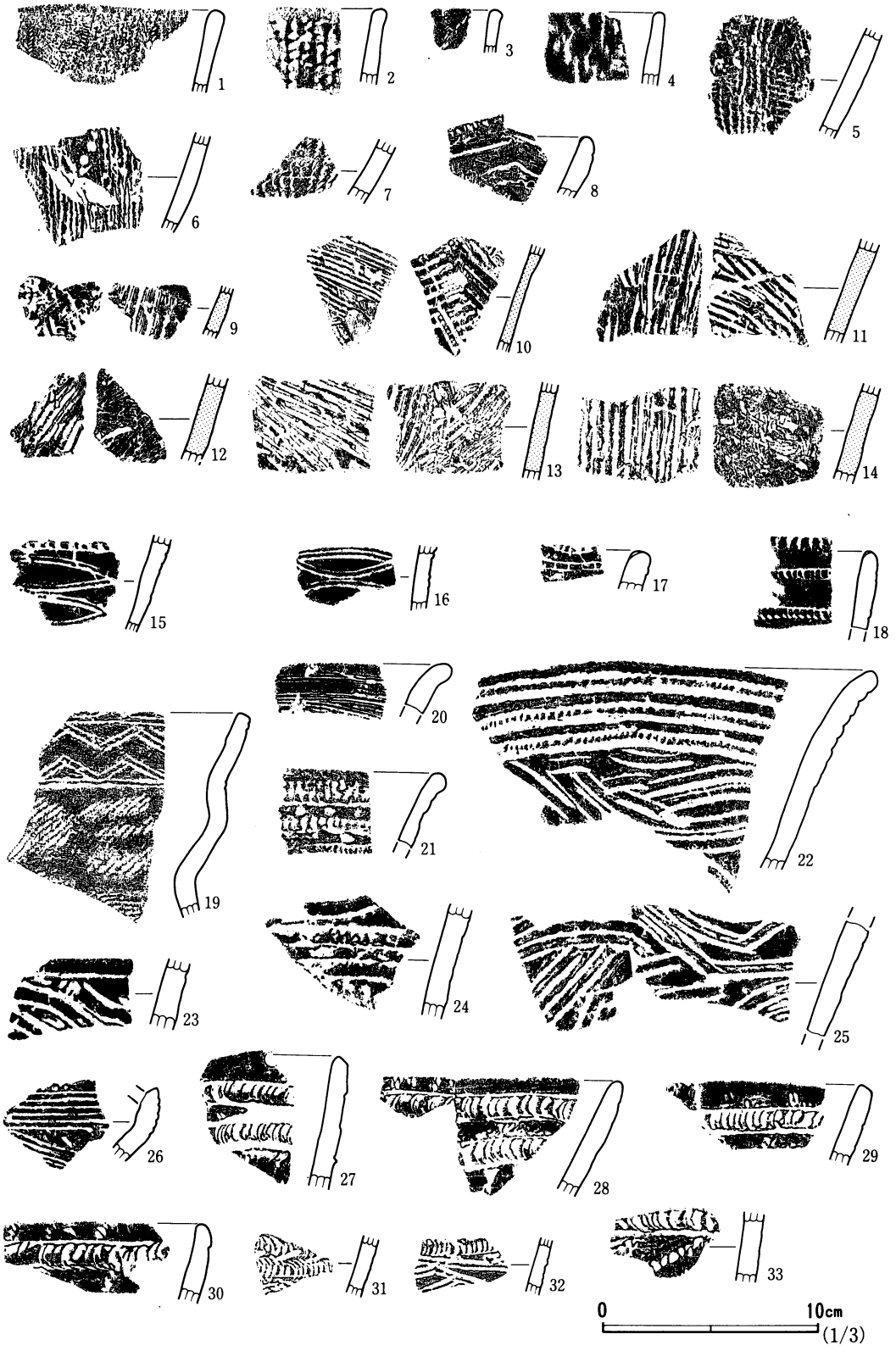
遺構検出中に縄文式土器、採拓するに至らなかったが弥生式土器が出土した。また、遺構覆土中に混入したと思われる石器を併せて報告する。

土器（第47・48図、図版22・23）

調査区から出土した縄文式土器は、合計201点と僅かであるが、早期から後期にわたる。出土が最も多かったのは前期に比定される破片で、I・II区で目立って出土している。以下第I群からIV群に分けて説明したい。

第I群（1～14）　早期の土器で合計37点が出土している。

a類（1～7）　撚糸文系土器を本類とする。1～4は口縁部で、1～3の口唇部はやや肥厚し、4は丸棒状を呈している。文様は口縁部直下から、条間のやや広い縄文が縦位に施文されている。4は施文が浅く文様が不鮮明である。内面の調整は、1～3がミガキで、4がナデである。5～7は胴部の破片である。撚糸文の条間は5・6がやや密で、7が若干広い。色調



第47図　グリッド出土縄文式土器拓影図①

は1が黄褐色、2・3が黒灰色で、ほかは暗褐色である。本類は稲荷台式に比定されるであろう。

b類（8）　沈線文系土器である。波状口縁の波頂部で、内彎するように立ち上がって口唇部が僅かに内側に向くような形をとる。口唇部内側には連続する刻み目がつけられ、外面は口唇部直下に沈線文が一条引かれ、その下位に貝殻腹縁の圧痕文が2段認められる。内面は丁寧なミガキによって平滑にされている。田戸上層式と考えられる。

c類（9～14）　表裏に条痕文が施されているものを本類とする。表裏ともに条痕が鮮明についているもの(9～11)と、裏面については表面ほどそれがはっきり残されないもの(12～14)が存在する。胎土に繊維が含まれてはいるが、それほど多くはない。

第II群（15～43）　前期に比定される土器で合計80点が出土している。

a類（15～20）　諸磯a式と考えられるものである。文様によって四つに分ける。

a－1（15・16）　木葉文が施文されているものである。15は幅の狭い平行沈線文の間に爪形文がつけられる。

a－2（17・18）　口唇部内側に刻み目を有し、口縁部は平行沈線文間に爪形文を施す。平行沈線文は幅が狭く、同一の工具によって爪形文を施したものと思われる。

a－3（19）　口縁部に間隔を置いて平行沈線文を2段施文し、その間に半截竹管状工具による、山形の平行沈線文を施す。口縁部以下には意匠文はなく縄文が施文される。

a－4（20）　口縁部直下に幅の狭い半截竹管状工具を用いて、口縁と平行に平行沈線文を横走させる。

b類（21～26）　諸磯b式と考えられるものである。文様からは次の三つに分けられる。

b－1（21）　幅広の平行沈線文間に爪形文を施すものである。平行沈線文が有節沈線文に近い引き方をしている。それをみると、c類と同じように浮島系に含まれるかもしれない。

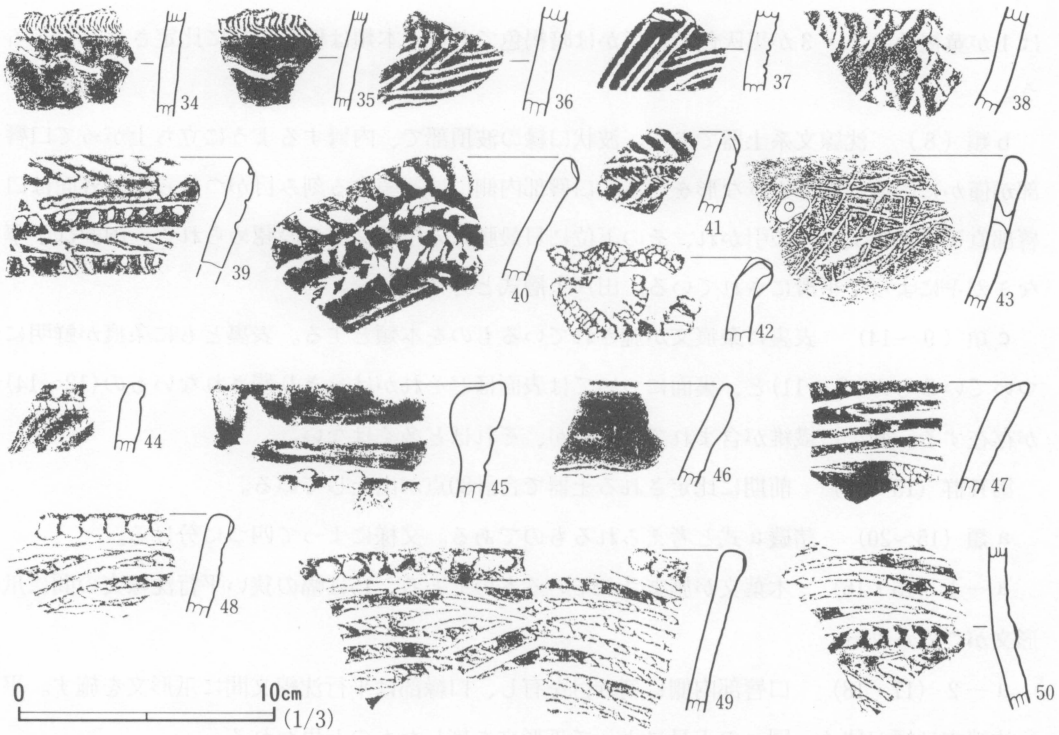
b－2（22～25）　口縁部に爪形文が施文され、胴部に木葉文から変化したと考えられる弧線文が描かれているものである。22・25は同一個体と考えられる。23・24は胴部の破片である。いずれも沈線文は土器表面の深くまで及んで、はっきりとしている。22の内面はミガキで調整され、外面は黒褐色、内面は暗黄褐色を呈する。

b－3（26）　口縁部が「く」の字形に内傾する深鉢形土器の破片と思われる。縄文を地文に平行沈線文が施文される。

c類（27～41・43）　浮島式土器を本類とする。

c－1（39）　平口縁で口唇部に深い刻み目を有し、その下位に有節平行沈線文、刺突文が加えられ文様が構成される。本例は変形爪形文が認められないもので、浮島I式になる可能性がある。

c－2（27～36・40・41）　変形爪形文が施文されているものである。27～29はやや幅広の



第48図　グリッド出土縄文式土器拓影図②

平行沈線文間に変形爪形文を充填していく。31は2段の変形爪形文を配する。34・35は変形爪形文の下位に「S」字状の綾繰文が認められる。40は波状口縁を呈し、口縁部直下に幅広の変形爪形文と刺突文が加えられる。41の文様要素は40とほぼ同じで口縁は平口縁となっている。

c－3（37）　間隔のやや広い変形爪形文か刺突文と、平行沈線文が組み合わさっているものである。

c－4（38）　波状貝殻文が施されているものである。

c－5（43）　格子目状の沈線文が施文されるものである。

以上c－2からc－5には浮島II式にみられる文様の特徴を認めることができる。

d類（42）　押圧によって小さな波状を呈する口縁部である。口唇部及びその直下に縄文が施文される。前期末に位置づけられるものと考えられる。大木系の土器である可能性がある。

III群（44・45）　中期の土器で出土数は合計で僅かに3点である。

a類（44）　半截竹管状工具による押引文が施文されているもので阿玉台式に比定される。

b類（45）　口唇部が肥厚し、太い沈線文による三叉文と、刺突文が施文されている。勝坂式に比定されよう。

IV群（46～50）　後期の土器である。合計20点が出土している。

a類（46）　堀之内I式に比定される。ゆるやかに外反しながら立ち上がる口縁部で、口唇部に段がついたように沈線文がつき、その下位は無文で、その下にまた沈線文が引かれる。

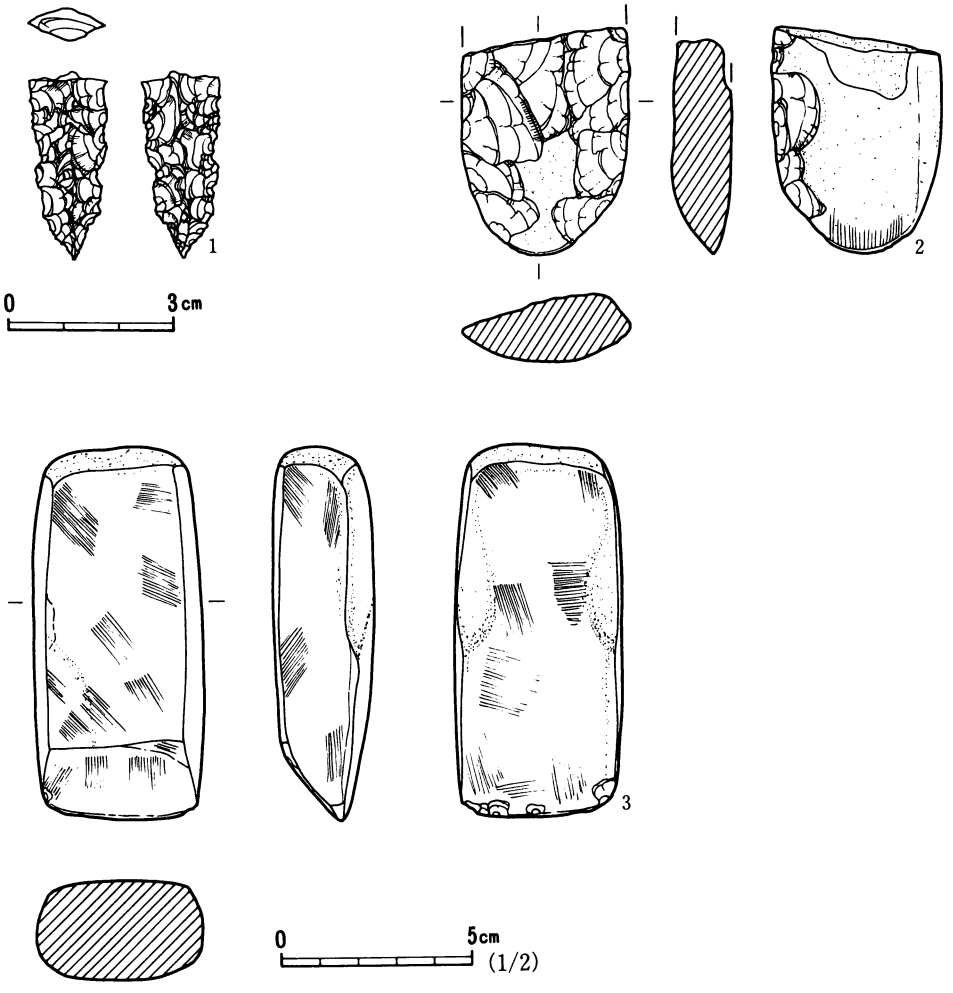
b類（47～50）　加曽利B式に比定されるものである。

b－1（47）　縄文を地文とし、浅い沈線文が横方向に施文されるものである。

b－2（48～50）　紐線文をつけるもので、節の荒い縄文を地文に、その上に幅のやや広い浅い沈線文を横方向に施文している。加曽利B式の粗製土器である。

石器（第49図、図版23）

1は、黒曜石製の尖頭器である。途中で折れており完形ではない。遺存しているところは基部側である。現存長34㎜、最大幅14㎜、厚さ6.0㎜。2は、打製石斧で基部を欠損する。周辺の剝離は両面に行なわれている。また、刃部には磨かれた痕跡が認められ両刃の形となる。現存長59㎜、最大幅44㎜を測る。石材は硬質砂岩である。3は柱状片刃石斧である。完存し器長9.69cm、器幅4.40cmを測る。側面、裏面からは抉入磨製石斧の抉り部が退化したようにみえる。刃部は鋭く作られ、裏面の先端部には、使用のためについたと考えられる小さな剝離痕が認められる。研磨は全体に丁寧に行なわれ、器面は光沢を帯びる。石材は硬質砂岩。



第49図　グリッド出土石器実測図

III　ま　と　め

1　遺物について

縄文式土器　狭い調査範囲から早期から後期にわたる土器が出土した。出土量が少ないということはあるものの、本遺跡が縄文時代各期に継続的に営まれた遺跡である可能性を示している。

早期は最も古い段階が撚糸文期である。口唇部が肥厚せずに丸棒状となる口縁部破片が出土しており、条間がやや広いもので稲荷台式に比定される。稲荷台式以降の撚糸文系終末期の土器は認められなかったが、沈線文系に入って田戸上層式が検出された。また、沈線文系に続く、表裏に条痕が施され胎土に繊維を含む一群を検出した。条痕文系土器については小さな胴部破片ばかりで、型式を比定することは困難である。ただＳＦＰ－001号跡から出土した１点の小破片は、表面に条痕がなく、内面に施されたもので、比較的古い段階の所産と考えられる。破片１点でいかんともしがたいが、強いていえば子母口期あたりまで溯れるかもしれない。

前期は最も多く出土し、遺構も検出された。分布は調査区の北側に集中し、黒浜式、諸磯ａ式・諸磯ｂ式、浮島Ⅰ式、浮島II式が認められる。黒浜式については僅かであり取り立てて述べるところもない。問題を含むところは諸磯式と浮島式である。諸磯式の分析、特に細分については、近年鈴木徳雄氏、鈴木敏昭氏、今村啓爾氏らによって進められ(注１)、おおよそ見解の一致をみている。ＳＤ－008号跡から出土した諸磯式は、平行沈線、爪形文、円形刺突文で、肋骨文、木葉文、波状文が描かれている。これは諸磯ａ式を代表する文様構成である。これに25のような諸磯ｂ式（古）段階が出土している。また木葉文などはｂ式（古）段階へまで残存する文様なので、ａ式についても新しいものと考えられる。これに共伴する浮島式土器が和田哲氏のいう浮島Ⅰｂ式である（注２)。和田氏は浮島Ⅰ式を徴表する文様は「撚糸の地文・変形爪形文・波状貝殻文の３要素と見做すことができる」とし、撚糸文を除いて浮島II式以降に継承されて行くことから、従来の浮島Ⅰ式をⅠａ式とⅠｂ式に分離した。そして浮島式と諸磯式の関係について、浮島Ⅰａ式と諸磯ａ式が並行し、浮島Ⅰｂ式を諸磯ｂ式の古い部分に対比させた。新井和之氏も船橋市西の台遺跡（注３）の報文中に同様な見解を示されている。ところがＳＤ－008号跡の場合諸磯式のａ式とｂ式を比べると、ａ式の方が量が多くなっている。覆土中の遺物とはいえ一つの検討材料を提供したものと思われる。グリッド出土の第II群ｂ－２類は諸磯ｂ式（古）でｂ－３類がｂ（中）段階になると思われる。浮島式についてもII式までが認められ、III式及び興津式は出土していない。

中期は阿玉台式と勝坂式が検出された。

後期は堀之内式Ⅰ式と、加曽利Ｂ式が出土している。

７世紀後半以降の土器　全掘した住居跡が１軒も存在しないという状況で土器を取り扱うこと

は、確実性を欠くという意味で危険が大きいと思われるが、あえて遺跡の性格を探る一つの手立てとして試みるものである。

出土状況はともあれ、今回の調査で7世紀後半以降の土器を出土した住居跡は9軒ある。その9軒は、ＳＩ－001～003・005・006・009・012～014号跡である。本来なら以上の9軒から出土した土器を分類し、共伴関係から同時期のセットをとらえ、そして年代的変遷を考えていくのが一つの方法である。しかし、本遺跡の場合、住居跡の一部分から出土したものであり、しかも出土量が僅かであるので、細かく分けていけば、すべての土器が分類できてしまうおそれがある。そうした結果を招く分類は全く無意味となってしまう。そこで、分析ということからは遠ざかってしまうが、一応上総地方の目安となる編年観（注4）と照らし合わせながら、本遺跡の画期を設定したいと考える。その上で各期を構成する土器について、特に杯を中心に、どういった特徴をもつものが含まれているのかを示しておきたい。

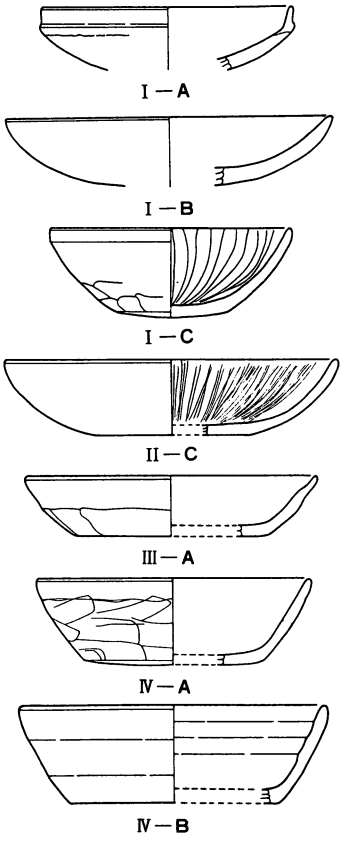
第Ⅰ期　ＳＩ－013・014号跡出土土器である。土師器の杯は下記に分類される。

A　丸底で体部と口縁部との境に稜を形作るものである。口縁部は直立するものとやや外に開き気味に立ち上がるものとが認められる。稜はかなり衰退した様子がみられる。外面の調整は、ヘラケズリの後にケズリ痕を消すような仕上げを行なっている。

B　丸底で体部と口縁部との境は明瞭でなく、全体に弱く内彎しながら立ち上がり口唇部を丸く終わらせているものである。調整は外内面ともミガキかナデとなる。

C　完全な平底とまではならないものの、底部が作られ、体部が僅かに内彎しながら立ち上がり、割と深めになるものである。内面は半球状を呈し、外面の口縁部には弱い稜がつく。

杯については以上の三つに分けておきたい。このほかの器種では、須恵器の蓋、土師器の高杯、甕、鉢が認められる。



第50図　土師器杯分類図

第Ⅱ期　ＳＩ－005・006・012号跡出土土器である。土師器の杯は下記のＡ～Ｃが認められる。

A　丸底で口縁部と体部との境に弱い稜を作るもので、形態上Ⅰ－Ａと変らない。

B　丸底で体部と口縁部との境に稜がないものでⅠ－Ｂに近いが、やや深い作りとなるものも存在する。

C　平底をもち体部が内彎気味に立ち上がるものでⅠ－Cと共通する部分を多く認める。ただ内面底部が曲面ではなく平坦となるところに違いをみいだせる。

杯以外の器種では、須恵器の高台付杯、蓋、甕、瓶、土師器の甕、鉢が伴う。

第Ⅲ期　ＳⅠ－002・003号跡出土土器である。土師器の杯は実測可能であったものが3点と少なく、器形が判るのは1点である。須恵器の杯、斜格子状暗文の施文された杯破片、甕が出土している。杯は次のような特徴を有する。

A　安定した平底になると考えられ、体部は直線的に立ち上がる。口径に比して底径も大きく、また浅めの作りとなる。体部下半は手もちヘラケズリによって調整される。

第Ⅳ期　ＳⅠ－001・009号跡出土土器である。土師器の杯はロクロ未使用のものと、ロクロを使用して調整しているものとが存在する。また、両跡は永田・不入窯（注5）の製品が出土している点で共通している。土師器の杯は次の二つに分けられる。

A　ロクロ未使用で、底部はやや曲面となり、体部は直線的に立ち上がりやや深めの作りとなる。体部外面の調整は、ヘラケズリの上に軽いミガキを施して仕上げている。

B　ロクロ調整で仕上げられるもので、平底で体部は僅かに内彎しながら立ち上がる。外面のロクロ目は弱い。

以上Ⅰ～Ⅳ期に分け、他の遺跡の遺物と対比するため土師器杯についてのみ分類を行なった。さて、第Ⅰ期から第Ⅳ期の年代の問題であるが、これについて次に示しておきたい。

まず第Ⅰ期である。鬼高式に近い杯を有することと、天井部から稜をもたずに口縁部に移行する須恵器が出土している。また、平底を有し、その内面に放射状の暗文を施す杯が伴う。杯については第Ⅱ期の杯と同じような形態を示している。しかし第Ⅱ期にみられるような、底部中央が高台の高さより突出する高台付須恵器杯は認められない。このようなことから第Ⅰ期は7世紀末～8世紀初頭に比定しておきたい。

第Ⅱ期は第Ⅰ期の年代を決めるためにもさらに有効な遺物が必要である。先にいったとおり土師器の杯に関してはⅠ期と大差はないのである。そこで注目されるのが底部中央が突出する高台付須恵器杯である。ＳⅠ－005号跡からは、高台付杯が出土している。図示した4点はいずれも高台部分のみで、全体の器形が不明であるのは惜しい。この高台付杯は、湖西地方からの搬入品とも考えられるものである。その一つに「里長」の墨書がある。これは極めて重要である。「里長」そのものが興味深いところであることはいうまでもないが、この土器が大宝令以後国郡里制施行期間である霊亀元年（715年）までの間に使用されていた、という使用開始時の下限が求められる点でより貴重になってくる。この高台付杯以外ではＳⅠ－006号跡から「かえり」をつけない須恵器の蓋などが出土している。以上のことから本期は、やや幅を広くみても8世紀の第1四半期までとしておきたい。

第Ⅲ期は、斜格子状暗文を有する杯破片と、下総においても出土する雲母や石英を多く含む

須恵器杯という量のうえで根拠の弱い資料を基に設定した。第IV期との差は、土師器でみれば、ロクロを使用して調整しているものが含まれないことと、永田・不入窯産の須恵器がないところである。斜格子状暗文を有する杯については、佐久間豊氏がA～Fのタイプに分類し、実年代の検討を行なっている(注6)。残念ながら本跡からは小破片でしか出土していないので、佐久間氏の分類に当てはめるには多少無理がある。土師器甕などの特徴から、袖ケ浦町清水川台遺跡（注7）出土の第Ⅰ群土器と共通する部分を見い出すことができる。したがって本期については、決め手に欠くところもあるが8世紀第2四半期という年代を与えておきたい。

第IV期は、ロクロ未使用の土師器杯と、ロクロ使用の土師器杯、それに永田・不入窯産の製品で特徴づけられる。シンポジウム資料（注8）でいうⅡb期に相当しよう。永田・不入窯の操業開始年代について、須田勉氏は、「国分寺運営上必要な仏器、日常汁器を確保するために成立した」（注9）とし、成立時期の上限を741年に置いている。上総地方のⅡb期もこうした在地産須恵器によって画期を設定している。Ⅱb期の年代に従えば本期は8世紀第3四半期ということになる。

「里長」の墨書土器について　ＳＩ－005号跡から出土した、高台付須恵器杯の底部に「□里長」の墨書が認められた。しかし、土器が二つに割れたところに文字が書かれていて、しかも墨書自体がかなり薄いため、肝心な里名を記したと思われる一字目がはっきりしなくなっている。この墨書の「里」は取りも直さず、大宝令で確定された国郡里制の、その地方行政の最末端の里と考えられるものである。里、のちの郷は50戸で構成され、里長をおいたとされている。平城宮下層出土の「五十戸家」と書かれた墨書は、五十戸家を「里家」と解釈できることから里の行政の拠点となる施設があった可能性を示している（注10)。今回の調査は線の発掘であり、遺跡全体の性格づけが不可能であるから、短絡的に「里家」に関連する遺跡とすることはできない。また、土器は移動がたやすくできるという性質があることを考慮しておかなければならない。さて、そうしたことを念頭に置き本遺跡に里長が存在していたとなると、行政区画ではどこに含まれるであろうか。可能性が最も高いのは、上総国市原郡海部である。海部郷は一文字で「海」とする場合もあるようで（注11)、本墨書の一字目に「氵」らしき偏を認めるところは欲目であろうか。仮に海部郷としても、現在遺跡の北西4㎞に「海士」の地名が残っており、海部郷の比定地はそちらが有力である。しかし、里の下に複数の集落が存在した可能性もあることから（注12)、本遺跡が行政単位である海部里に含まれていたことは十分考えられる。いずれにせよ里の役所が調査された例は、里長の木簡を出土した兵庫県氷上郡春日町山垣遺跡（注13）のみであると思われ、里長に関して一つの追加資料を呈示したことになる。

2　遺構について

トレンチ調査に近い状況で検出した遺構であるため、全掘したものが少なかった。また、土

坑などは遺物が少量であるため、時期の比定やその性格を明確にし得なかったところもある。しかし、遺構の分布状況は遺跡全体の傾向を知るうえで大きな成果をあげたものと思われる。

住居跡は16軒検出した。縄文時代に属するＳＩ－016号跡は、円形か楕円形を呈する平面形を有する。壁はゆるやかに立ち上がり、壁溝は存在しない。こうした掘り方は、船橋市飯山満東遺跡（注14）等で検出されている前期住居跡と共通するものである。弥生時代の住居跡はＳＩ－008・010号跡の２軒である。これもまた部分的な検出で、全体の平面形は明らかでない。２軒とも検出面からの掘り込みは大変浅く、壁下に壁溝は認められない。後期の久ケ原期では、平面形を円形か、あるいは四辺にやや張りをもつ隅丸長方形の形にとるケースが多い。そういうことから考えるとＳＩ－008号跡は円形に近い形になり、ＳＩ－010号跡が隅丸長方形になる可能性が大きい。７世紀末から８世紀初頭、遺物の項で述べたＩ期の住居跡は４本柱を設けるものと考えられる。ＳＩ－013、014号跡両跡とも壁下に溝がめぐらされている。平面形はＳＩ－013号跡は方形になることが確実である。II期以降奈良時代の遺構をみると、ＳＩ－001号跡には柱穴が発見されず、ＳＩ－009号跡のように、柱穴が対角線上にのっていない例が存在する。また、ＳＩ－005・012号跡の柱穴は底面に据え方を設けかなりしっかりした掘り方を示すものもある。いずれも壁下に溝が認められる。ＳＩ－004・007・011・015号跡は遺物が少なく時期の比定が難しいが他の遺構と比較すると、ＳＩ－004・015号跡は土師器をもつＩ期以降の遺構に属すると考えられ、ＳＩ－007・011号跡は弥生時代の所産となることが類推される。

溝は一部の検出では、その存在が明らかになっただけで多くは述べられない性格がある。しかしＳＤ－001・007号跡については方形周溝状遺構になることは明らかで、住居跡を切っていることから、ある程度の年代について推定することを可能にしている。掘り方が丁寧で幅が狭いという点が特徴である。土坑はＳＤ－008号跡が縄文前期になると考えられる。楕円形を呈し、かなりの深さを有している。

以上遺物と遺構について、いくつかの成果を簡単にまとめた。最後に、本遺跡の調査が、今後養老川流域の調査に僅かでも寄与するところがあるとすれば、今回の調査は意義があったものと思われる。

注

1　鈴木徳雄　「縄文土器について」『白石城』　埼玉県遺跡調査会報告書第36集　昭和54年10月　埼玉県遺跡調査会

鈴木敏昭　「諸磯ｂ式土器の構造とその変遷（再考）」　『土曜考古』第２号　昭和55年６月　土曜考古学研究会

今村啓爾　「諸磯式土器」　『縄文文化の研究』第３巻　昭和57年８月　雄山閣出版

2　和田　哲　「浮島系土器の諸問題」　『古和田台遺跡』　昭和48年３月　船橋市教育委員会

3　新井和之ほか　『西の台　（第２次）』　昭和60年３月　船橋市遺跡調査会

4　佐久間　豊・豊巻幸正・笹生　衛　「旧上総国における奈良・平安時代土器編年試案」シンポジウム資料『房総における奈良・平安時代の土器』　昭和58年10月　史館同人を参考にしたほか、年代について関口達彦・笹生　衛氏より御教示を得た。

5　大川　清ほか　『千葉県市原市永田・不入窯跡調査報告書』　昭和51年３月　千葉県教育委員会

6　佐久間　豊　「斜格子状暗文を有する土師器杯について」　『史館』第15号　昭和58年10月

7　佐久間　豊ほか　『清水川台遺跡発掘調査報告書』　昭和58年３月　袖ケ浦町・財団法人君津郡市文化財センター

8　注４に同じ

9　須田　勉　「坊作遺跡の調査」　『上総国分寺台発掘調査概報』Ⅳ　昭和52年３月　上総国分寺台発掘調査団

10　山中敏史・佐藤興治　「郷（里）の役所」古代日本を発掘する－５『古代の役所』　昭和60年６月　岩波書店

11　池邊　彌　『和名類聚抄郡郷里驛名考證』　昭和56年２月　吉川弘文館

12　岸　俊男　「古代村落制度の問題」　『日本古代籍帳の研究』所収　昭和54年９月　塙書房

鬼頭清明　「（村）はどんなものであったか」　古代日本を発掘する－６『古代の村』昭和60年１月　岩波書店

13　兵庫県教育委員会　『山垣遺跡』　近畿自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報　昭和59年３月

14　清藤一順ほか　『飯山満東遺跡』　昭和50年10月　房総考古資料刊行会

写真図版

門脇遺跡と周辺の航空写真（昭和50年撮影）　　1：10,000

1．遺跡遠景
（図版１に示した位置から）

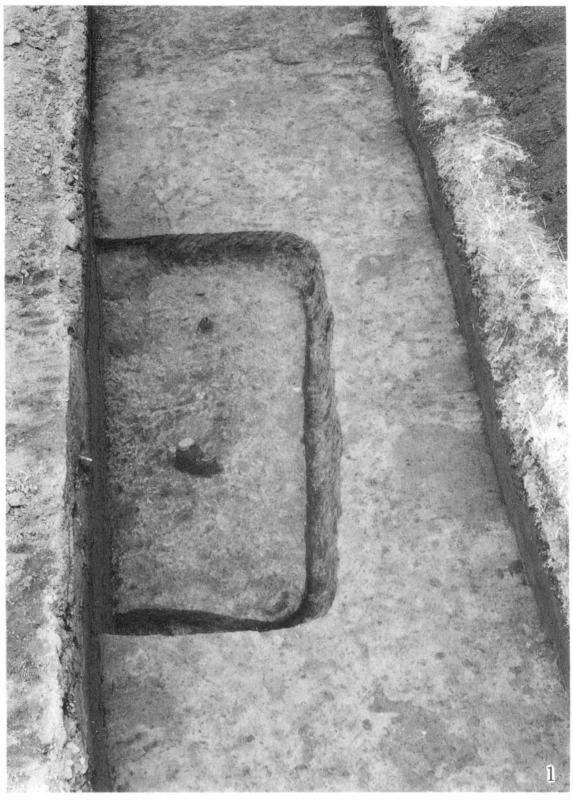
2．遺跡近景
（調査終了後北から）

3．遺跡近景
（調査終了後南から）

1．遺構検出作業
（XI区，南から）

2．遺構検出状況
（V区，南から）

3．遺構検出状況
（IX区，南から）



1．ＳＩ－001号跡（南から）

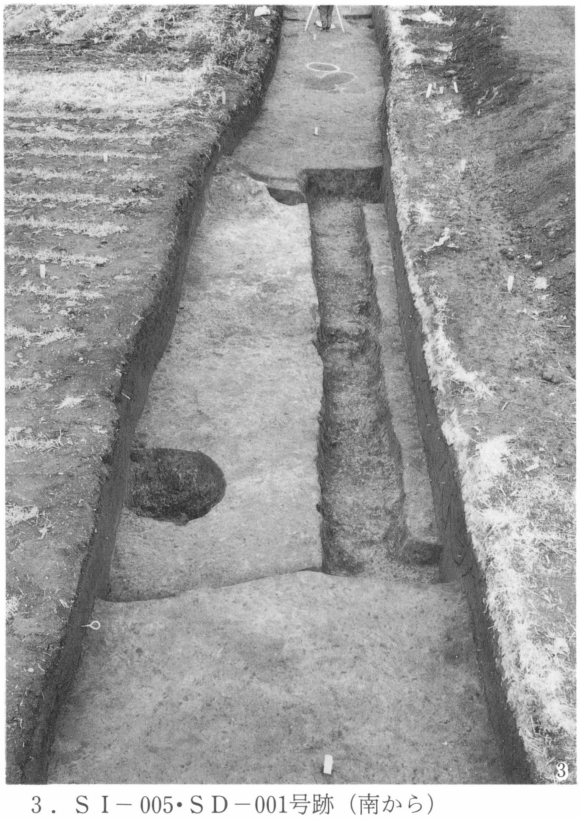
2．ＳＩ－001号跡遺物出土状況

3．ＳＩ－002号跡（南から）

4．ＳＩ－002号跡カマド検出状況
及び遺物出土状況

1．ＳＩ－003号跡（南から）

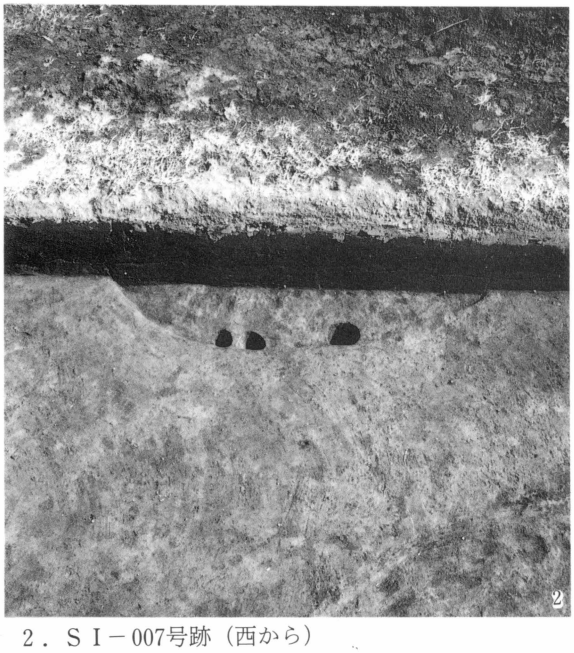
2．ＳＩ－004号跡（南から）



3．ＳＩ－005・ＳＤ－001号跡（南から）

4．ＳＩ－006号跡（南から）

1．ＳＩ－007･008号跡遺物出土状況（南から）



2．ＳＩ－007号跡（西から）

3．ＳＩ－008号跡（東から）

1．ＳＩ－009･010号跡（南から）

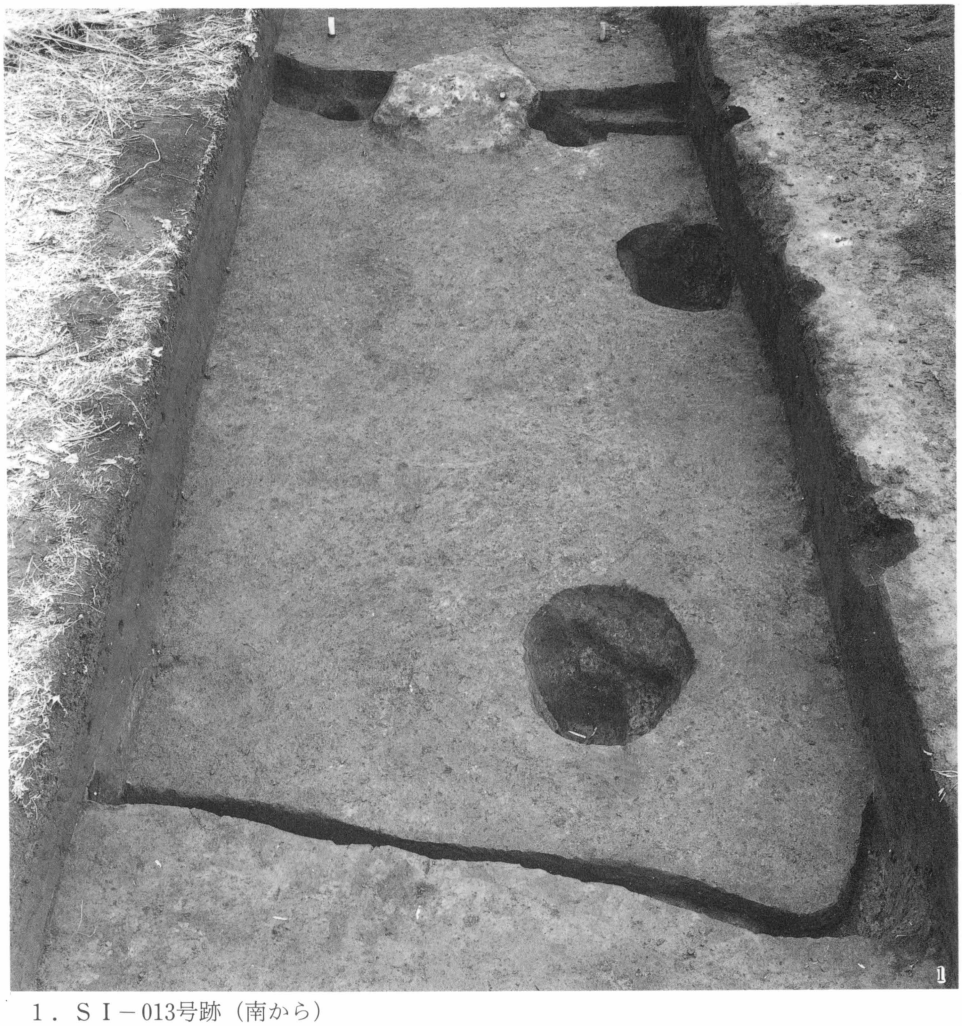
2．ＳＩ－009号跡カマド土層断面

3．ＳＩ－010号跡炭化材検出状況

1．ＳＩ－012号跡（南から）

2．ＳＩ－012号跡掘り方

3．ＳＩ－012号跡柱穴



1．ＳＩ－013号跡（南から）

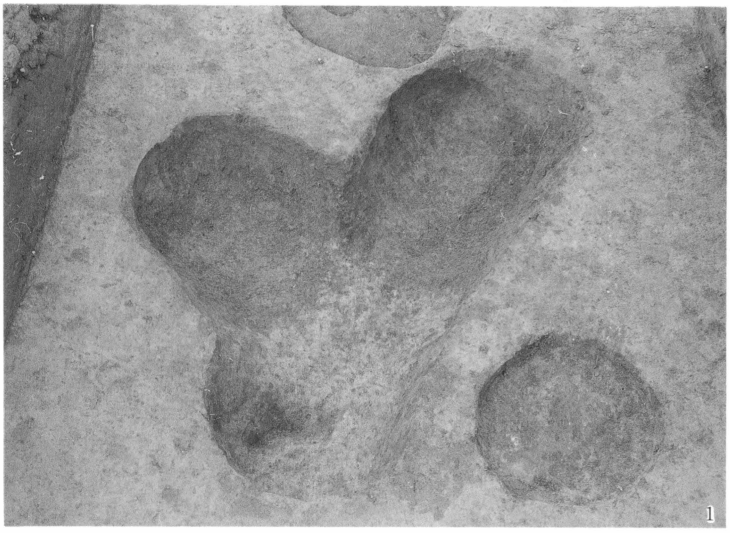
2．ＳＩ－014・ＳＤ－007号跡（南から）

3．ＳＩ－014号跡遺物出土状況（北西から）

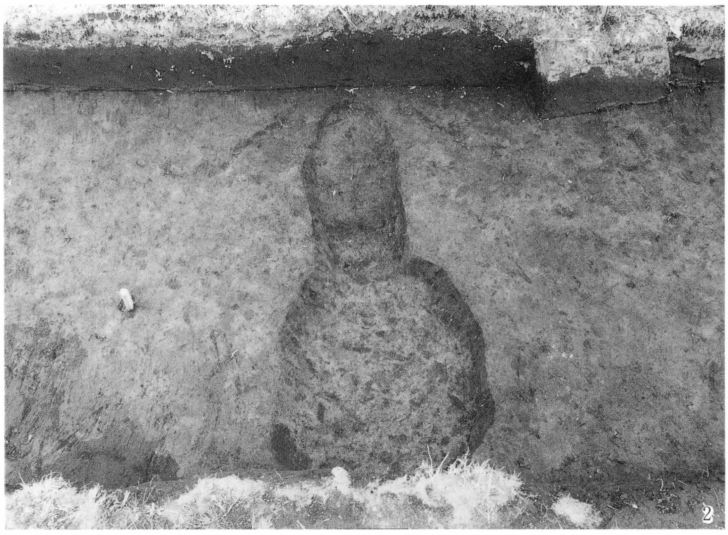
1．ＳＩ－015号跡（南西から）

2．ＳＩ－016・ＳＫ－007号跡（南から）

3．ＳＢ－001号跡（南から）

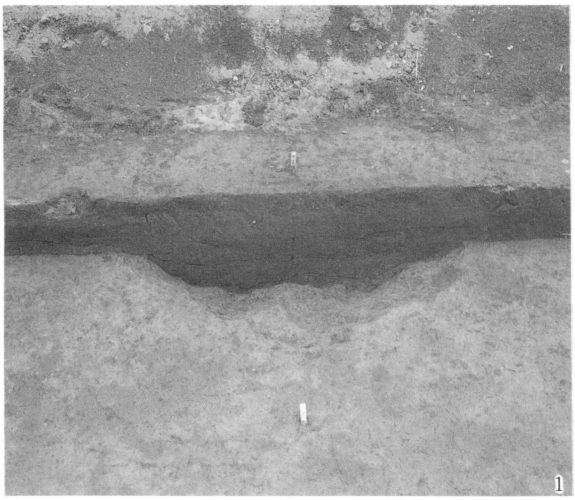


1．ＳＦＰ－001号跡（南から）



2．ＳＦＰ－002号跡（西から）

3．ＳＫ－001号跡（西から）

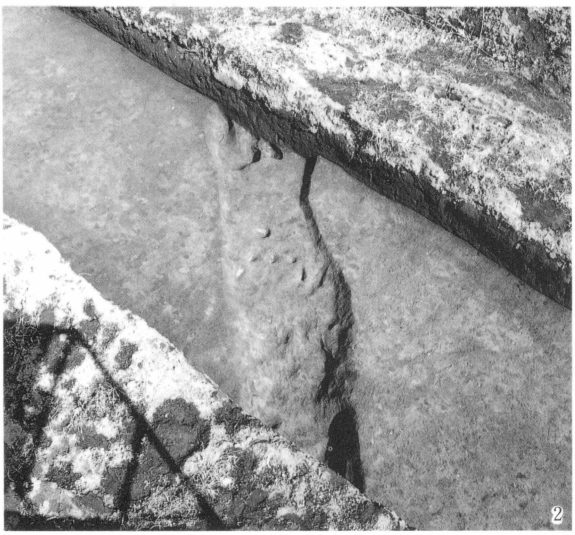


1．ＳＫ－002号跡（西から）

2．ＳＫ－003号跡（西から）

3 ．II区内土坑全景（南から）

1．ＳＤ－008号跡（南から）

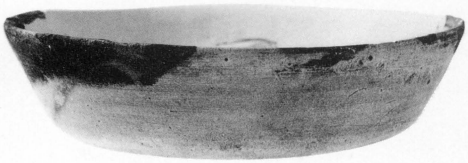


2．ＳＤ－002号跡（南西から）

3．ＳＤ－004号跡（東から）

4．ＳＤ－003号跡（東から）

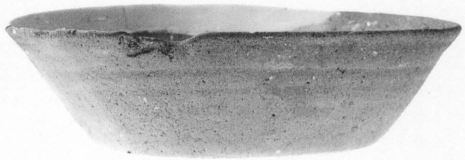
5．ＳＤ－005号跡（西から）



1
001

2
001

3
001



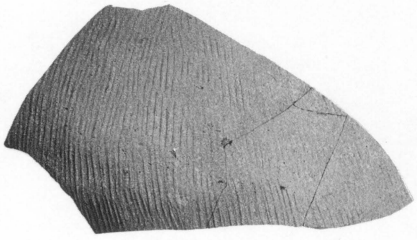
4
002

5
002

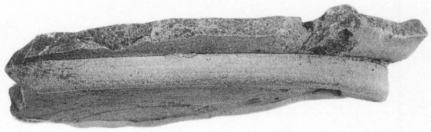
6
002

7
003

9
005



8
003

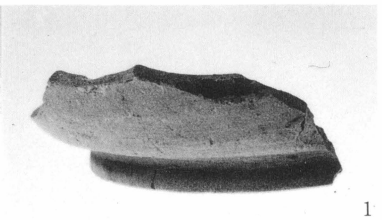


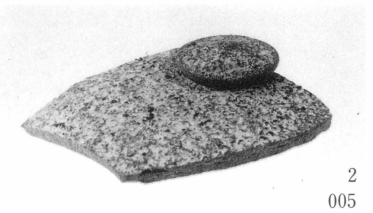
10
005

S I －001・002・003・005号跡出土遺物

「□里長」

ＳＩ－005－４墨書

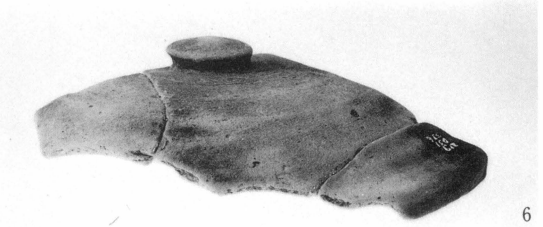

1
005


2
005

3
005

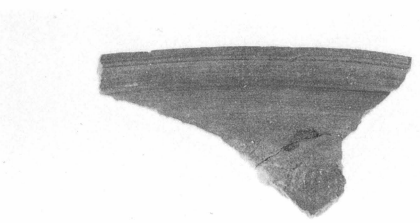
4
005

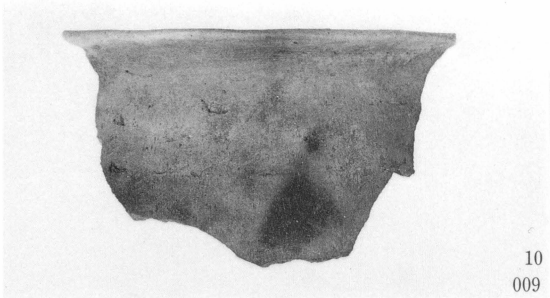
5
005

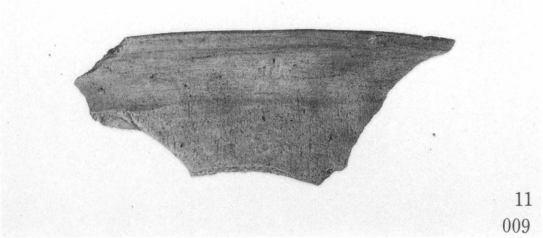

6
006

7
006

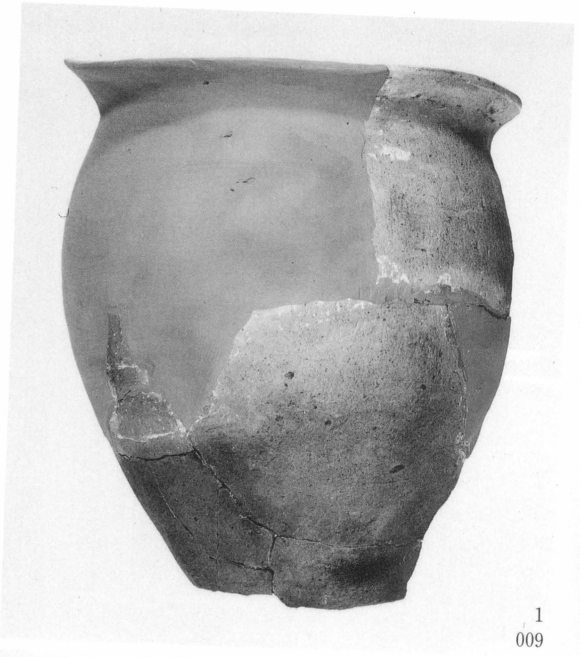
8
009


9
009

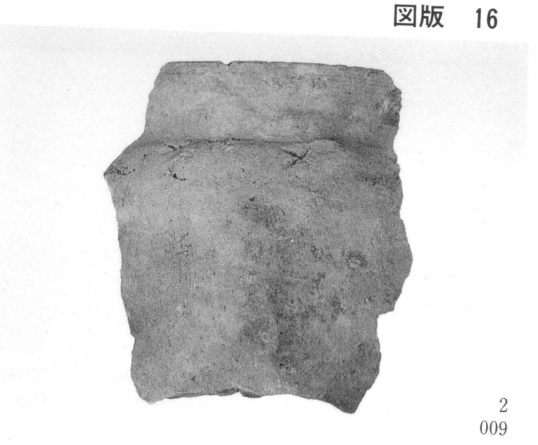

10
009


11
009

ＳＩ－005－４墨書，ＳＩ－005・006・009号跡出土遺物

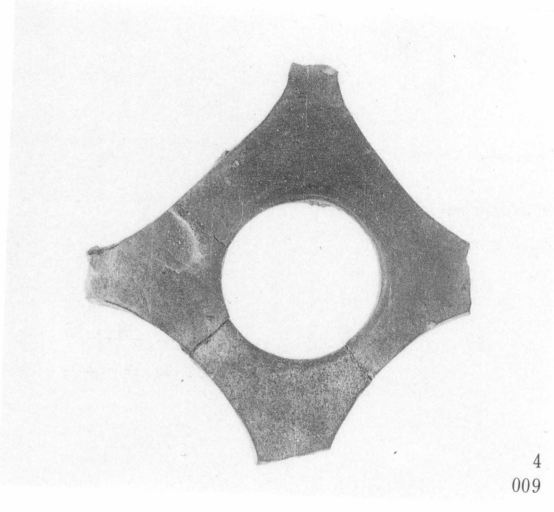


1
009

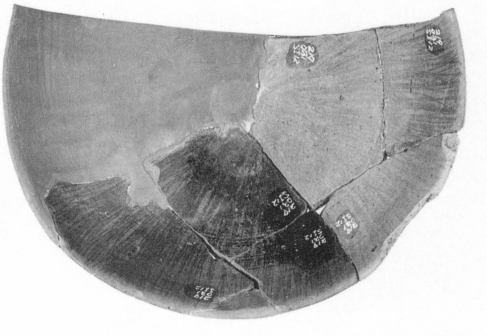


2
009

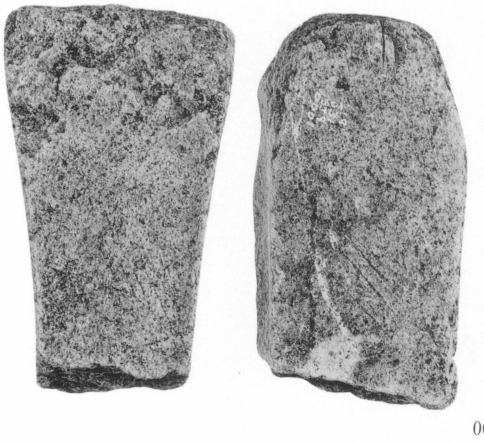
3
009



4
009



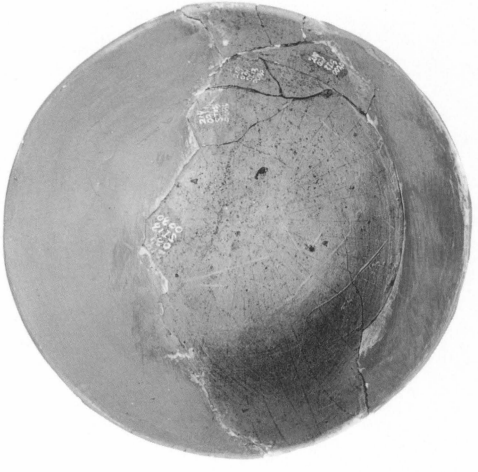
6
012



5
009

7
012

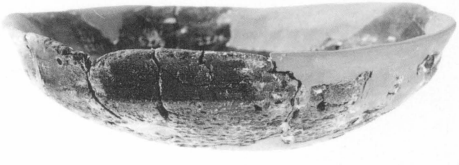
ＳＩ－009・012号跡出土遺物



1
013

2
013

3
013



5
014

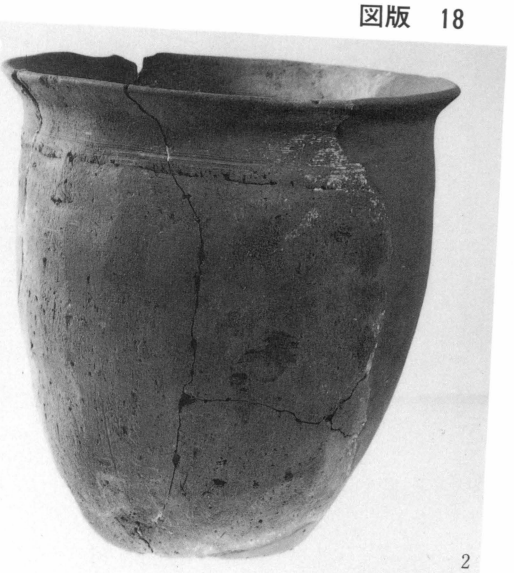
4
014

6
014

7
014

ＳＩ－013・014号跡出土遺物

1
014



2
014

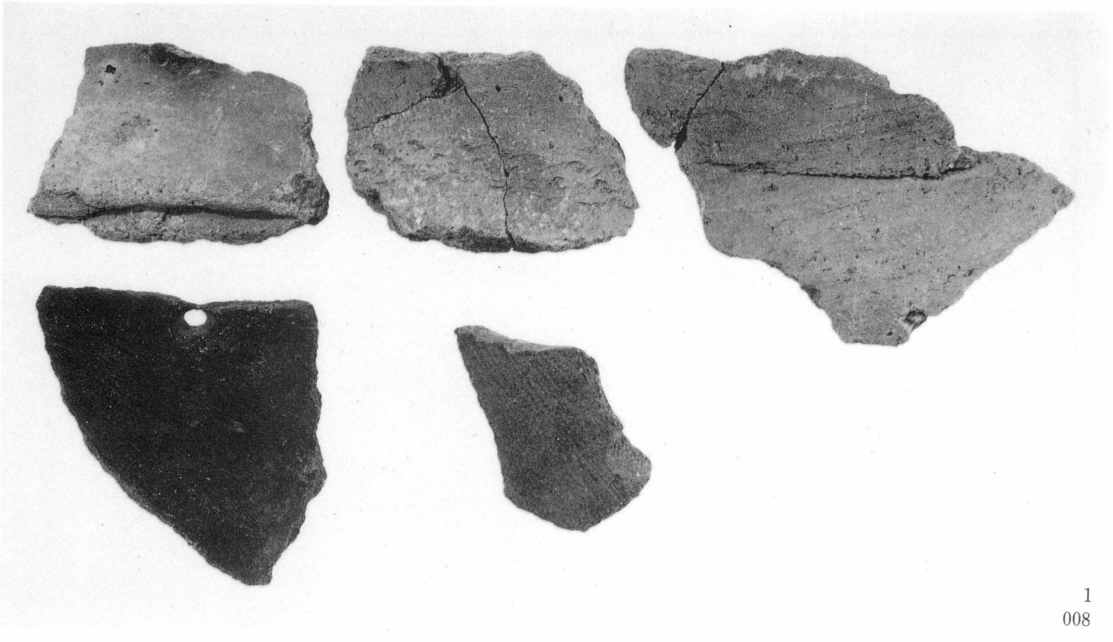
3
014

4
014

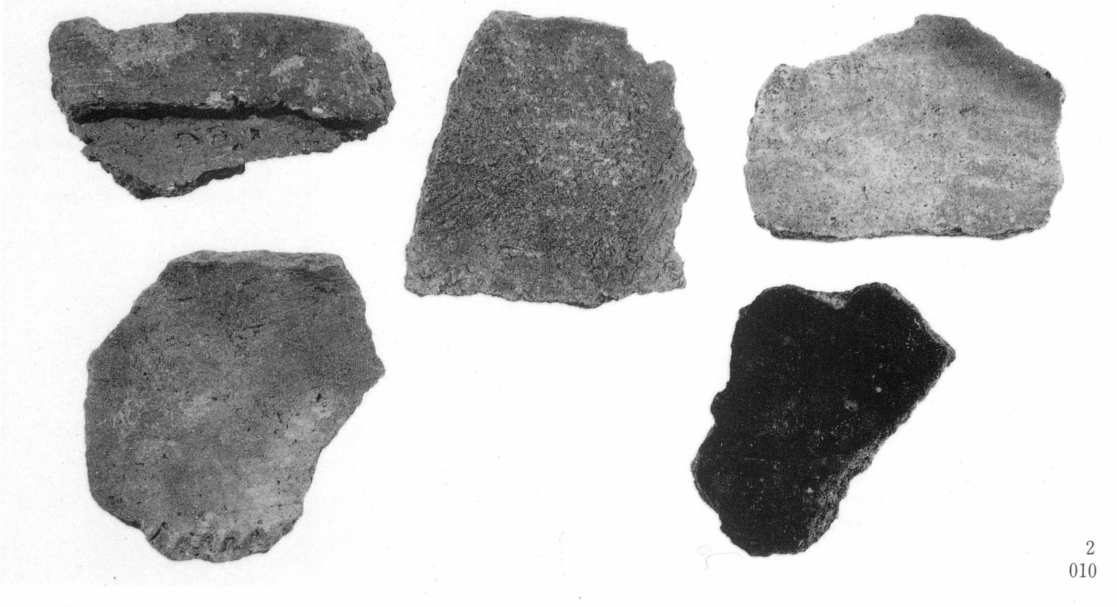
5
014

6
016

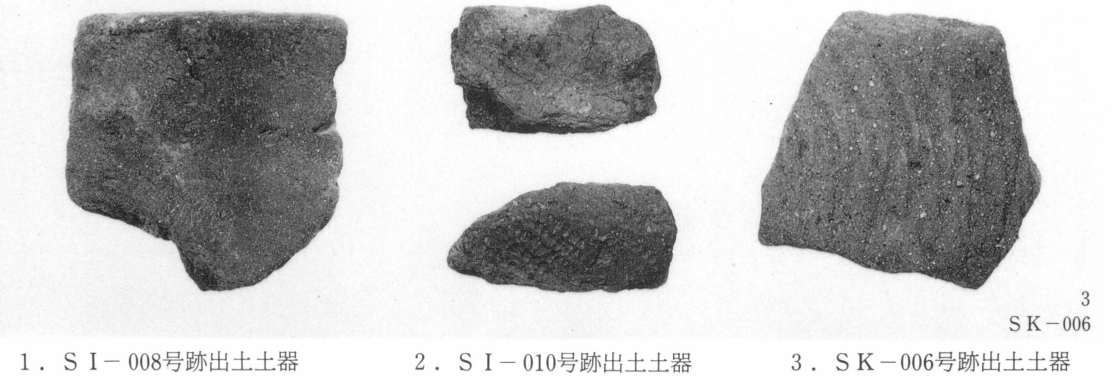
S I－014・016号跡出土遺物



1
008

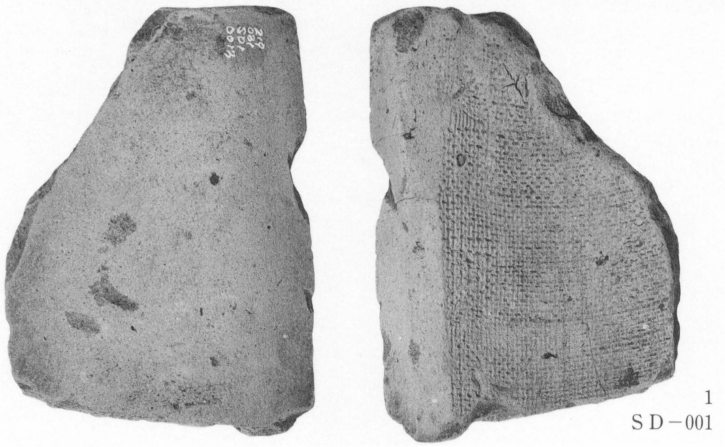


2
010

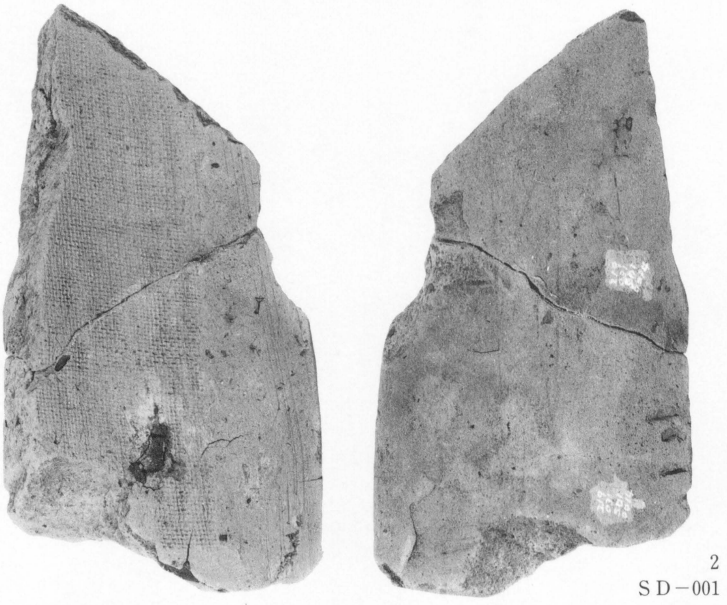


3
SK－006

1．ＳＩ－008号跡出土土器　　2．ＳＩ－010号跡出土土器　　3．ＳＫ－006号跡出土土器

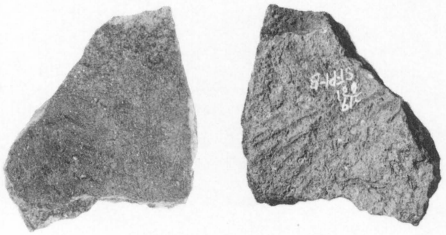


1
ＳＤ－001

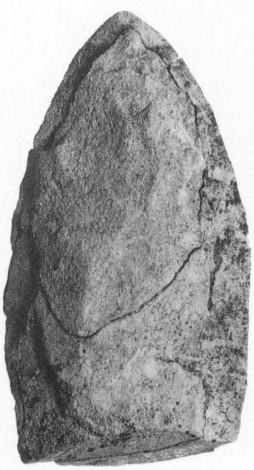


2
ＳＤ－001

3
ＳＤ－002

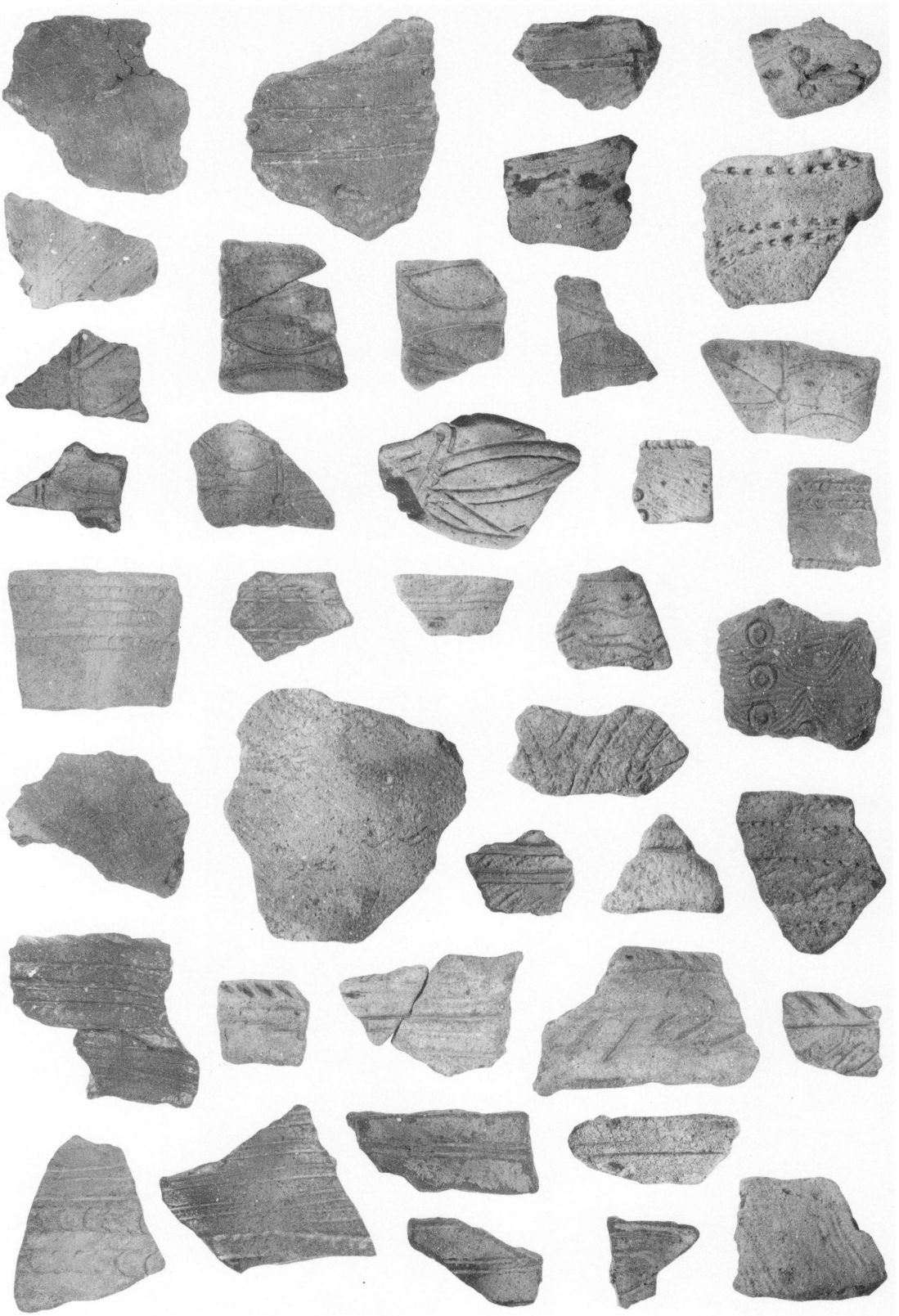


4
ＳＦＰ－001

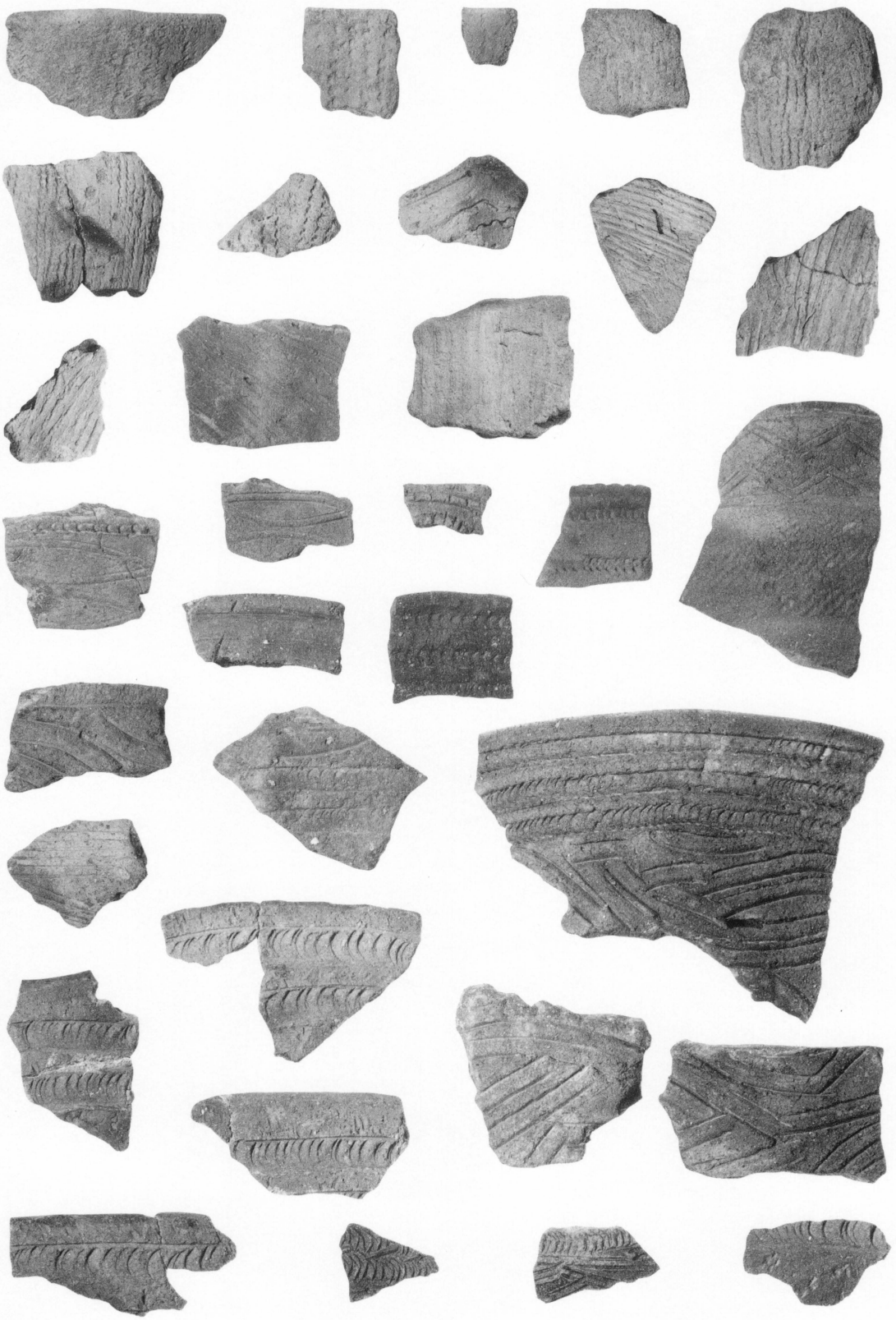


5
ＳＦＰ－001

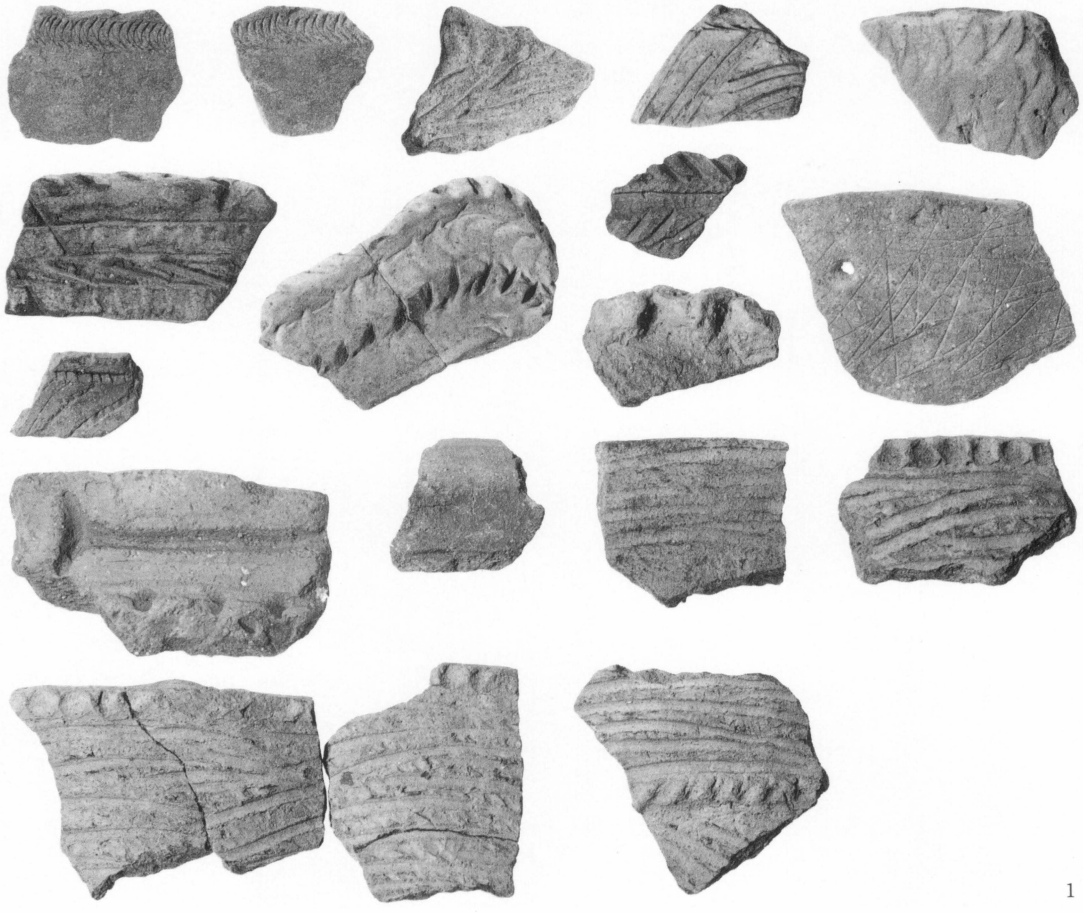
ＳＤ－001・002号跡出土遺物，ＳＦＰ－001号跡出土遺物



ＳＤ－008号跡出土遺物



グリッド出土土器①



1

2

1．グリッド出土土器②

2．グリッド出土石器

昭和60年12月20日　印刷
昭和60年12月25日　発行

市原市門脇遺跡

— 高滝導水管事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 —

発行　千葉県水道局
千葉市長洲１－９－１
財団法人　千葉県文化財センター
千葉市葛城２－10－１
印刷　株式会社　弘文社
市川市市川南２－７－２

『市原市門脇遺跡』正誤表　100部

ページ	箇所	誤	正
5	注6	半田耕之助	米田耕之助
13	上から3行目	ヘラケナデ	ヘラナデ
28	下から8行目	外側Pが	外側にPが
38	上から10～11行目	1は須恵器の杯	1は須恵器の蓋
45	下から4行目	細片である	細片である。
56	上から1行目	遺構	遺物
68	下から15行目	須恵器が	須恵器の蓋が